

例 言

- 1 本書は、中央大学文学部考古学研究室調査報告書 5 大日野原遺跡（県遺跡番号相模原市No.465）第4次調査報告書である。
- 2 大日野原遺跡第4次調査の発掘調査および整理事業においては、小林謙一が研究代表である科学研究費助成事業基盤(C)2012年度「炭素14年代による縄紋集落の研究」(22520774)、同基盤研究(B)2013-2017年度「炭素14年代測定による縄紋文化の枠組みの再構築-環境変動と文化変化の実年代体系化」(25284153)、2018年-2020年度「東アジア新石器文化の実年代体系化による環境変動と生業・社会変化過程の解明」(18H00744)、中央大学特定課題研究2014・2018年度「縄紋集落のセツルメント研究」、中央大学基礎研究費「縄紋文化の基礎的研究」中央大学人文科学研究所共同研究2016-2019年度「考古学と歴史学」を用いている。また、調査期間の一部については中央大学文学部「考古学実習」や「日本史学演習(17)」の活動の一環として、中央大学考古学研究会のサークル活動としておこなっている。また、調査をおこなうに当たっては、相模原市教育委員会と相互研究協力の協定を交わし、その一環として相模原市教育委員会・市立博物館の様々な協力を得た。整理事業は中央大学においておこない、出土資料・記録は中央大学に一時保管している。調査研究が終わった後、相模原市立博物館に移管する予定である。
- 3 遺跡名は大日野原（おびのつばら）遺跡、所在地は神奈川県相模原市緑区大日野原ケッサイコ724である。土地所有者の鈴木實（～2013年）、鈴木裕子（2014年～）から許可を得て調査をおこなった。
- 4 調査面積は、186.93㎡である。
- 5 発掘調査は以下のようにおこなった。
発掘調査期間 2012年7月29日～8月8日、2013年7月29日～8月8日、2014年7月28日～8月8日、
2015年7月30日～8月7日、2017年3月13日～3月23日
調査主体 中央大学文学部（文学部長 河西良治（2012年度～2013年度）、都築 学（2014年度～2016年度））
調査担当者 小林謙一（中央大学 文学部）
- 6 本書は小林謙一が指導し、各担当者が執筆を行い、小林尚子が編集を行った。文責は文末に記した。
- 7 整理事業期間は、2018年9月1日～2020年5月31日である。
- 8 発掘調査における基準杭・グリッド設定は、GPSを用いて国土地理院の関東地区IX系の座標に設定した。
- 9 遺物の取り上げおよび遺物分布遺構図作成については、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。
- 10 写真については、小林謙一・金子悠人・中川真人が撮影した。

凡 例

- ・本書の図1で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行2.5万分の1地形図を複製したものをを使用した。
- ・縮尺については、各図にスケールを付した。
- ・土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2001年版 による。

目 次

例 言
凡 例
目 次

1	調査の経緯と遺跡の概要	3
	（1） 調査の目的と経緯	3
	（2） 調査の方法と概要	5
	（3） 基本層序	14
2	検出された遺構と遺物	15
	（1） 縄紋時代	15
	（2） 古代	55
	（3） 中近世以降	61
3	自然科学分析	63
	（1） 大日野原遺跡第 4 次調査出土試料の炭素 14 年代測定・同位体比 小林 謙一・西本志保子・坂本稔・田代直也・東京大学総合研究博物館年代測定室	63
	（2） 大日野原遺跡から出土した石器の残存デンプン粒分析 渋谷綾子	70
	（3） 大日野原遺跡出土縄文後期土器の胎土分析 河西 学	75
	（4） 大日野原遺跡における光ルミネッセンス法を用いた土器資料の被熱温度推定 下岡順直・小林謙一	87
4	まとめ	90

報告書抄録
写真図版

1 調査の経緯と遺跡の概要

(1) 調査の目的と経緯

2012 年度より実施していた科学研究費補助金基盤 C および基盤 B による考古学的調査の一端として、相模原市大日野原遺跡の第 4 次発掘調査を計画した。これは、2008 年～2011 年度に実施した大日野原遺跡第 3 次発掘調査の東約 30m の台地東斜面の地点で集落の東外縁部と推定される地域に当たる。2012 年度は、縄紋時代中期竪穴住居の確認を目的として計画し、トレンチ調査をおこなった。あわせて中央大学における考古学教育の一環とするために、中央大学文学部を調査主体とし、上記科学研究費の研究代表である、中央大学文学部日本史学専攻の小林謙一教授を調査担当として、文化財保護法 92 条第 1 項に基づく発掘調査の届出を行い、受理を受けた。2008 年度～2011 年度の第 3 次調査は旧津久井郡四町との合併に伴い、津久井地域の遺跡に関する資料収集と調査を行っていた相模原市立博物館と共同で実施することとなり、2008 年 7 月に相模原市教育委員会と中央大学文学部との間で「大日野原遺跡の共同調査に関する協定書」を取り交わし、旧藤野町が調査をおこなった地点（藤野町 1995）の一部に当たる台地中央部やや東側の地点とした。今回の調査は、中央大学考古学研究室として、第 3 次発掘調査成果（中央大学考古学研究室 2013・2014）を基に、さらに集落全体の範囲を定める目的で、東側台地斜面部にかけての地点を調査することとした。具

表 1 発掘調査に係る調整および届出等の文書

文化財保護法第 9 2 条に基づく発掘調査の届出					
文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
発掘調査の届出 (24 年度)		平成 24 年 6 月 11 日	中央大学文学部長 河西 良治	神奈川県教育委員会教育長	相模原市経由
発掘調査の届出に対する指示通知	50032 号	平成 24 年 7 月 19 日	神奈川県教育委員会教育長	中央大学文学部長 河西 良治	相模原市経由
発掘調査の届出 (25 年度)		平成 25 年 6 月 14 日	中央大学文学部長 河西 良治	神奈川県教育委員会教育長	相模原市経由
発掘調査の届出に対する指示通知	50026 号	平成 25 年 6 月 25 日	神奈川県教育委員会教育長	中央大学文学部長 河西 良治	相模原市経由
発掘調査の届出 (26 年度)		平成 26 年 7 月 14 日	中央大学文学部長 都筑 学	神奈川県教育委員会教育長	相模原市経由
発掘調査の届出に対する指示通知	50039 号	平成 26 年 7 月 25 日	神奈川県教育委員会教育長	中央大学文学部長 都筑 学	相模原市経由
発掘調査の届出 (27 年度)		平成 27 年 5 月 11 日	中央大学文学部長 都筑 学	神奈川県教育委員会教育長	相模原市経由
発掘調査の届出に対する指示通知	50011 号	平成 27 年 6 月 1 日	神奈川県教育委員会教育長	中央大学文学部長 都筑 学	相模原市経由
発掘調査の届出 (28 年度)		平成 29 年 1 月 31 日	中央大学文学部長 都筑 学	神奈川県教育委員会教育長	相模原市経由
発掘調査の届出に対する指示通知	50084 号	平成 29 年 2 月 23 日	神奈川県教育委員会教育長	中央大学文学部長 都筑 学	相模原市経由
出土品の手続き					
文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
		平成 24 年 8 月 8 日	中央大学文学部長 河西 良治	相模原警察署	
		平成 25 年 8 月 16 日	中央大学文学部 小林 謙一	相模原警察署	
		平成 26 年 8 月 25 日	中央大学文学部長 都筑 学	相模原警察署	
		平成 27 年 8 月 20 日	中央大学文学部長 都筑 学	相模原警察署	
		平成 29 年 3 月 27 日	中央大学文学部長 都筑 学	相模原警察署	
出土文化財保管証		平成 24 年 8 月 8 日	中央大学文学部長 河西 良治	神奈川県教育委員会教育長	
		平成 25 年 8 月 28 日	中央大学文学部長 河西 良治	神奈川県教育委員会教育長	
		平成 26 年 9 月 8 日	中央大学文学部長 都筑 学	神奈川県教育委員会教育長	
		平成 27 年 8 月 20 日	中央大学文学部長 都筑 学	神奈川県教育委員会教育長	
		平成 29 年 3 月 27 日	中央大学文学部長 都筑 学	神奈川県教育委員会教育長	

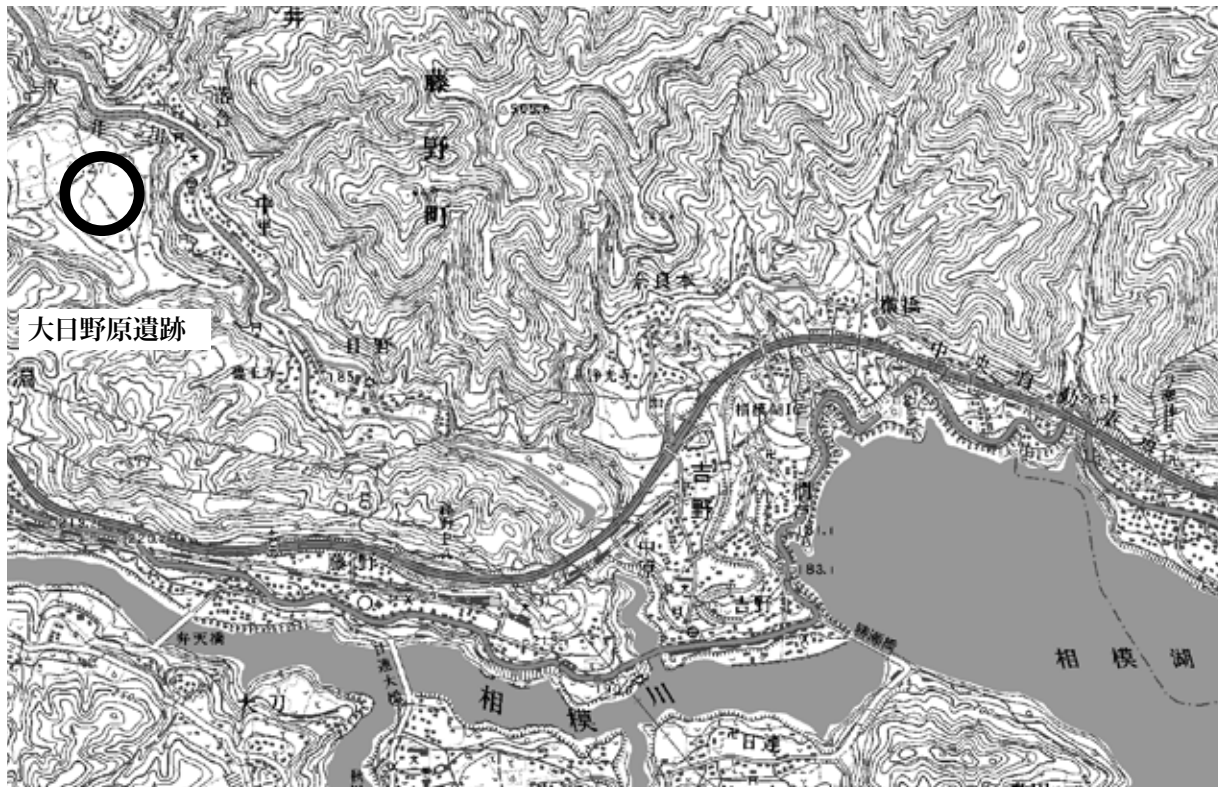


図1 大日野原遺跡の位置 (1/25000)



図2 調査区の位置 (1/2500)

体的な調査地点は、遺跡の範囲内とされ、現在は耕作をおこなっていない地点であるとし、地主の鈴木裕子氏の発掘調査承諾書を得た。表1に、発掘調査における申請について示す。発掘調査においては、相模原市博物館、周辺住民・農地所有者、相模原市教育委員会、藤野中央公民館の協力を得た。

大日野原遺跡における過去の調査は、1953年の立川市立高等学校（現 東京都立北多摩高等学校）によるものが最初とされ（第1次調査）、本調査地の北西約50m付近で加曽利E式期の竪穴住居跡が検出されているが、調査の詳細については不明である（藤野町文化財保護委員会編 1978）。

1987年には、藤野町教育委員会が主催する調査団が、本調査地において幅1.6m、長さ58mのトレンチ調査を実施し（第2次調査）、平安時代の竪穴住居跡3基のほか（1基は遺構確認面での確認のみ）、縄文時代中期中葉から後期初頭の遺物を検出している（滝澤ほか 1988）。なお、第2次調査のトレンチと推定される痕跡が第3次調査Bトレンチにおいて確認されている。

中央大学がおこなった第3次調査については、報告書を参照されたい（中央大学考古学研究室 2013・2014）。

(2) 調査の方法と概要

2012 年度調査では、地区割に合わせて東西方向および南北方向のトレンチを設定し、屋外ウメガメ遺構である SU01 を確認した。2013 年度は、トレンチにおいて包含層が確認された地点を拡張し、遺構確認に努めた。2014 年度より遺物集中が確認された地点を中心に掘り下げ、SI14 を確認した。2015・2016 年度において、SI14、SK01 の遺構調査をおこない、本地点の調査を終えた。

なお、2013-2015 年度は藤野中央公民館の企画により、子供発掘体験を親子 10 組程度を招いて実施した。体験発掘では、幅 2 m 長さ 6 m の範囲とし、包含層上部を 10 cm 程度掘り下げた。また、2014 年度は、地域住民を対象として現地説明会をおこなった。また 2013 年度には、「遺跡・遺構の中の遺物」ワークショップ研究会を現地においておこなった。

2012 年度調査概要

縄紋時代としては、縄紋時代後期堀之内式土器を埋設した埋嚢 SU01 が 1 基検出された。この埋嚢を東側として、E トレンチ西側および F トレンチ北側・南側にかけて重複する竪穴住居のプランが認められ、SI12 住居跡とした。また北側に別のプランも認められ精査したが、結果的に SI12 を含めて遺構として認められなかった。

他に上面からのプラン確認で G トレンチと E トレンチ直行部の G トレンチ北側から E トレンチ東側の斜面落ち込み際に竪穴住居らしきプランが部分的に認められ、竪穴住居跡の可能性はあるが、部分的な確認のため次年度以降の確認とした。そのプランに対応する可能性がある落ち込みとして、E トレンチ東端部の斜面落ち際に当たる層位確認用サブトレンチで、縄紋時代包含層に相当する層位において断層状の落ち込みが検出されているが、全体の広がりや規模が不明であり、人為的な掘込みか自然の断層か判断できず、次年度以降の調査で確認する必要があるものとした。

また確認のみであるため詳細が不明であるが、E トレンチ西において礫集中 SS01 が 1 基検出されたが、これについても結果的には近代における攪乱も想定され、次年度に持ち越しとした。

古代に属すると考えられる遺構としては、カマドを有する竪穴住居跡である SI10 住居が確認された。上面確認であり全体は不明であるが、方形のプランで、北側及び東にカマドがあり、東カマドから北カマドに作り直した可能性がある。上面確認面出土であるが、土師器・須恵器片が出土している。

また、上面からのプラン確認のみであるが G トレンチ北側の斜面落ち込み際に、黒色土を覆土に持ち方形を為す竪穴住居のコーナーらしきプランが切り合う形で部分的に認められ、次年度以降さらに確認が必要である。

他に古代に属すると思われる円形土坑が E トレンチ中央部および G トレンチ、F トレンチ南に、SK2～6 (SX20、22、23、29、30) の 5 基が検出された。ただし SX23 については深いため堀立柱の柱穴の可能性もある。それぞれ径 1～2 m、深さ 30 cm ほどの平面円形、断面タライ形の浅い土坑である。

このほか、時期不明のピット、近代以降の耕作に伴う方形の掘込み (いわゆるイモ穴 SX21、25、27、31) が数基検出されている。

2013 年度調査概要

縄紋時代としては、2012 年度に確認された縄紋時代後期堀之内式土器埋設の埋嚢 SU01 と関連する可能性がある後期土器および大型の礫の集中範囲が、SU01 の南側 2 m 離れて径 4 m ほどの範囲の堀之内 1 式を中心とした土器片の集中分布域が検出された。はっきりとしたプランを確認するには至らなかったが、F トレンチ南および F トレンチ東拡にかけ竪穴住居のプランらしき範囲が認められ、SI14 住居跡とした。昨年度確認の埋嚢 SU01 は住居に伴う可能性が高いと考えたが、関連性は確認できなかった。

他に上面からのプラン確認で F トレンチ北拡張部の東側に竪穴住居らしきプランが部分的に認められ、竪穴住居跡の可能性はあるが、部分的な確認のため次年度以降に確認することとした。

なお、2012 年度に E トレンチ西において縄紋時代に属する集石の可能性のある礫集中 SS01 が 1 基検出されていたが、精査した結果、下部にイモ穴状の近代以降の落ち込みがあり、その上に礫および土器が集積していることが判明した。おそらくは近代の耕作時における 2 次廃棄であろう。

古代に属すると考えられる遺構としては、黒色土を覆土とする円形土坑または方形土坑が 2012 年度に 5 基検出されていた (SX20、22、23、29、30)。2013 年度は、F 西拡で SK7 (SX36) 1 基、F 南拡で SK8 (SX41) 1 基の 2 基が新たに確認されたほか、F 北拡では 2012 年度に E トレンチ中央で確認された SK6 (SX30) の反対側のプランが検出された。古代の土坑は、それぞれ径 2 m 程度、深さ 30 cm ほどの平面円形または方形、断面タライ形の浅い土坑である。

このほか、時期不明のピット、近代以降の耕作に伴う方形の掘込み (いわゆるイモ穴) が F 東拡で 1 基 (SX38)、F 南拡で 1 基 (SX40) など、数基検出されている。

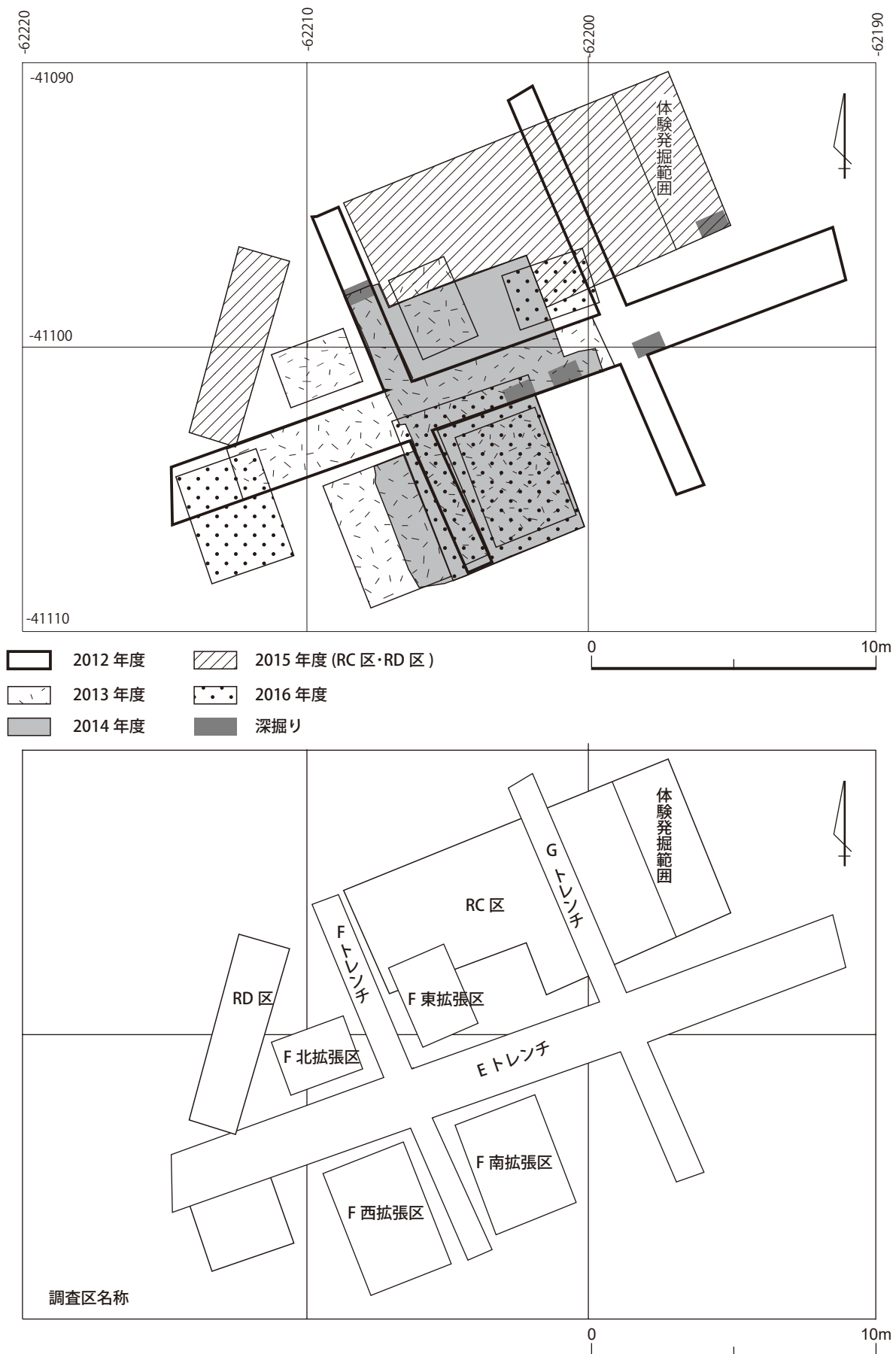


図3 調査区および座標 (1/200)

2014 年度調査概要

縄紋時代としては、2012 年度に確認された縄紋時代後期堀之内式土器埋設の埋嚢 SU01 を調査した。また、SU01 の南側 2 m 離れて径 4 m ほどの範囲の堀之内 1 式を中心とした土器片の集中分布域について精査し、F トレンチ南および F トレンチ東拡にかけ、竪穴住居のプランらしき範囲が認められたが、はっきりとしたプランを確認するには至らず、焼土なども認められなかった。SI14 との遺構名を残しつつ遺物集中として掘り下げを行った。掘り下げの結果、遺物が薄くなる面として遺物集中の下面を捉え、その面において遺物集中範囲をめぐるように径 20-30cm ほどのピットがピット 1 からピット 6、さらに中央近くの SX21 イモ穴の底面でピット 7 を検出した。このうちピット 1 は 2012 年度にすでに完掘していたが、掘込みの不明瞭なピットである。2014 年度はピット 6 とピット 7 について半裁したところ深さ 20cm 程度の柱穴であると判断できた。従って、床面・炉址は検出できなかったが、遺物が集中しその部分の土層がやや黒色化していること、一部に柱穴が認められ得ることから、住居跡である可能性が再び考えられ、次年度に検討を続けることとした。

SU01 屋外埋嚢について、半裁して掘り下げ、土器を取り上げたところ、その下部にピット状に深く掘り込みがあり、礫および石皿片 2 点の石器・礫 3 点が土器下部の掘込み中央部に埋納されていた。

他に上面からのプラン確認で F トレンチ北拡張部の東側に竪穴住居らしきプランが部分的に認められ、SI13 としたが、本年に掘り下げたところ遺構のプランは確認できず、遺構としては捉えなかった。

古代に属すると考えられる遺構としては、黒色土を覆土とする円形土坑または方形土坑が 2012 年度に 6 基。2013 年度に 2 基検出されているが、2014 年度は新たには円形土坑の検出はなされていない。

このほか、包含層堆積状況と地形を確認するため、3ヶ所の深掘りを設定して 1.5m ～ 2m ほど掘り下げると共に、深い円形土坑で調査区壁面にかかっていた近代以降の耕作坑 SX44 および SX38 についてセクションを作成した。さらに深い深掘 3 において下部で LIS 下部と思われるローム層（V 層）を確認した。この結果、ほとんど縄紋土器を出土しない黒色土である III b 層が、東側の崖際に近づくほど深くなりながら広がり、全体に厚く黒色土が堆積していることが確認できた。

また、早稲田大学の協力によって、調査区北側の RC 区、RD 区に地中探査としてレーダー探査を試行した。土質の違いを表す可能性がある範囲は認められたが、結果的には、明確な地下の遺構の存在を示すようなデータは得られなかった。

2015 年度調査概要

2015 年度は、2014 年度にレーダー探査をおこなったうちの RC 区と RD 区について遺構確認面まで掘り下げ精査を行った。台地中央側の道路に並行する形で長方形に調査区を設定した RD 区では、近代の耕作痕であるイモ穴（SX55）および不正方形の落ち込みが III 層中において確認されたに留まった。レーダー探査により土質の違いが現れていた部分の多くは、近代のイモ穴に対応していることが確認された。遺物の出土も縄紋土器片が数点出土したに留まった。

RC 区は、南北最大 6.0m、東西 10.4m の不正方形の調査区を設定した。うち、一部に 2012 年度に調査した試掘 G トレンチが含まれる。掘り下げたところ、III 層上面で、近代の耕作坑としてイモ穴（SX54）、古代と思われる円形土坑（前年度までの調査で上面確認されている SK5（SX29）、SK10（SX47）、2015 年度に確認された SK11（SX51）、SK12（SX52）、SK13（SX53）の 5 基が確認された。円形土坑と考えられる遺構については、保存のために半裁し形状と覆土を確認して古代に帰属することを確認した上で周辺を方形に残す形で包含層を掘り下げた。縄紋時代後期の土器を中心に遺物を包含する IIIa 層を 20cm ほど掘り下げて、やや黒色味を増す IIIb 層上面で精査し、縄紋時代の遺構を確認した。縄紋時代の遺構としては、性格不明の径 20-30cm ほどのピット 4 基（ピット 1 ～ 4）が直線的に並ぶことを確認した。北側調査区外に並列するピット群が存在する可能性もあり、方形柱穴列などの可能性も残すが、現状では性格不明である。RC 区南側壁際では、径 1m ほどの大型の土坑 SK01 を検出した。半裁して掘り下げたところ、大型の礫が数点包含され、IIIa 層類似の覆土をもつことが確認されたが、2015 年度は深さ 43cm で掘り下げをとりどめ、次年度以降に調査を継続することとしたが、縄紋時代後期の貯蔵穴などの可能性が高いと考えられる。また、RC 区西側付近で、径 4m の円形の範囲に、礫および後期堀堀之内 1 式土器を含む遺物集中（SI15）を確認したが、結果的には遺構としての確認はできなかった。

2016 年度調査概要

2016 年度は、縄紋時代後期に属する竪穴住居跡 2 基、縄紋後期の土坑 1 基、古代の竪穴住居 1 基を確認した。

SI14 住居跡は、2014 年度に遺物集中とした地点を中心に南北にサブトレンチを設定し掘り下げたところ、遺物集中が存在したレベルの下部 5 ～ 10cm ほどのレベルで硬化面が認められ弱い壁の立ち上がりが確認されたため、全体的に掘り下げた。その結果、

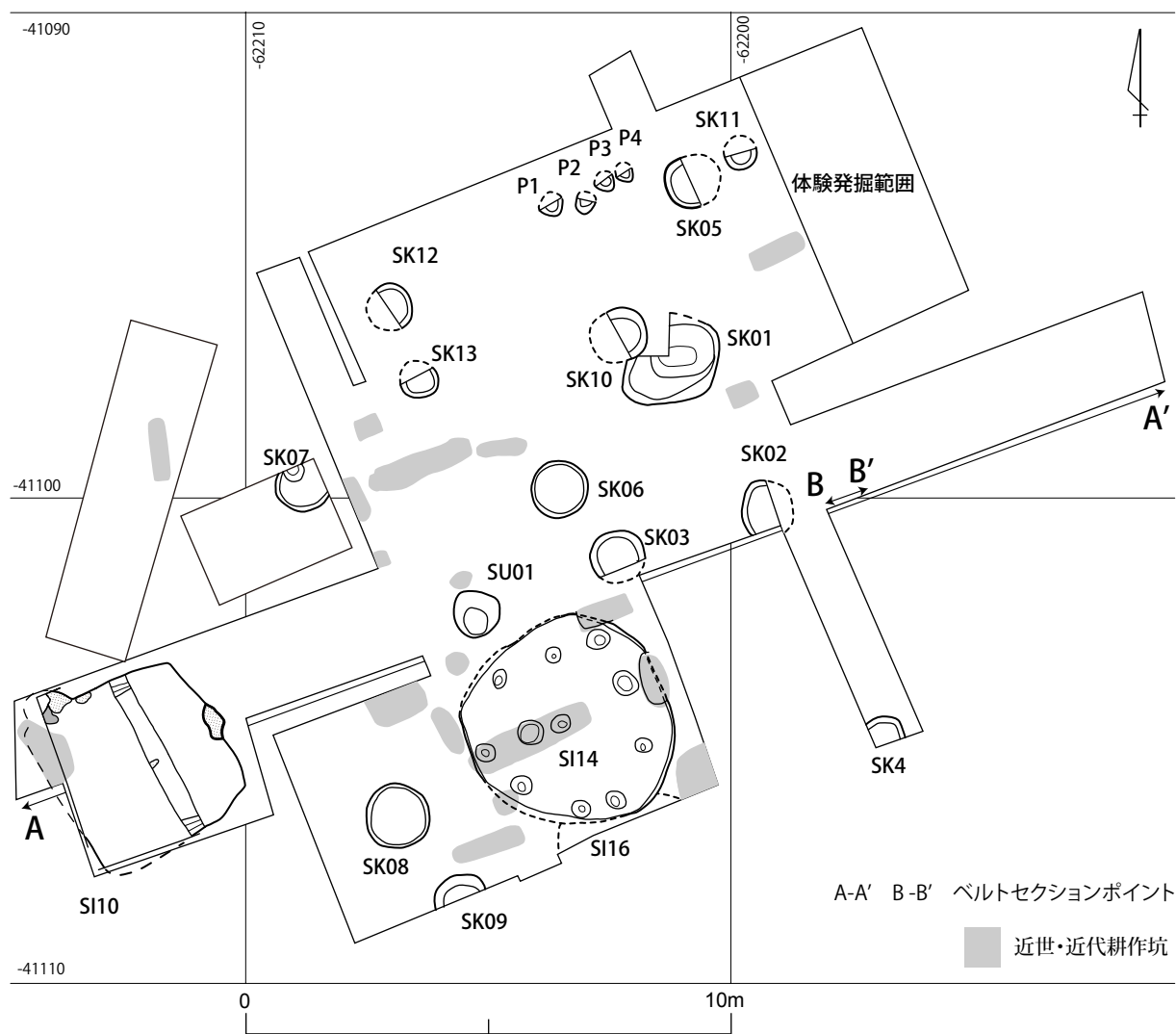


図4 遺構分布 (1/150)

表2 新旧遺構名

年度	旧遺構名	新遺構名	性格・時期
2012	pit1	没	
2012	pit2	—	近代耕作坑
2012	pit3	—	近代耕作坑
2012	pit4	—	近代耕作坑
2012	SI10	SI10	奈良平安住居跡
2012	SI12	没	
2012	SS1	没	
2012	SX20	SK02	奈良平安土坑
2012	SX21	SK03	奈良平安土坑
2012	SX22	SK04	奈良平安土坑
2012	SX23	SK05	奈良平安土坑
2012	SX25	—	近代耕作坑
2012	SX27	—	近代耕作坑
2012	SX29	SK06	奈良平安土坑
2012	SX30	SK07	奈良平安土坑
2012	SX31	—	近代耕作坑
2013	SI13	没	

年度	旧遺構名	新遺構名	性格・時期
2013	SI14	縄紋後期	
2013	SX33	—	近代耕作坑
2013	SX34	没	SI10の一部
2013	SX35	—	近代耕作坑
2013	SX36	SK08	奈良平安土坑
2013	SX37	—	近代耕作坑
2013	SX38	—	近代耕作坑
2013	SX39	—	近代耕作坑
2013	SX40	—	近代耕作坑
2013	SX41	SK09	奈良平安土坑
2013	SX42	SK10	奈良平安土坑
2013	SX43	—	近代耕作坑
2013	SX44	—	近代耕作坑
2013	SX45	—	近代耕作坑
2014	SU1	SU01	縄紋屋外埋裏
2014	SX48	—	近代耕作坑
2014	SX49	—	近代耕作坑

年度	旧遺構名	新遺構名	性格・時期
2014	SX50	—	近代耕作坑
2015	P1	P1	縄紋ビット
2015	P2	P2	縄紋ビット
2015	P3	P3	縄紋ビット
2015	P4	P4	縄紋ビット
2015	SI15	没	
2015	SK1	SK01	縄紋土坑
2015	SX51	SK11	奈良平安土坑
2015	SX52	SK12	奈良平安土坑
2015	SX53	SK13	奈良平安土坑
2015	SX54	—	近代耕作坑
2015	SX55	—	近代耕作坑

炉と考えられる炭化物集中部や柱穴が確認され、SI14 住居跡として確認した。一部の床面は掘り下げすぎて床面および壁の立ち上がりの把握に失敗したが、全体の半分以上は床面を把握し、掘り下げすぎた部分でも円形に回るように配列する柱穴を捉えたため、住居の全体的な形態はほぼ円形であると把握できた。短軸 4.24m、長軸 4.44m の略円形の平面形で、中央やや西寄りに地床炉をもち、炉の近くにピット 7、7 本の柱穴が壁近くに円形に回っている（ピット 6,8,9,10,11,12,13,14）。東側壁は近代の耕作坑である SX50 に破壊され、かつ上面からの古代に帰属するピット 5 が東部に存在しているため、東側の柱穴の有無は不明であるが、炉が短軸の西側に存在し、その反対側になる東側には柱穴が配置されていないため、入口である可能性が考えられた。床面は標高 260.000m のレベルを基準に、最大で 5cm 程度の起伏を持ちつつ平坦に整えられた地床である。壁は緩やかで、最大 10cm ほどの立ち上がりが認められた。上面の遺物集中から床面は 20cm 程度の比高差を持つので、ある程度の深さを持つ竪穴住居が想定できた。炉は、浅い掘込の地床炉で、底面は弱く焼け込みをもつが焼土は弱く遺物の出土も認められない。壁近くを巡っているピットはおおむね同一規模の柱穴で、深さ 20 ～ 30cm 程度を計り、明確な柱痕を認められる柱穴は存在しなかった。住居外の北側 60cm には、2012 年度に検出された堀之内 1 式土器を埋納した SU1 埋甕が位置する。住居上層の出土遺物から堀之内 2 式古段階に近い時期の竪穴住居と考えられる。

SI14 の確認において、調査区南側に別の竪穴住居のプランの一部を検出した。2014 年度の調査でも当該部分に遺物集中が広がっており、その段階では SI14 が調査区南まで広がっている可能性も考えたが、調査区内にちょうど収まる範囲で竪穴のプランが検出されるため、SI14 住居跡が部分的に大きく南に拡張した形態であるとは考えにくい。そのため、新たに確認された住居を SI16 住居跡とした。SI16 については掘り上げはしていないので、調査区内での最大でも 1/4 程度と推測される範囲の上面確認だけであり、全体像は不明である。SI14 住居跡との関係は不明であるが、上面に出土する遺物は SI14 住居跡と近い時期と考えられる。

SK01 土坑は、2015 年度に部分的に掘り下げをして確認した範囲を広げ、おおよそ 3m × 2m の不正形の調査区を設定して全体像を把握することを試みた。土坑の北側には古代円形土坑が重なるため、南側および東側の 3/4 の部分を掘り下げ、縄紋土坑としての形状を把握した。土坑の平面形は楕円形、短軸 184cm、長軸 188cm、深さ 66cm、2 段に掘込を持ち、内部にはやや柔らかい覆土を包含する。貯蔵穴と考えられる。

2012 年度検出の古代の竪穴住居跡の SI10 について、2016 年度にその実態を確認しておく必要から、既調査区を拡張した東西 3.9 m × 南北 3.9 m の範囲で調査をおこなった。その結果、住居平面形を確認し、南北方向のサブトレンチを掘削して、トレンチ内のみ床面まで掘り下げて住居の構造を調査した。南北 3.6 m、東西 3.5 m の大きさで、東壁中央と北西コーナー付近にカマドを検出した。北西隅の北カマドは耕作坑によって攪乱を受けていた。竪穴の平面プランは方形を基調とするが、南東側に角をもつ不正五角形状を呈し、住居址の重複か建替え、もしくは東カマドに柵状施設を伴うなどの可能性があると考えられた。

確認面から床面までの高さ最大約 40cm、覆土は上下 2 層に分けられ、重複する遺構や建替えは確認されていない。北壁・南壁ともに幅 20 ～ 30cm、深さ 15cm の周溝が巡る。床面中央寄りには張床による硬化面が広がる。床面中央にはカマド構築材と同じ粘土が堆積し、隣接して長軸 20cm 程の焼礫が床面上に検出された。

北カマドは 2 基の耕作坑と重複していたため、耕作坑覆土を除去した。調査区北西角はカマド底面よりも下に破壊が及んでいたが、南側は燃焼部が検出された。燃焼部には焼土が堆積して硬化していた。検出面は床面近くにまで達していることから、住居廃絶まで機能していたとみられ、カマド 2 基の新旧関係として東カマドから北カマドへの造り替えの可能性が考えられる。

出土遺物は、須恵器 11 点（内 1 点は 2 点接合）、土師器 12 点、内黒土器 1 点（2 点接合）の合計 24 点である。主に覆土中からの出土で、表土層からの出土も含まれる。

以上で、本地点の調査を終えることとし、全ての遺構、トレンチを埋め戻して原状復帰した。

日誌抜粋

2012 年度

7 月 29 日 機材搬入、試掘トレンチを設定、掘削

7 月 30 日 E・F トレンチの表土除去、Ⅱ層まで掘り下げ

7 月 31 日 E トレンチ西より古代の竈跡を検出し、SI10 と設定

調査区全体をⅢ層上面まで掘り下げ

8 月 2 日 E トレンチ西において SI-10 のプランを検出

8月3日 子ども体験発掘

SX22の底面よりローム層を確認

SI-10の西側に古代住居の粘土を検出(SI11と設定したが、後にSI10北カマドとした)

8月4日 Eトレンチ西において、加曽利E式後半期の集石を検出

8月5日 Eトレンチ中央のSX26から後期前半と思われる埋設土器を検出、SU-1と設定
ローム層確認のためEトレンチ東にサブトレンチを設定

8月6日 平板による遺構分布図の作成

8月7日 SX25の底面に縄紋の包含層と予想される黒色土を確認
図面作成、写真撮影、埋戻し

8月8日 埋戻し、機材搬出

2013年度

7月29日 機材搬入、調査区を設定、掘削準備

7月30日 E・Fトレンチの埋戻し土除去、拡張区の表土除去、2層まで掘り下げ

7月31日 トレンチおよびF区東西南北の各拡張区をⅢ層上面まで掘り下げ

8月1日 少雨により午前中のみ掘り下げ、光波測定器により遺物取り上げ

8月2日 E・Fトレンチ交差部分の土手を掘り下げ、F南拡張区円形土坑3基半裁

8月3日 子ども(親子)体験発掘16人参加

午後「遺跡・遺構の中の遺物」ワークショップとして3D計測、写真測量のデモンストレーションの実施
(ラング、三井考測)、その後中央公民館で研究会

8月5日 F東拡張区より後期堀之内式土器片、F西拡張区より勝坂式土器片が多く出土

8月6日 F東拡張区から後期前半と思われる土器集中を確認、住居上面の可能性を考え、SI-14と設定、同様にF南拡張区の勝坂式古手の土器集中地点はF西拡張区へ続き、黒色土の落ち込みが認められ、住居の存在を予想してSI-13と設定
夜間に中山真治による講演

8月7日 光波測定器による平面図、及び壁のセクション図の作成
午後 現地説明会、夕方中央公民館で遺物展示の解説

8月8日 光波による遺物取り上げ、埋戻し、機材搬出

2014年度

7月28日 機材搬入、調査区の設定、掘削準備

7月29日 Fトレンチ東拡張区、北拡張区、南拡張区の埋戻し土除去

7月30日 調査区間のベルトⅡ層まで掘り下げ、光波測定器による遺物取り上げ

7月31日 ベルト掘り下げ、光波測定器による遺物取り上げ、表面採集

8月1日 北拡張区の掘り下げ、深堀、地中レーダー探査、3年ゼミ

8月2日 子ども(親子)体験発掘、考古学実習、SI-14掘り下げ、深堀

8月4日 SI14床面精査、図面作成

8月5日 SI14ベルト掘り下げ、図面作成、写真撮影

午後 現地説明会、公民館で遺跡説明会をおこなう

8月6日 SU01の取り上げ、完掘、写真撮影、光波測定器による平面図、壁のセクション図の作成

8月7日 SU01下より打製石斧・石皿が出土、光波測定器による遺物取り上げ、図面作成、写真撮影、埋戻し

8月8日 光波測定器による遺物取り上げ、埋戻し、機材搬出

2015年度

7月30日 機材搬入、調査区の設定、掘削開始

7月31日 RC区、RD区掘り下げ、光波測定器による遺物取り上げ

8月1日 調査区Ⅱ層まで掘り下げ、光波測定器による遺物取り上げ

8月2日 子ども(親子)体験発掘、表面採集、写真撮影、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ

8月3日 RC区Ⅲ層まで掘り下げ、RD区Ⅱ層まで掘り下げ、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ

8月4日 遺物集中区をSI15と設定、土坑、ピットの検出、図面作成、深堀、写真撮影、表面採集、光波測定器による遺物取り上げ

8月5日 RD掘り下げ、ドローンによる空撮、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ

8月6日 図面作成、写真撮影、光波測定器による遺物取り上げ、埋戻し開始

8月7日 埋戻し、機材搬出

2016年度(2017年)

3月13日 機材搬入、調査区を遺構(SI14、SK01、SI10)を中心に3箇所設定、掘削開始

3月14日 SI14に十字トレンチ設定、掘り下げ、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ

3月15日 SI14南東部に後期堀之内式1式を含む遺物集中を確認、写真撮影、図面作成、掘り下げ、光波測定器による遺物取り上げ

3月16日 写真撮影、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ

3月17日 SI14住居プランを確認、ピットの検出、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ

3月19日 SI10掘り下げ、土嚢除去、SI14を床面まで掘り下げ、SI14南東部遺物集中をSI16と設定、図面作成、写真撮影、光波測定器による遺物取り上げ

3月20日 SI10の床面確認、SI14ベルトセクション図、コラムサンプル、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ・平面図

3月21日 雨天により作業中止

3月22日 ベルト崩し、SI14の立ち上がり確認、写真撮影、図面作成、光波測定器による遺物取り上げ、平面図、SI-0およびSK01の写真撮影、埋戻し

3月23日 SI14のレベリング、図面作成、埋戻し、機材搬出

大日野原遺跡におけるこれまでの成果

3次調査 文献一覧

永田悠記・納美保子・小林謙一 2010「2008年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第33号 中央史学会

矢嶋良多・小林謙一 2011「2009年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第34号 中央史学会

矢嶋良多・小林謙一 2012「2010年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第35号 中央史学会

矢嶋良多・小澤政彦・小林謙一 2013「2011年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第36号 中央史学会

中央大学文学部考古学研究室・相模原市教育委員会 2013

『中央大学文学部考古学研究室調査報告書2大日野原遺跡―第3次発掘調査―遺構編』

中央大学文学部考古学研究室・相模原市教育委員会 2014

『中央大学文学部考古学研究室調査報告書2大日野原遺跡―第3次発掘調査―遺物編』

4次調査 文献一覧

小林謙一 2013『大日野原遺跡―2012年度発掘調査概報―』中央大学文学部考古学研究室

小澤政彦・小林謙一 2014「2012年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第37号 中央史学会

小林謙一 2014『大日野原遺跡―2013年度発掘調査概報―』中央大学文学部考古学研究室

小澤政彦・譚曉棠・西本志保子・小林謙一 2014

「2013年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第38号 中央史学会

小林謙一 2015『大日野原遺跡―2014年度発掘調査概報―』中央大学文学部考古学研究室

小林謙一 2015『おびのっばら―大日野原遺跡2014年度発掘調査の概要―』中央大学文学部日本史学専攻考古学ゼミ

西本志保子・小林謙一 2016「2014年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第39号 中央史学会

小林謙一 2016『大日野原遺跡―2015年度発掘調査概報―』中央大学文学部考古学研究室

小林謙一 2016『大日野原遺跡・上黒岩第2岩陰遺跡・滝坂遺跡―2015年度発掘調査の概要―』

中央大学文学部日本史学専攻考古学ゼミ

西本志保子・小林謙一 2017「2015 年度神奈川相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第 40 号 中央史学会

小林謙一 2017『大日野原遺跡－2016 年度発掘調査概報－』中央大学文学部考古学研究室

小林謙一 2017『上黒岩第 2 岩陰遺跡・滝坂遺跡・大日野原遺跡－2016 年度発掘調査の概要－』

中央大学文学部日本史学専攻考古学ゼミ

西本志保子・大野朝日・中川真人・小林謙一 2018「2016 年度神奈川相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』第 41 号
中央史学会

調査参加者（順不同、敬称略・所属は当時）

2012 年度参加者

小林謙一、永田悠記、矢嶋良多、小澤政彦、今泉沙希、太田立、久慈歩、後藤友美、田辺敬志、志村春佳、小川瑞穂、山本滯、佐々木玲央、坂根朋也、佐藤郁人、田中悠介、安齋有紀、高橋久仁子、金城奈緒子、藤井健樹、山中菜生、山田英就、松山功裕、白石桃子、鈴木真理子、尾林亮一、瀬尾崇、太田芳樹、岡本一希、吉田廉、大作祐太郎、田村麻梨菜、川瀬しおり、行田美咲、網谷愛美、橋本歩実、降矢祐輔（中央大学）、橋本望（首都大学東京）、鈴木佑太郎（東海大学）、石井美花、米谷将（立正大学）、馬場羽瑠佳、佐藤海（國學院大學）、石川和明、渡辺敦子（個人）、宮田公佳（国立歴史民俗博物館）、武田剛郎（大網白里町）、小林尚子（セツルメント研究会）、正洋樹（相模原市立博物館）、市川憲子、鹿山茂樹、神垣真理子、樽林亨、千葉宗嗣、西本志保子、村上金四郎、守屋之栄、荒井基喬、和家洋壽、土屋宗平、鈴木文昭、萩原昭夫（相模原市立博物館ボランティア）

調査協力者

門倉睦男（藤野公民館長）、森川哲郎（沢井公民館）、谷古宇和也（相模原市立総合学習センター）、河本雅人、中川真人（相模原市教育委員会）、中村耕作（國學院大學）、黒尾和久（国立ハンセン病資料館）、土井義夫（八王子郷土資料館）、武川夏樹（栃木県教育委員会）、鈴木實（地権者）

2013 年度参加者

小林謙一、小澤政彦、永田悠記、矢嶋良多、西本志保子、譚曉棠、後藤友美、金城奈緒子、早藤栞、三浦圭裕、佐藤正史、征矢まりな、鈴木草太、杉木映里菜、伊藤彩佳、長谷川昂、小林祥、大浦愛恵、森田将太郎、尾林亮一、瀬尾崇、岡本一希、大作祐太郎、行田美咲、網谷愛美、橋本歩実、降矢祐輔、佐藤春香、戸出晴香、浮津友紀、戸田麻里奈、松本和也、相澤健太郎（中央大学）、橋本望（首都大学東京）、大網信良、平原信、村尾真優、山崎太郎、富樫洋介、根本佑（早稲田大学）、鈴木佑太郎、山崎純一（東海大学）、黒尾大地、濱田昭吾、来海稜（立正大学）、石川和明（個人）、武田剛郎（大網白里町）、小林尚子（セツルメント研究会）、正洋樹、土井永好（相模原市立博物館）、松川夏樹（相模原市教育委員会）、鹿山茂樹、神垣真理子、樽林亨、荒井基喬、和家洋壽、土屋宗平、鈴木文昭、萩原昭夫、三嶋最都子（相模原市立博物館ボランティア）

調査協力者

門倉睦男（藤野中央公民館長）、森川哲郎（沢井公民館長）、谷古宇和也（相模原市立総合学習センター）、河本雅人、中川真人（相模原市教育委員会）、黒尾和久（国立ハンセン病資料館）、中山真治（府中市教育委員会）、武川夏樹（栃木県教育委員会）、野口淳、倉澤麻由子（明治大学校地内遺跡調査団）、清野陽一（人間文化研究機構）、和田薫（大和市教育委員会）、中島将太、平野哲也（杉並区遺跡調査会）、副島蔵人（富士見町井戸尻考古館）、横山真、千葉史（ラング）、三井猛、梅田由子（三井考測）、鈴木實（地権者）

2014 年度参加者

小林謙一、小澤政彦、永田悠記、西本志保子、譚曉棠、早藤栞、三浦圭裕、佐藤正史、長谷川昂、小林祥、守屋大和、田中友博、安藤瞳、塚本菜月、奥沢那月、鈴木友美、野平ゆかり、石毛千紘、小嶋美春、小嶋円有佳、戸浪瑤子、成田ゆに、小柴大樹、齋藤直樹、松田みづき、清水敦哉、岩本華奈、木村祐香、伊藤匠、浅井景子、小俣喬亮、河村智広、森郁美、赤松ひかり、張間萌美、加藤鞠花、朝野友実、網谷愛美、橋本歩実、降矢祐輔、佐藤春香、戸出晴香、戸田麻里奈、松本和也、中根寛哉、海老沢萌絵、工藤慎吾、式町宥汰、中村友輝、渡辺光咲、横山きらら（中央大学）、矢嶋良多（中央大学卒業生）、萩原弘幸（首都大学東京）、大網信良、ナワビ矢麻、山崎太郎、富樫洋介、根本佑、井上早季、佐藤悠佑、池山史華、加治原栞奈、川村綾子、呉心怡（早稲田大学）、鈴木佑太郎、志崎江莉子、島袋舞（東海大学）、黒尾大地、善場達也、高橋杜人、来海稜（立正大学）、石川和明（個人）、小林尚子（セツルメント研究会）、正洋樹、土井永好（相模原市立博物館）、鹿山茂樹、神垣真理子、荒井基喬、和家洋壽、鈴木文昭、三嶋最都

子(相模原市立博物館ボランティア)

調査協力者

河本雅人、中川真人、領家玲美、齊藤真一(相模原市教育委員会)、河西学(帝京大学文化財研究所)、黒尾和久(国立ハンセン病資料館)、紺野英二(八王子郷土資料館)、小林青樹(國學院栃木短期大学)、中村耕作、馬場羽瑠佳(國學院大學)、今泉克己(有明文化財研究所)、平野哲也、橋本望(杉並区遺跡調査会)、鈴木裕子(地権者)

2015 年度参加者

小林謙一、カリン・レーボリ、西本志保子、佐藤正史、阿部大誠、今藤桃花、吉岡由衣、齋藤菜摘、田茂淑乃、戸村祐子、池野理、谷貝千紘、中山雄仁、横田真菜美、岩本華奈、真田菜央、木村祐香、石川真優、宮尾光、鈴木草太、田和綾野、葛根田純佳、森若菜、網谷愛美、橋本歩実、松本和也、海老沢萌絵、中村友輝、工藤真吾、金子悠人、玉土大悟、柳川由佳、望月万彩、綾女敬伍(中央大学)、矢嶋良多、小澤政彦、金城奈緒子(中央大学卒業生)、大野朝日(金沢大学)、大網信良、山崎太郎、井上早希、佐藤亮太、平石瑞穂、鈴木宏和、星野宙也、辻角桃子(早稲田大学)、鈴木佑太郎、栗田大輔、高橋宏樹(東海大学)、大熊雅弘(駒澤大学)、平賀俊明、西村曜子、小林和子、山田義昭(個人)、木村弘樹(相模原市立博物館)、鹿山茂樹、和家洋壽、三嶋最都子、宮本弘文(相模原市立博物館ボランティア)

調査協力者

河本雅人、中川真人(相模原市教育委員会)、千葉毅(神奈川県立博物館)、高山理美(古川電工)、武田剛朗(大網白里市教育委員会)、田畑幸嗣、ナワビ矢麻(早稲田大学)、山本典幸(首都大学東京)、五十嵐睦(平塚市教育委員会)、徳留彰紀(志木市教育委員会)、今泉克己(有明文化財研究所)、長井光彦(武蔵)、橋本望(杉並区遺跡調査会)、鈴木裕子(地権者)

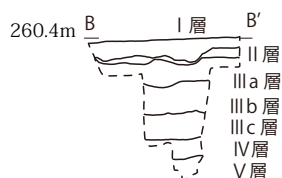
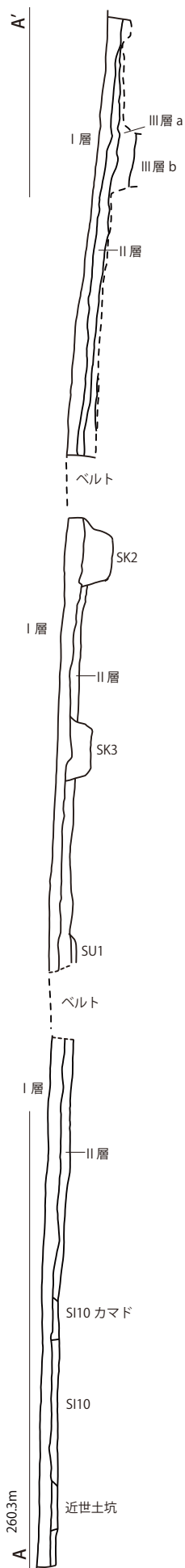
2016 年度参加者

小林謙一、カリン・レーボリ、西本志保子、葛根田純佳、平岩龍司、二宮侑己、頼住渚、鈴木昌美、濱田千彩、田鹿和輝、松永陽南、篠宮千裕、今海翔、百瀬洗希、竹内諒、野沢卓功、三上詩織、庄司安希、水口諒、田代直也、金子悠人、綾女敬伍、貝沼優佳、奈良部大樹、間所千里、鈴木由佳、佐藤さくら、藤原佑貴、赤羽陽介(中央大学)、網谷愛美、橋本歩実、金城奈緒子(中央大学卒業生)、大野朝日(金沢大学)、佐藤亮太、岩見拓、隈本道厚、鈴木宏和(早稲田大学)、岩浪陸(東海大学)、佐藤可也(一般)、小林尚子(セツルメント研究会)、千葉毅(神奈川県立博物館)、中川真人、小澤政彦(相模原市教育委員会)、鹿山茂樹、和家洋壽、川島健吉、土屋宗平(相模原市立博物館ボランティア)

調査協力者

河本雅人(相模原市教育委員会)、渋谷綾子(国立歴史民俗博物館)、橋本望(杉並区遺跡調査会)、山崎太郎(東京都埋蔵文化財センター)、鈴木裕子(地権者)

(小林謙一・西本志保子)



(3) 基本層序

基本層序は、E トレンチにおいて I ・ II ・ III ・ IV ・ V 層を確認した。地山を含めた基本層序を確認するため、E トレンチ内に 1m 幅の範囲で深さ 2m まで深掘りをおこない、層序を確認した (図 5)。

I 層 10 Y R 2/3(灰褐色) 粘、しまり少、柔い

砂利 2 ～ 4mm 5%

II 層 10YR3/2(暗褐色) 粘、しまりやや少、やや柔い、砂粒 2 ～ 3mm 6%

赤スコリア 2 ～ 3mm 2%、黄スコリア 1mm 1%、炭化物 1mm 1%

III a 層 7.5YR 3/3 (褐色) 粘、しまりやや大、やや固い

黄スコリア 1 ～ 3mm 4%

III b 層 10YR3/2 (暗褐色) 粘大、しまりやや大、やや固い、

黄スコリア 2 ～ 3mm 3%、

III c 層 10YR2/2 (黒褐色) 粘、しまり大、固い

黄スコリア 2 ～ 3mm 3%、赤スコリア 3 ～ 4mm 2%

IV 層 10YR4/4、4/6 (黄褐色) ソフトローム 赤スコリア 2 ～ 3mm 2%

V 層 赤スコリア多い、ハードローム層

(小林謙一)

図 5 ベルトセクション (1/00)

2 検出された遺構と遺物

(1) 縄紋時代

縄紋時代の遺構としては、住居跡2基、屋外埋嚢1基、貯蔵穴と考えられる土坑1基、ピット4基が検出された(図6)。

遺物の分布状況は、土器は中期前半、中期後半および後期の土器が主に SI14 住居跡を中心とした範囲より出土している。これらの土器の垂直分布をみると、時期別に標高差は認められなかった(図7)。

石器・礫も土器と同様に、住居を中心とした出土状況である(図8・9)。

なお、調査中にピット1～4が検出された付近から西側付近の RC 区とした範囲において縄紋後期前半土器がある程度集中して分布し、SI15 と認識したが、精査した結果、床面や炉跡、柱穴などは確認できず、住居としての認定は保留し、本報告においては遺構としては扱わず、出土遺物も包含層として報告(図22-63、図23-75、図24-84、96、101、図26-17など)する。当該地点は包含層中で調査を終えているので、将来的に掘り下げた際に遺構が検出される可能性は残るため、遺構としての存在の可能性のみ指摘しておく。

以下に遺構ごとに記載する。出土土器および土製品に関しては、各遺構ごとに図・表を掲載し、出土石器は、器種毎に図・表を掲載し、図・表中に遺構出土のものは遺構名を明記してある。

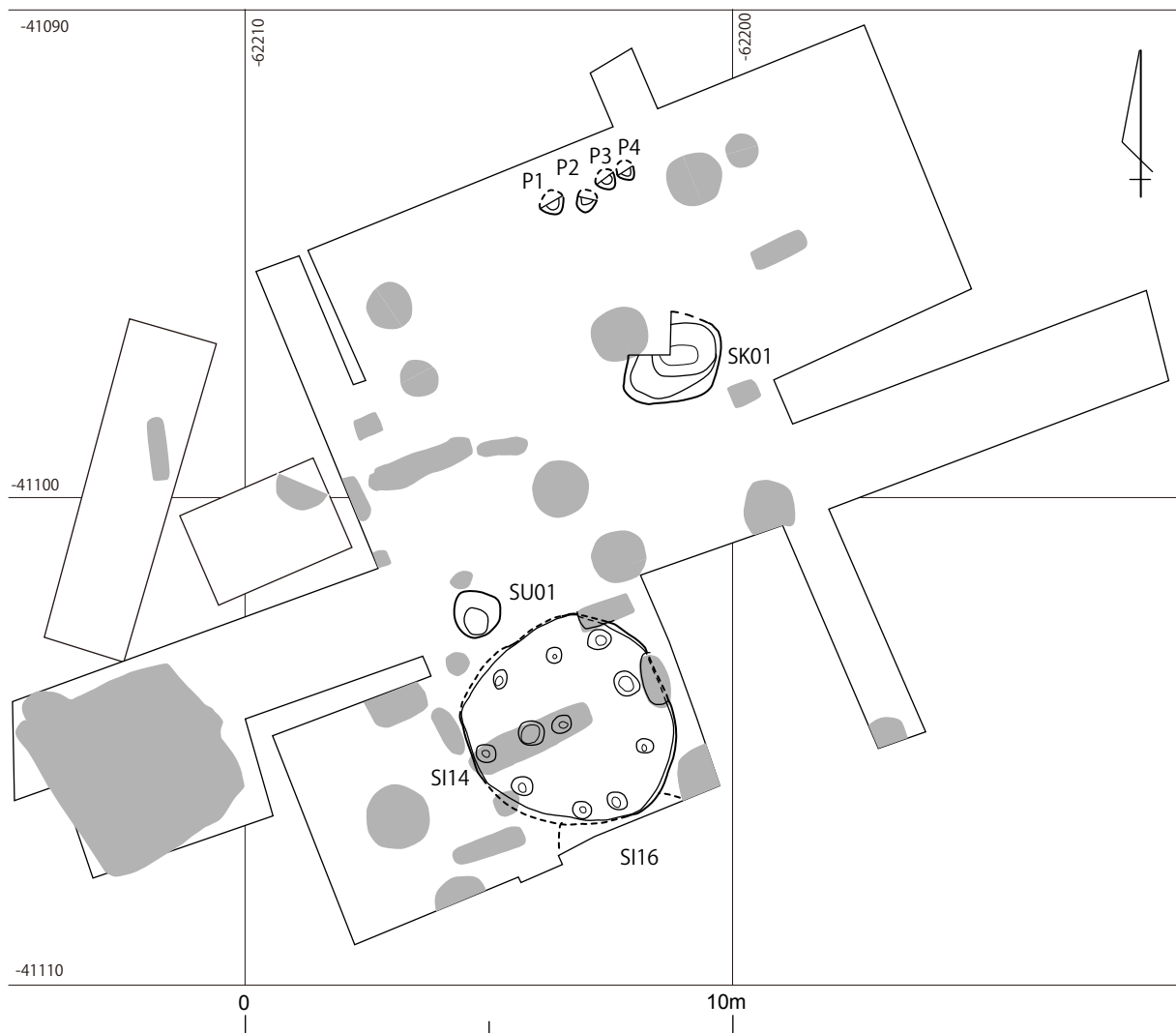


図6 縄紋時代遺構分布 (1/150)

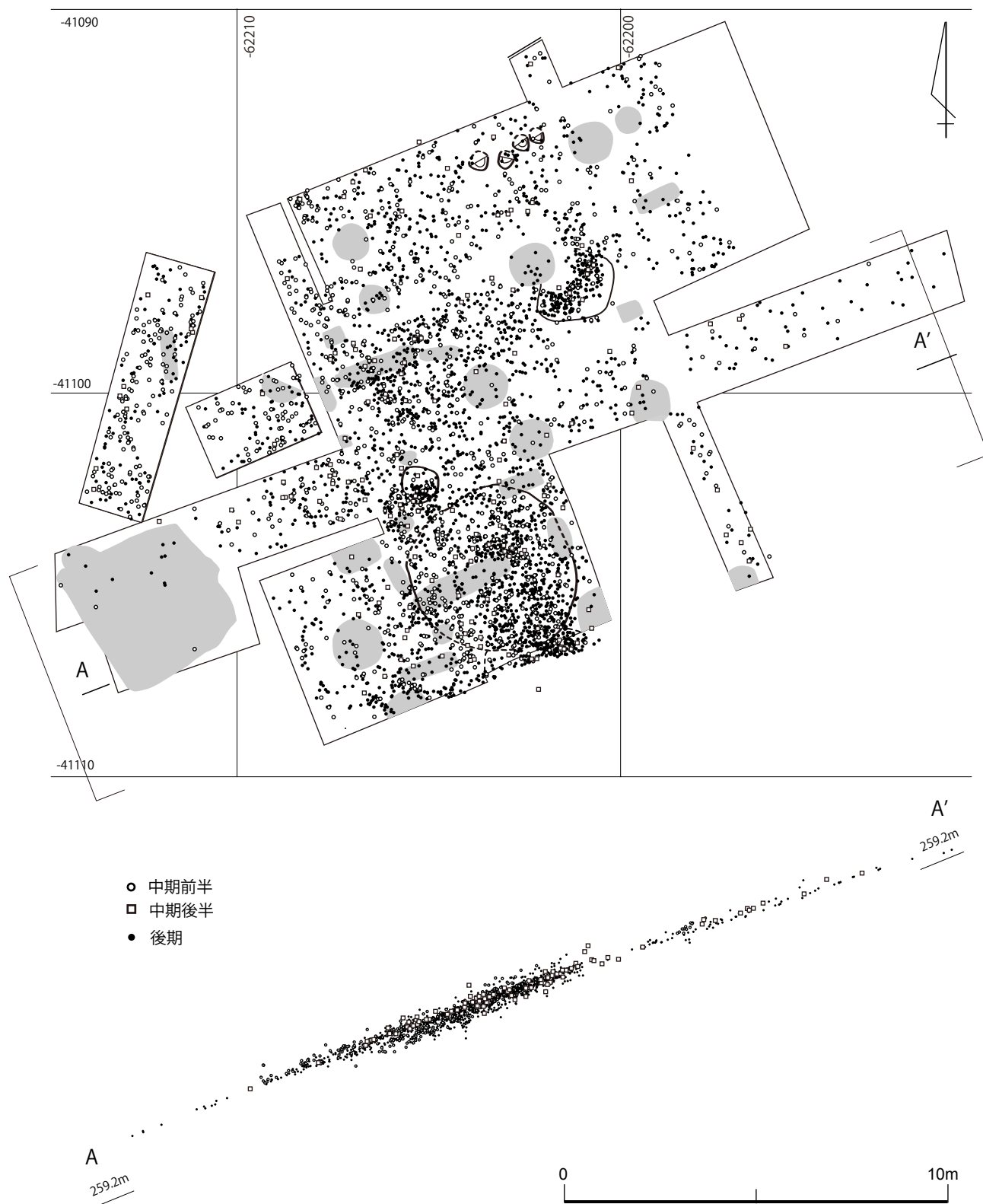


図7 縄文土器分布 (1/150)

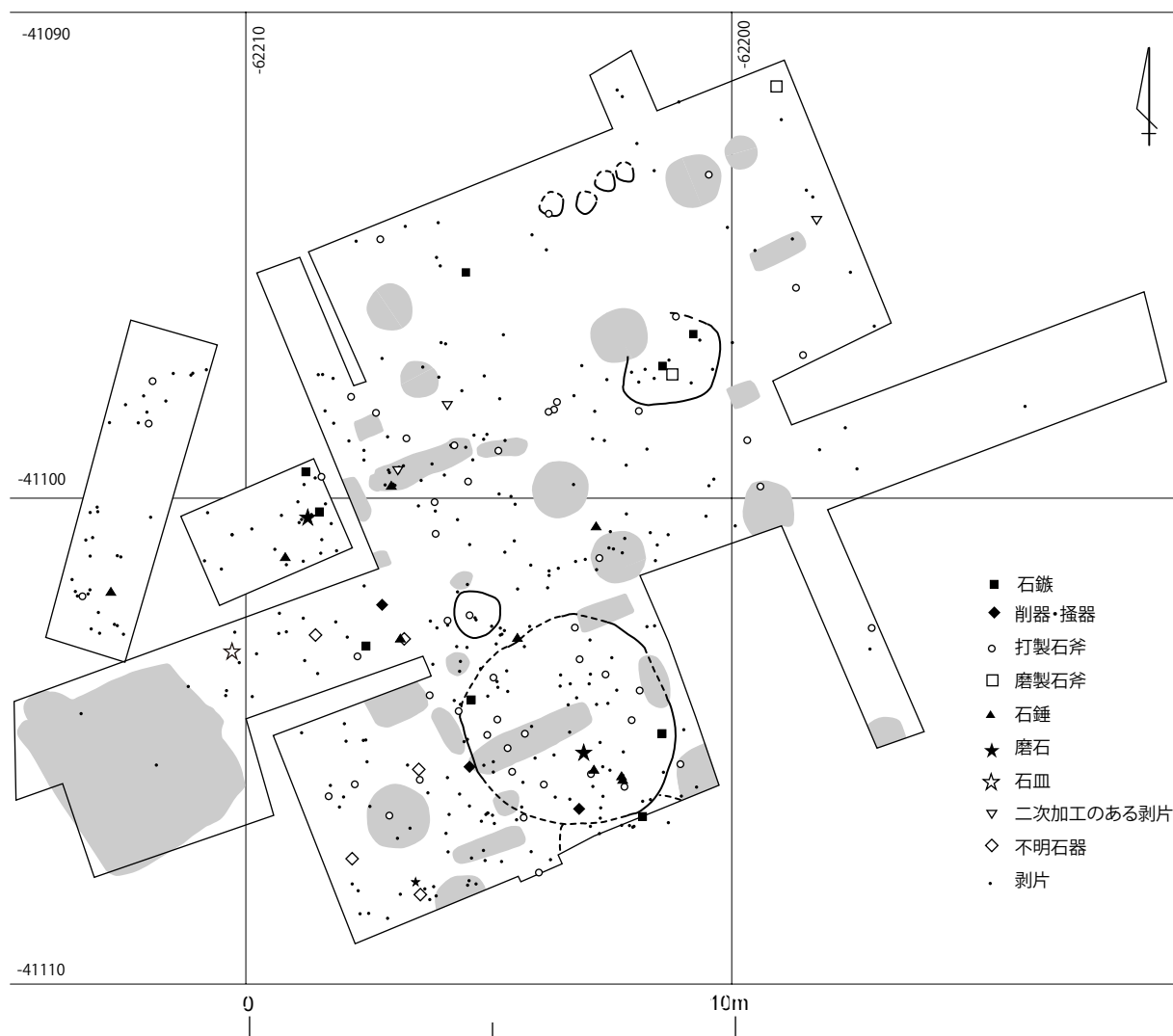


図8 縄紋石器分布 (1/150)

住居跡

SI14 住居跡 (図6～15・表3)

SI14 住居跡は、2014 年度に大型の礫や堀之内式土器復元可能土器破片などを含む遺物がほぼ水平にまとまって検出され遺物集中とした地点を中心に南北にサブトレンチを設定し掘り下げたところ、遺物集中が存在したレベルの下部5～10cm ほどのレベルで硬化面が認められ弱い壁の立ち上がりが確認された。そのため、竪穴住居の存在を想定し、ベルトを設定の上で全体的に掘り下げたところ、炉と考えられる炭化物集中部や柱穴が確認され、SI14 住居跡として確認することができた。一部の床面は掘り下げすぎて床面および壁の立ち上がりの把握に失敗したが、全体の半分以上は床面を把握し、掘り下げすぎた部分でも円形に回るように配列する柱穴を捉えたため住居の全体的な形態は把握できた。

規模は短軸 4.24m、長軸 4.44m の略円形の平面形で、中央やや西寄りに地床炉をもち、炉の近くに P7 があるほか、7 本の柱穴と考えられるピットが壁近くに円形に回っている (P6・8・9・10・11・12・13・14) ことが確認できた。東側壁は近代の耕作痕に破壊され、かつ上面からの古代に帰属する P5 が東部に存在しているため、東側の柱穴の有無は不明であるが、炉が短軸の西側に存在し、その反対側になる東側には柱穴が配置されずに入り口となっていた可能性も考えられる。床面は標高 260.005m～260.000m のレベルで地床である。壁は緩やかな立ち上がりで現状では最大 10cm ほどの立ち上がりであるが、上面の遺物集中からは 20cm 程度の比高差を持つので、ある程度の深さを持つ竪穴住居であったと考えられる。炉は、浅い掘込の地床炉で、底面は弱く焼け込みをもつが焼土は弱く遺物の出土も認められない。壁近くを巡っているピットはおおむね同じ大きさ、形状の柱穴で、深さ 20～30cm 程度を計り、明確な柱痕が観察される柱穴は存在しなかった。北側 60cm には、2012 年度に確認された堀

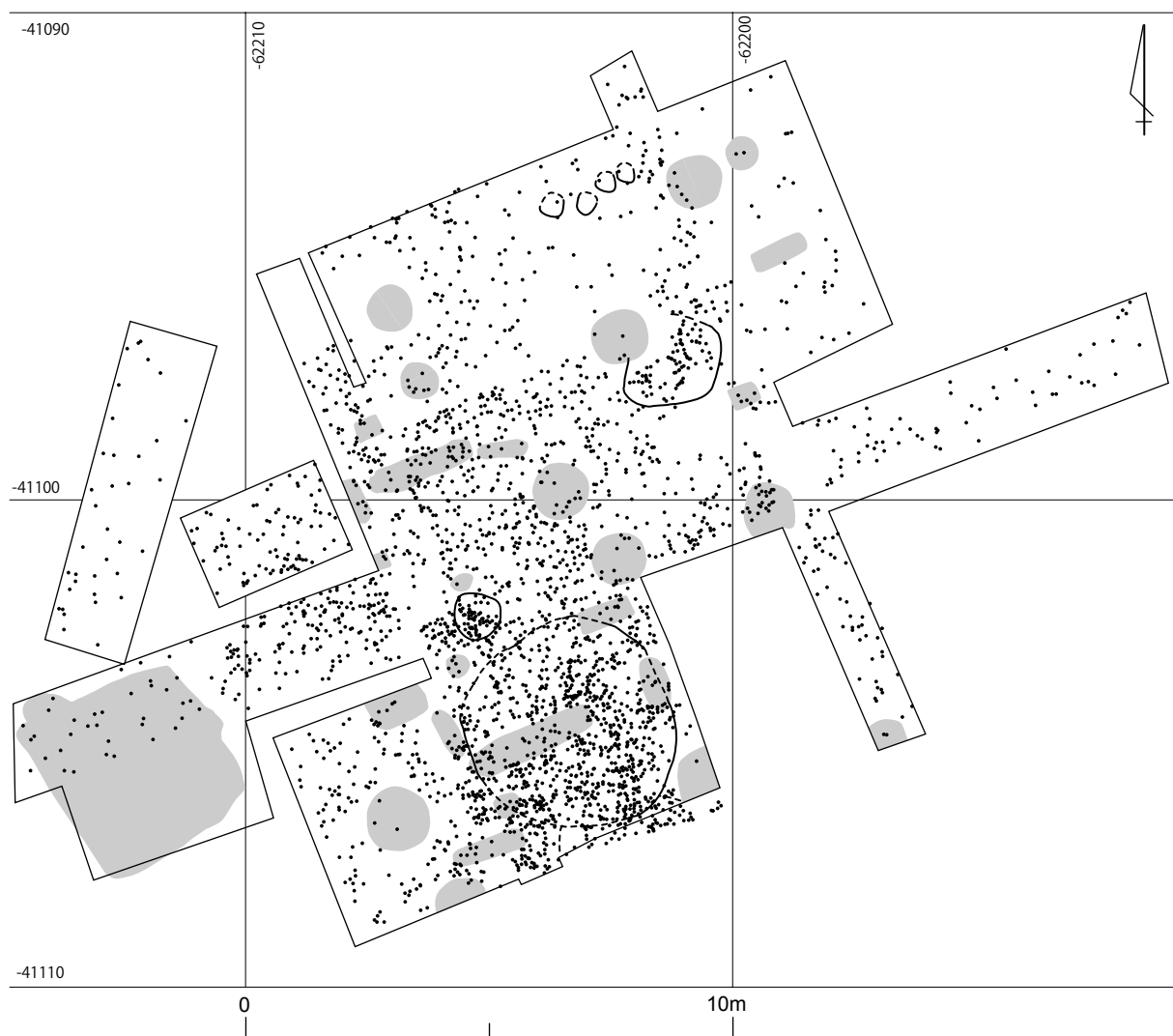


図9 縄文礫分布 (1/150)

之内 1 式土器を埋納した SU1 埋嚢が検出されている。住居上層の出土遺物から堀之内 2 式古段階に近い時期の竪穴住居と考えられる。なお、土壌サンプルを 2 箇所採取した。

覆土

1 層 上層 10YR3/4、粘性、しまり大、やや柔い、黄色スコリア 1 ～ 2mm 1%、赤色スコリア 1 ～ 2mm 1%、焼土粒 1 ～ 2mm 2%、炭化物 1 ～ 2mm 1%、3a 層が主体

2 層 壁土、10YR3/4、粘性、しまりやや大、やや固い、黄色スコリア 1 ～ 2mm 3%、赤色スコリア 1 ～ 2mm 2%、焼土粒 1 ～ 2mm 1%、炭化物 1 ～ 2mm 1.5%

ピット覆土

1 層 III a 層類似 10YR3/3、粘性、しまり大、やや固い、焼土粒 2mm 2%、炭化物 1 ～ 2mm 1.5%、白色パミス 1 ～ 2mm 1%、ローム粒 1 ～ 2mm 2%

2 層 10YR3/4、粘性、しまり大、やや固い、焼土粒 2mm 0.5%、炭化物 1mm 0.5%、ローム粒 1mm 2%

10YR2/2、粘性、しまり少、やや柔い、砂、黒色パミス多い (I b 層)

3 層 10YR4/6、粘性、しまり大、固い

炉 覆土

10YR3/4、粘性、しまりやや大、やや柔い、焼土粒 1 ～ 2mm 2%、3 ～ 4mm、炭化物 2 ～ 4mm 2%、焼土粒にはローム粒が焼けたものを含む

(小林謙一)

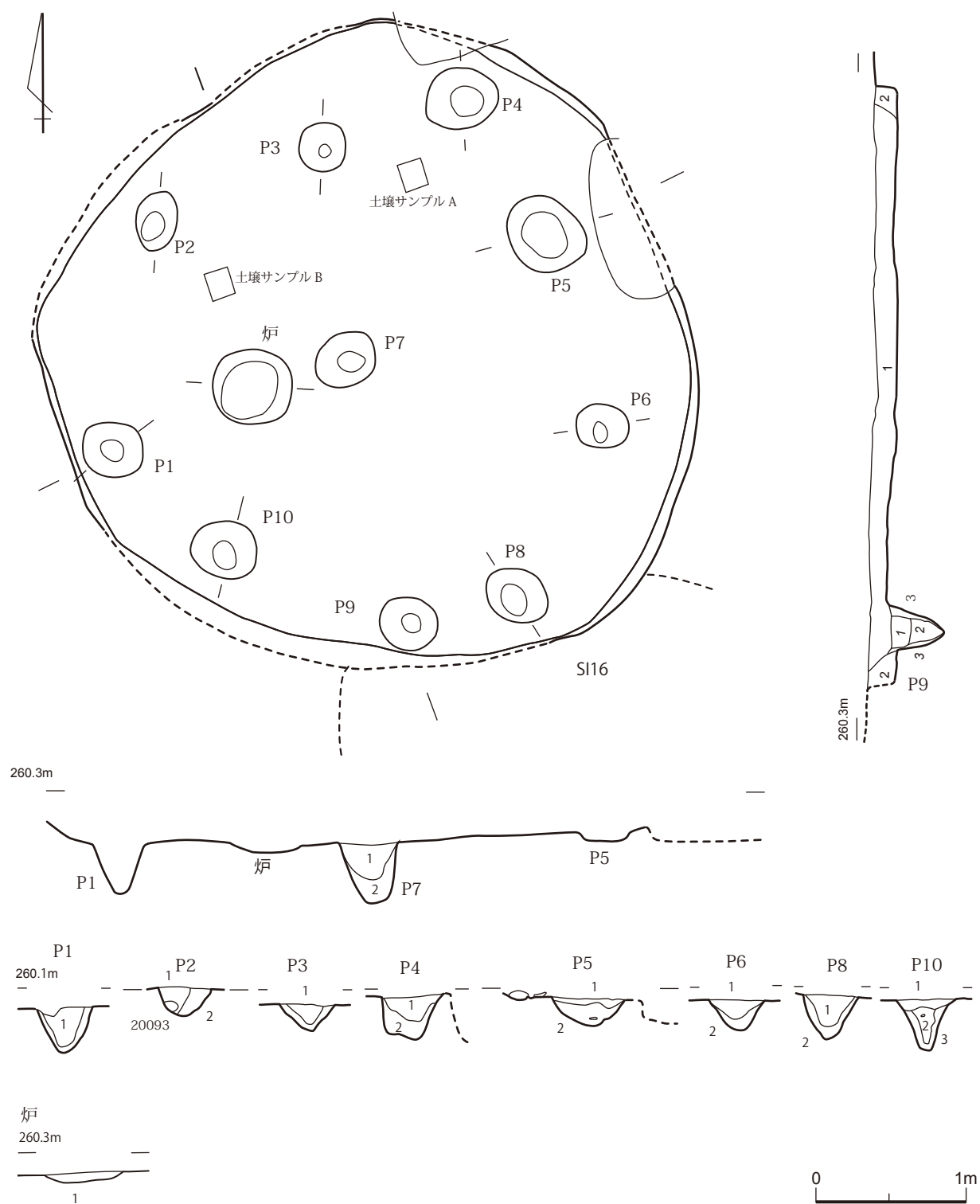


図 10 SI14 住居跡 (1/40)

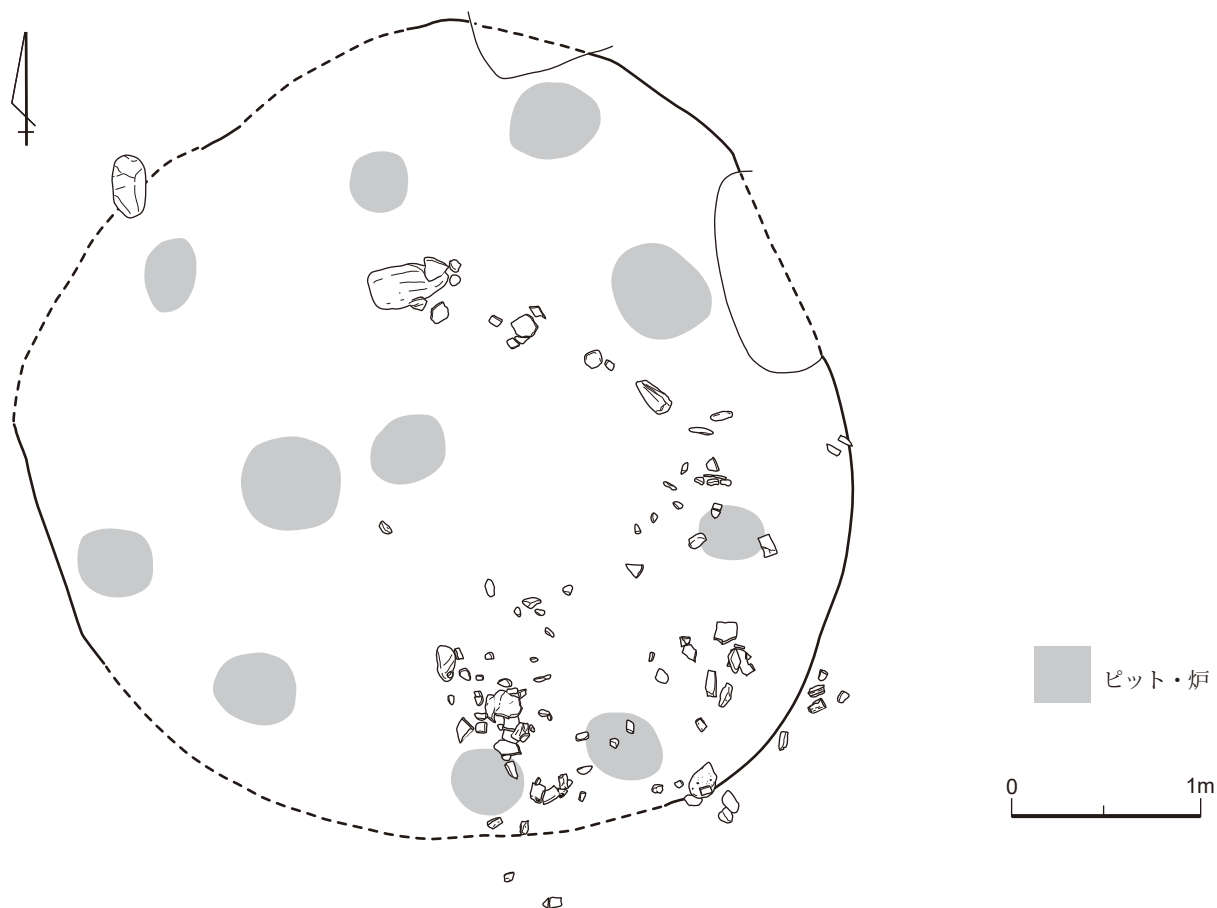


図 11 SI14 住居跡遺物出土状況 (1/40)

出土土器

SI14 住居跡出土の縄紋土器は 1253 点を数える。型式が判断できるものが 977 点で、五領ヶ台式から加曽利 B 式まで出土しているが、堀之内式が 731 点と最も多く、この中で 717 点が堀之内 1 式である。勝坂式・阿玉台式が 199 点、加曽利 E 式・曽利式は 35 点である。

1・2 は中期初頭五領ヶ台式、「大石タイプ」に比定される。1 は RL 単節縄紋を施した後、半截竹管で横位に 2 本の沈線、斜位にへう描き沈線を施している。2 は浅鉢で、竹管による交互刺突と三角形削切の陰刻文を施文する。

3・4、7～17 は勝坂式である。3 は勝坂 1a 式である。口縁に粘土紐を貼り付け U 字状に折り曲げて波状口縁を作り、口唇部に沈線を入れ、丁寧な調整をおこなっている。口唇直下に竹管による連続刺突文、削切による三角陰刻文、縦方向に細いへう描き文を施文する。4 は新道併行の北陸系の土器と推測される。口唇下に横位に半截竹管による 3 段の沈線を施し、下部にへうによる截痕文を施文する。

5・6 は阿玉台式土器である。5 は阿玉台 I b 式に比定される。横位に断面三角の隆線を貼り付け、半截竹管による刻みを施す。6 は阿玉台 II 式に比定される。断面三角形の隆線、半截竹管による二列一組の沈線、ハマグリによる腹縁文を施文する。

7～11 は勝坂 1 式に比定される。7 は半截竹管による角押文で施文する。8 は隆線脇に竹管による角押文を施文している。9 は竹管による角押文、竹管をハの字状に連続刺突して施文している。10 は口唇直下に粘土をつまんで突起を作り、その下に横位に半截竹管による角押文、三角押文を施文する。11 は三角押文を施文する。12～15 は勝坂 2 式に比定される。12 は隆線脇に太いへう状工具で連続刺突する。13 は沈線による縦区画内を連続刺突文で充填し、半円形刺突を施す。14 は半截竹管による平行沈線で区画を作り、爪型文で充填する。15、16 はいわゆる「中帯文土器」である。15 は隆線で楕円区画し、内部に三角形を作り沈線で充填、隆線に連続刺突を入れる。16・17 は勝坂 3 式に比定される。16 は隆線を貼り付けて隆線上を連続刺突、沈線で脇を押さえる。17 は口唇から縦方向に隆線を貼り付け、脇に沈線を施し、隆線上に連続刺突文を施す。口唇上に沈線を入れて U 字状に整形する。

18～20 は曽利 III 式に比定される。18 は横位に隆線を巡らせ、縦位にへう描き沈線を施す。19 は木っ端状工具で条線を施文後、

隆線で楕円区画する。20 は肥厚口縁の突起部である。頭頂部から沈線で渦巻文を施文し、正面の渦巻に接続する。

21 は加曾利 E4 式に比定される。横位に隆線を貼り付け、沈線区画をした後に、LR 単節縄紋を充填する。

22～25 は後期初頭、称名寺 I 式に比定される。22 は沈線で J 字状に区画して、LR 単節縄紋を充填する。23 は疎らな条線施文後に、沈線で J 字状に区画し、内部を磨り消す。24・25 はいわゆる「閑沢類型」である。24 は口唇下に背割り隆線の側面に棒状工具による刺突文を施す。25 も背割り隆線の側面に刺突文を施している。

26～53 は後期前葉、堀之内式である。26 は綱取 I 式に比定される。器形は樽型を呈し、口縁部に縦に隆線を貼り付け中央に、沈線を施し、耳状の突起を作る。頸部に隆線を貼り付け、隆線上に刺突して鎖状隆線を作出している。胴部には LR 単節縄紋を施す。出土状況からみて、堀之内 1 式に併行するものと考えられる。

27～48 は堀之内 1 式である。27～30 は石井 C 群、「小仙塚タイプ」に比定される。27 は口唇部の内外面に棒状工具のよる刺突、及び頸部に 8 の字状の貼付を施す。28 は注口土器で、へら描きで渦巻文と斜行文を描出する。29 は横位に沈線を 2 本施し、耳状突起を施文する。30 は口唇直下に横位に沈線を施す。口唇上の小突起が欠損している。31～38 は石井 B 群、「斜行系タイプ」に比定される。31 はへら描きによる斜行文が施文される。32 は口唇直下に隆線を横位に貼り付け、斜めに刺突する。沈線で斜行文を施す。33・34・36 は同一個体と推測される。35・37・38 も斜行沈線文を施す。39～44 は石井 A 群、「下北原タイプ」に比定される。39 は棒状工具による横位の沈線と円形刺突が施される。40 は沈線で J 字文を施文し、内部を刺突する。41、42 も沈線で J 字文を施文する。43 は内面に横位に隆線を貼り付け、沈線を施す。隆線上を円形刺突する。44 は鉢形土器と考えられる。棒状工具で沈線と刺突を施す。45 は石井 F 群に比定される。外面に沈線を横位に施し、口唇突起部外面に棒状工具で深い沈線を施文する。46 は注口土器である。沈線で渦巻文を施文し、外側に刺突文を施す。47・48 は口縁部の把手である。47 は口縁に粘土塊を貼り付け整形、中央に孔を穿孔し、両脇、頭頂部、内面は刺突で施文する。48 は正面を C 字状に作出、両脇を刺突文と沈線文で施文、頭頂部を刺突する。49～51 は堀之内 2 式に比定される。49 は口唇下に沈線で菱形文を施文し、LR 単節縄紋を充填する。口唇から内面に斜めに刺突を施し、沈線と円形刺突を施文する。50・51 は LR 単節縄紋を施し、帯状に沈線を施文した後、一段おきに磨り消す。52・53 は土器底部である。53 は浅鉢で、内面に黒色漆を塗布する。

(西本志保子)

表3 SI14 住居跡出土土器観察表

No.	注記	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
1	13209	覆土	五領ヶ台	4b	RL 単節縄紋横→半截竹管による沈線、へら描き沈線	胴部	12.1	大石タイプ
2	19706	覆土	五領ヶ台	4b	竹管による交互刺突、三角形削切による陰刻文	口縁部	31.2	大石タイプ
3	K43	覆土	勝坂 1	5a	竹管による連続刺突文、削切による三角陰刻文、細いへら描き文	口縁部	114.1	雲母混入
4	20076	覆土	勝坂 1	5a	竹管による平行沈線、へらによる載痕文	口縁部	25.1	新道併行北陸系
5	19810	覆土	阿玉台 I b	6a	断面三角の隆線、竹管による刻み	胴部	33.3	
6	20263	覆土	阿玉台 II	6b	半截竹管による二列一組の沈線、ハマグリ復縁による刻み	胴部	22.2	
7	11380	覆土	勝坂 1	5c	半截竹管による幅 3mm の連続刺突文	胴部	26	
8	12905	覆土	勝坂 1	5c	竹管による幅 6～3mm の角押文	口縁部	27.2	
9	K38	覆土	勝坂 1	5c	半截竹管による連続刺突文、竹管をハの字状に連続刺突	胴部	28.3	
10	20132	覆土	勝坂 1	6a	竹管による幅 5mm の角押文及び幅 3mm の三角押文	口縁部	25.3	
11	9831	覆土	勝坂 1	6a	幅 4mm の三角押文	口縁部	26.7	
12	K20	覆土	勝坂 2	7b	幅 17mm の太いへら状工具による連続刺突文	胴部	71	
13	11550	覆土	勝坂 2	8b	沈線による縦区画内を連続刺突で充填→半円形刺突文	胴部	19.2	
14	K27	覆土	勝坂 2	8b	半截竹管の平行沈線区画→18mm の爪型文充填	胴部	70.7	
15	19647	覆土	勝坂 2	8b	隆線上刻み	胴部	49.7	中帯文土器
16	15070	覆土	勝坂 3	9a	隆線上刻み、へらによる沈線	胴部	30.5	中帯文土器
17	11512	覆土	勝坂 3	9a	隆線上に刻み	口縁部	67.3	
18	14234	覆土	曾利 III	12a	隆線→へら描き沈線	胴部	65.4	
19	K47	覆土	曾利 III	12a	木っ端状工具による条線	胴部	64.4	
20	20181	覆土	曾利 III	12b	つなぎ弧線文の突起部	把手	44.3	
21	19141	覆土	加曾利 E4	13a	LR 単節縄紋を充填	胴部	70.9	
22	15223	覆土	称名寺 I	14c	LR 単節縄紋を充填	胴部	98	

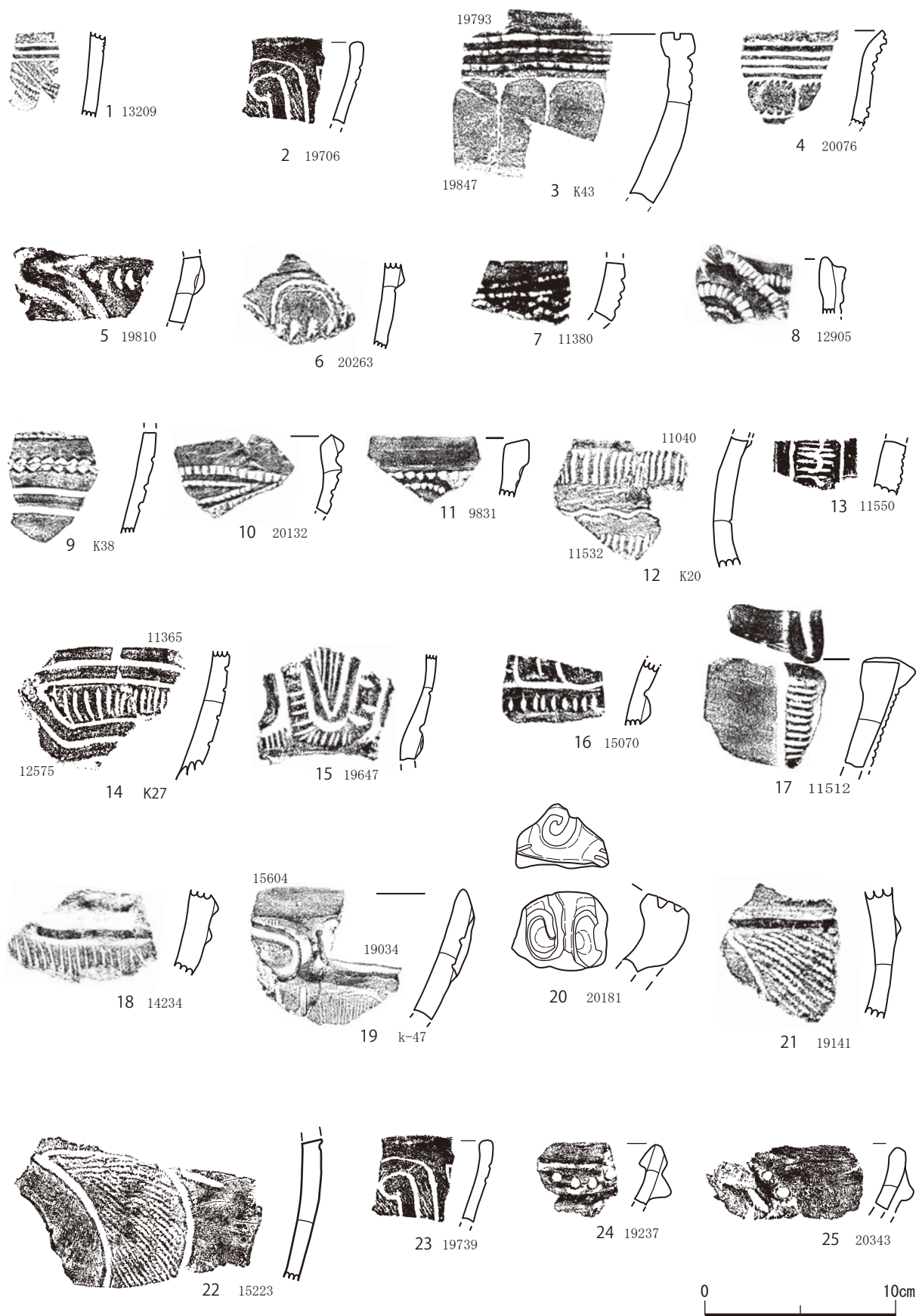


图 12 SI14 住居跡出土土器 1 (1/3)

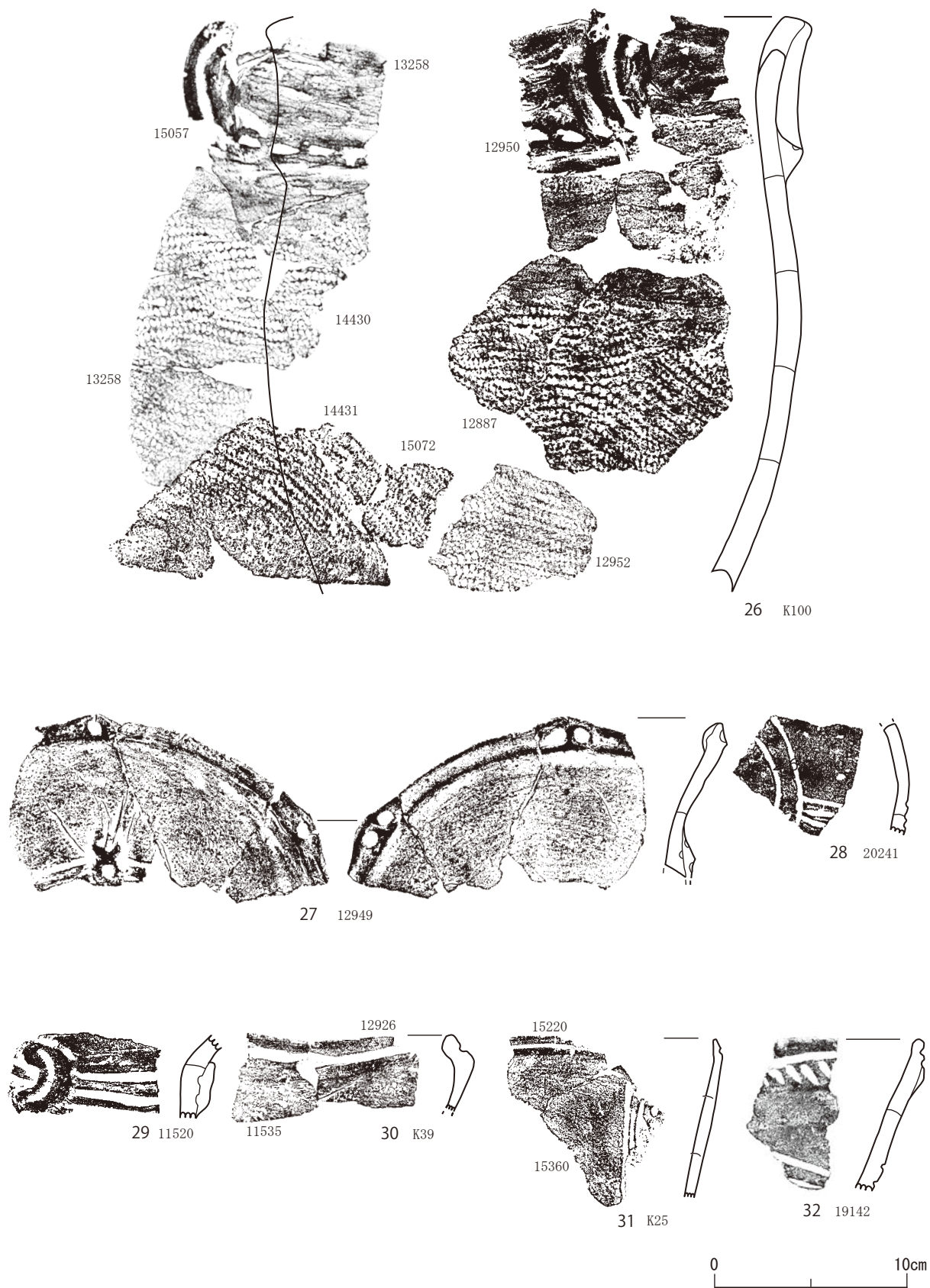


图 13 SI14 住居跡出土土器 2 (1/3)

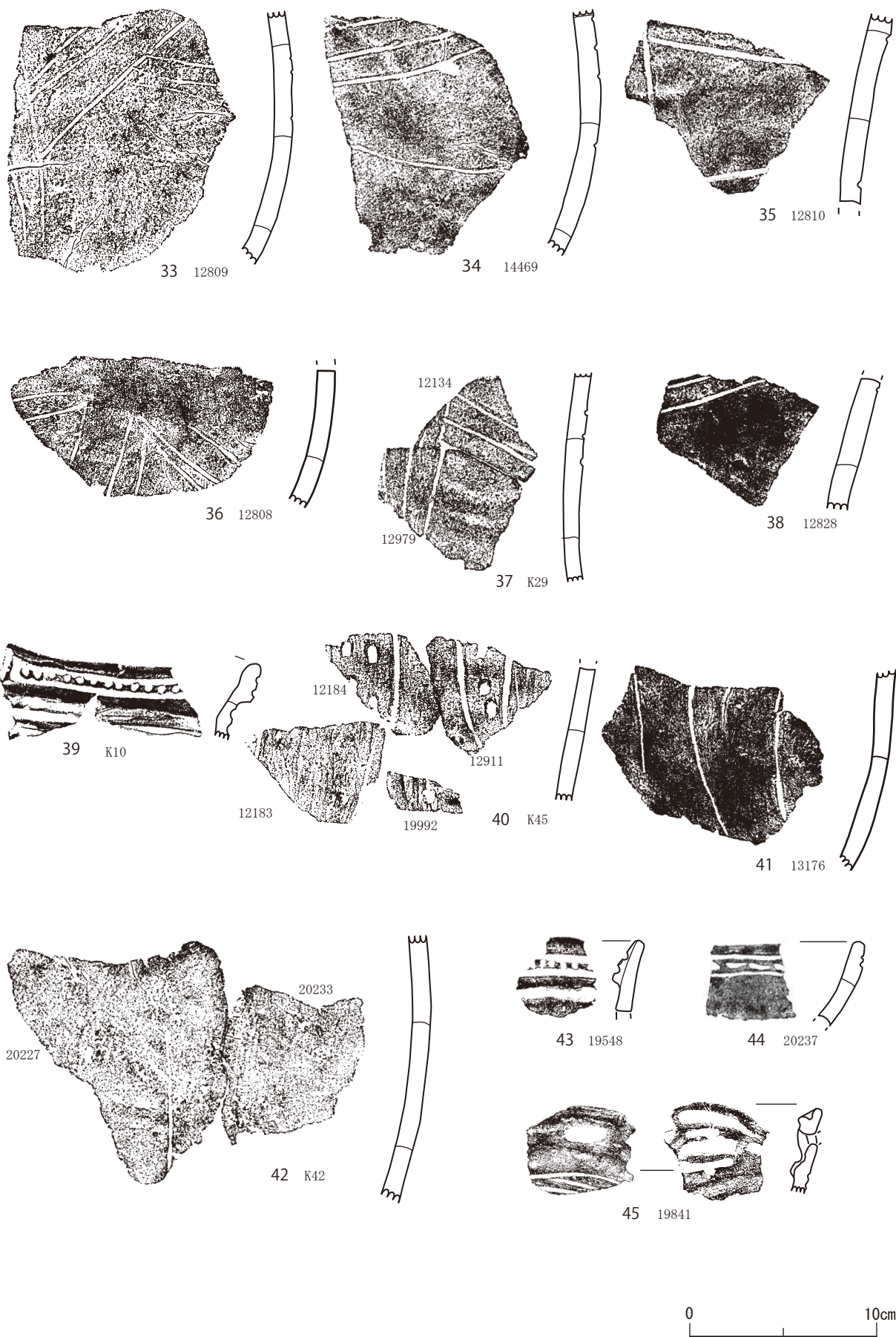


图 14 SI14 住居跡出土土器 3 (1/3)

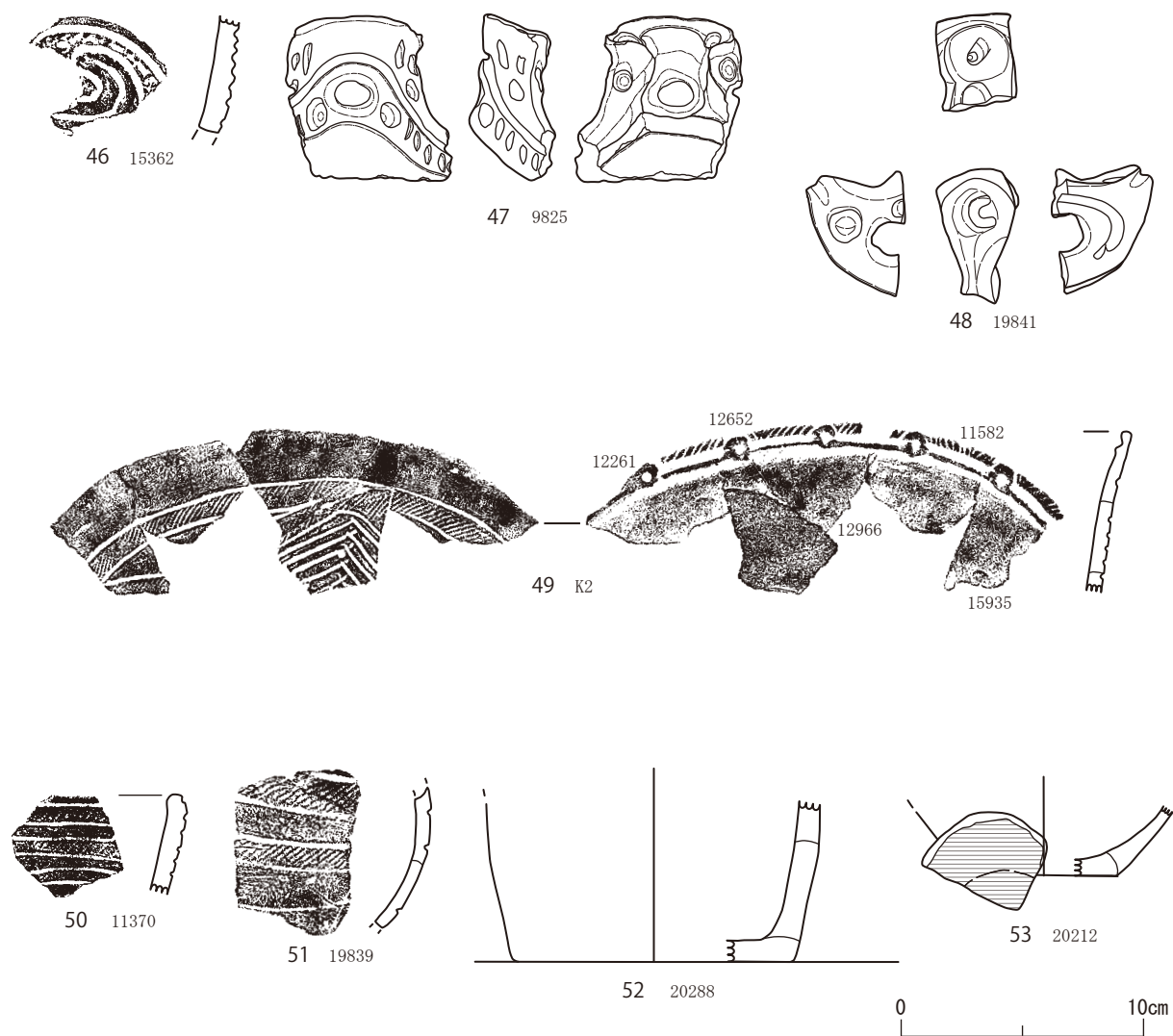


図 15 SI14 住居跡出土土器 4 (1/3)

No.	注記	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
23	19739	覆土	称名寺 I	15b	条線→沈線で J 字状磨消	口縁部	14	
24	19237	柱穴	称名寺 I	15	背割状隆線側部に棒状工具による刺突文	口縁部	19.9	関沢類型
25	20343	覆土	称名寺 I	15	背割状隆線側部に棒状工具による刺突文	口縁部	40	関沢類型
26	K100	覆土	堀之内 1	後期	胴部地紋は LR 単節縄紋横 隆線上を竹管で刺突	口縁部～胴部	1146	綱取 I 式
27	12949	覆土	堀之内 1	後期	内外面に棒状工具による刺突	胴部	5.4	小仙塚タイプ
28	20241	覆土	堀之内 1	後期	注口土器、器面をへら磨き	胴部	35.5	小仙塚タイプ
29	11520	覆土	堀之内 1	後期	沈線を巡らしたのち耳状突起を貼付	胴部	60.9	小仙塚タイプ
30	K39	覆土	堀之内 1	後期	口唇状の小突起が欠損	口縁部	42.5	小仙塚タイプ
31	K25	覆土	堀之内 1	後期	内外ともにへらによる横磨き	胴部	49.4	斜行系
32	19142	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	口縁部	43.9	斜行系
33	12809	覆土	堀之内 1	後期	斜行沈線	胴部	249.5	斜行系
34	14469	覆土	堀之内 1	後期	沈線	胴部	184.6	斜行系
35	12810	覆土	堀之内 1	後期	沈線による区画	胴部	120.9	斜行系
36	12808	覆土	堀之内 1	後期	沈線による三角区画	胴部	156.1	斜行系
37	K29	覆土	堀之内 1	後期	沈線による区画	胴部	102.5	斜行系
38	12828	覆土	堀之内 1	後期	沈線	胴部	73.9	斜行系
39	K10	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	口縁部	49.5	下北原タイプ
40	K45	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	胴部	80.9	下北原タイプ
	12183	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	胴部	48.9	下北原タイプ
	19992	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	胴部	9.5	下北原タイプ
41	13176	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	胴部	142.9	下北原タイプ
42	K42	覆土	堀之内 1	後期	浅い沈線	胴部	98.3	下北原タイプ

No.	注記	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
43	19548	覆土	堀之内 1	後期	内面棒状工具による沈線と刺突	口縁部	19.9	下北原タイプ
44	20237	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	口縁部	27.2	鉢形
45	19841	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線、口唇突起部内面に沈線施文	口縁部	27.3	石井 F 群
46	15362	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	胴部	30.6	注口土器
47	9825	覆土	堀之内 1	後期	突起内面に刺突	口縁部	73.2	把手
48	19841	覆土	堀之内 1	後期	棒状工具による沈線と刺突	口縁部	27.3	把手
49	K2	覆土	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋を充填	口縁部	72.8	
50	11370	覆土	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋を磨消	口縁部	15.3	
51	19839	覆土	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋を磨消	胴部	28	
52	20288	覆土	堀之内	後期	無紋	底部	95.6	
53	20212	覆土	堀之内	後期	内面に黒色漆を塗布	底部	20.1	浅鉢

SI16 住居跡

2014 年度において SI14 住居跡の範囲確認中に、SI14 の南側において、調査区南側に続く遺物集中分布範囲を確認し精査したところ、SI14 に重複され则认为られる略円形のプランの一部をⅢ a 層中において確認した。長径 4m ほどの円形を呈すると思われるが、大部分が調査区外に遺存する上、上面確認に留まるため、詳細は不明である。なお、上面に縄紋後期堀之内式土器を主体とする土器片が散布していたが、本報告では遺構外として報告し、観察表に出土位置に SI16 と記した（図 22 遺構外出土土器 3 の 61 など）。

（小林謙一）

屋外埋嚢

SU01 屋外埋嚢（図 16 ～ 17・表 4）

Ⅲ a 層中において土坑と考えられる落ち込みを検出し、掘り下げたところ埋嚢を検出した。埋嚢は後期前半の堀之内式土器である。南側には同時期の所産と考えられる竪穴状以降が検出されており、柄鏡形住居跡の可能性も考えながら調査をおこなったが、この遺物集中との関係性は認められなかったことから、この時期に普遍的に認められる屋外埋嚢と判断した。

Ⅲ a 層中からの掘り込みが確認でき、長径 1.01m、長径に直交する短径 0.96m、確認面からの深さ 0.77m を測る。埋嚢に使用された土器は胴部下半と口縁部の一部を欠損するが、胴部は全周する。土器は斜面に沿うように斜位に埋設されていた。埋嚢の下からは、多孔質安山岩製の石皿 1 点 (15978)、片状砂岩製の打製石斧 2 点 (16014、16021)、大型の千枚岩の礫 1 点 (16020、長径 20.1cm、短径 13.0cm、厚さ 6.5cm、重量 1,850g) が出土した。これらは祭祀に伴うものの可能性が挙げられる。なお SU 01 内からは前述の大型の礫の他に被熱したものを含む中・小型の礫 (16015 など) が 26 点出土した。石材は多くが堆積岩で遺跡周辺の河川に由来するものと考えられる。

また、埋嚢側面 5 層より図 15 の 12 の土器が出土し、裏込めとして使用された可能性も考えられる。

1 層：10YR3/3 暗褐色 粘性やや大、しまりやや小、やや固い、黄色スコリア 1mm 1%、赤色スコリア 2 ～ 3mm 0.5%、炭化物 1 ～ 3mm 1%、焼土粒 1mm 0.5%

2 層：10YR3/3 暗褐色 粘性やや小、しまりやや大、やや柔い、小礫 1 ～ 2mm 0.5% 3 層：10YR2/3 黒褐色 粘性大、しまりやや小、より柔い、黄色スコリア 1mm 1%、焼土粒 2mm 0.5%、炭化物 1mm 0.5%

4 層：10YR3/3 褐色土 粘性やや少、しまりごく小、もっとも柔い、焼土 1 ～ 2mm 1.5%、炭化物 2 ～ 3mm 1%、小礫 2 ～ 3mm 2%

5 層：10YR2/3 暗褐色土 粘性やや大、しまりやや大、やや固い

6 層：10YR2/3 暗褐色土 粘性やや大、しまり大、固い、Ⅲ b ～ Ⅲ c に類似

出土土器

1 の埋嚢は堀之内 1 式である。口径 34、5cm、残存器高 23cm を測る。埋嚢本体 (15967) に、土坑内に散らばっていた口縁部破片が 7 片 (15539、15615、15965、15980、15981、16010、16011) 接合し、合計重量は 3523.3g である。口縁部には指頭による連続押捺が施される。胴部には 3 本の縦位の沈線で区画された後に、右下がり、および左下がりの斜行沈線が引かれる。沈線部分はナデにより一部消されている。

2 は勝坂式初現段階、貉沢式期の胴部破片である。無文であるが、胎土には雲母片を多量に含む。3・4 は勝坂 2a 式である。3 は隆線脇に幅広の爪形文が施される。単位文と考えられ、ワラジムシ状の文様の可能性がある。4 は爪形文のみ認められる。5 は

勝坂式後半に属し、やや弯曲する器形で三叉文の一部と考えられる文様が施される。6 は勝坂式後半の鉢形土器の口縁部である。口唇部にかけて肥厚し、口唇には広い平坦面が認められる。7・8 は曾利式土器である。7 はコブ状の貼付文が施された後に 3 条の隆線が貼り付けられる。地文にはまばらな条線が施される。8 はまばらな条線のみが認められる。9 は称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式である。沈線で区画され、区画内にやや細長い刺突文が施される。10～12 は堀之内Ⅰ式である。11・12 は沈線が施文される。13 は無文だが器面の調整や胎土の様相から後期前半のものと考えられる。
(小澤政彦)

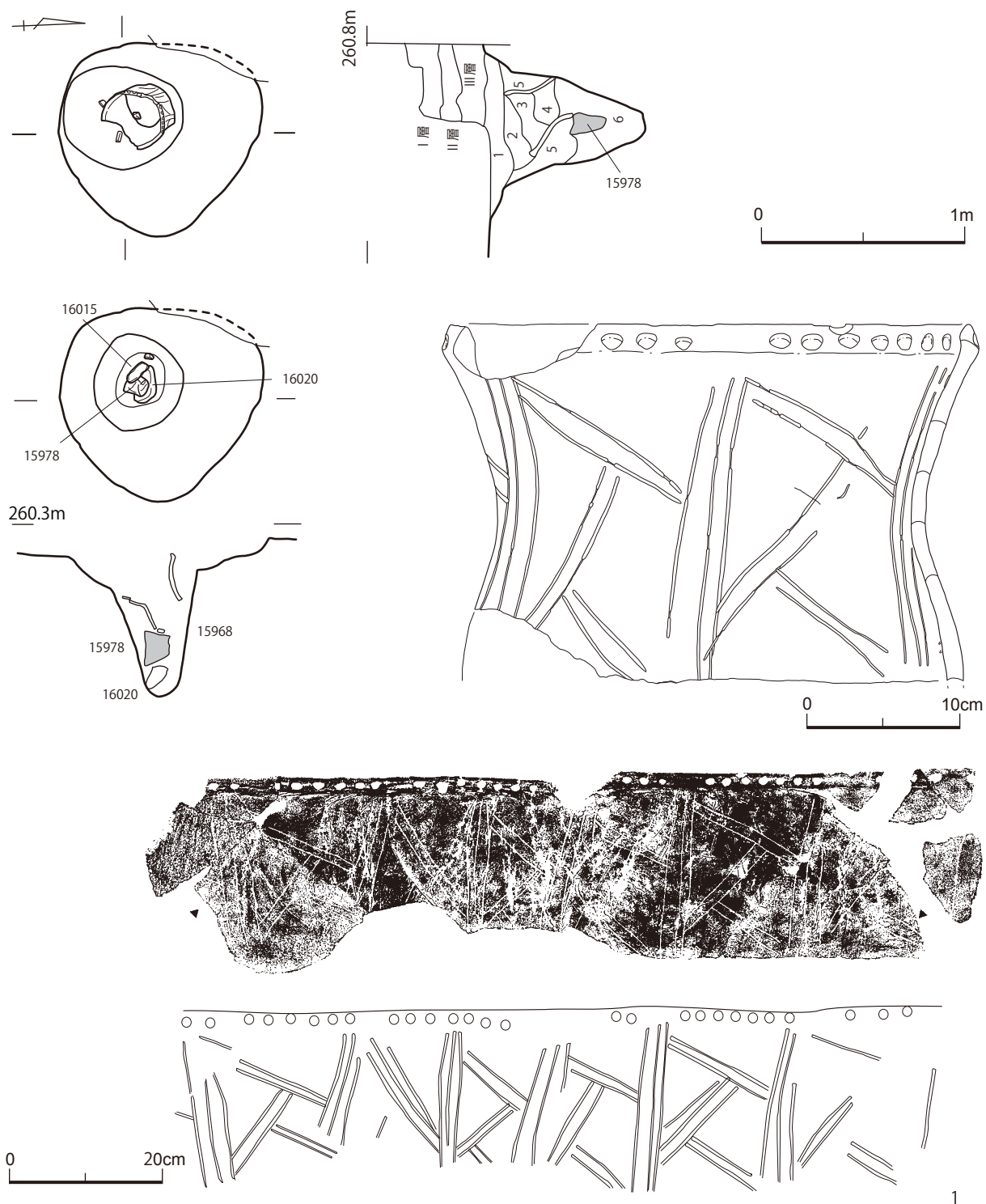


図 16 SU01 屋外埋蔵 (1/30・1/4・1/8)

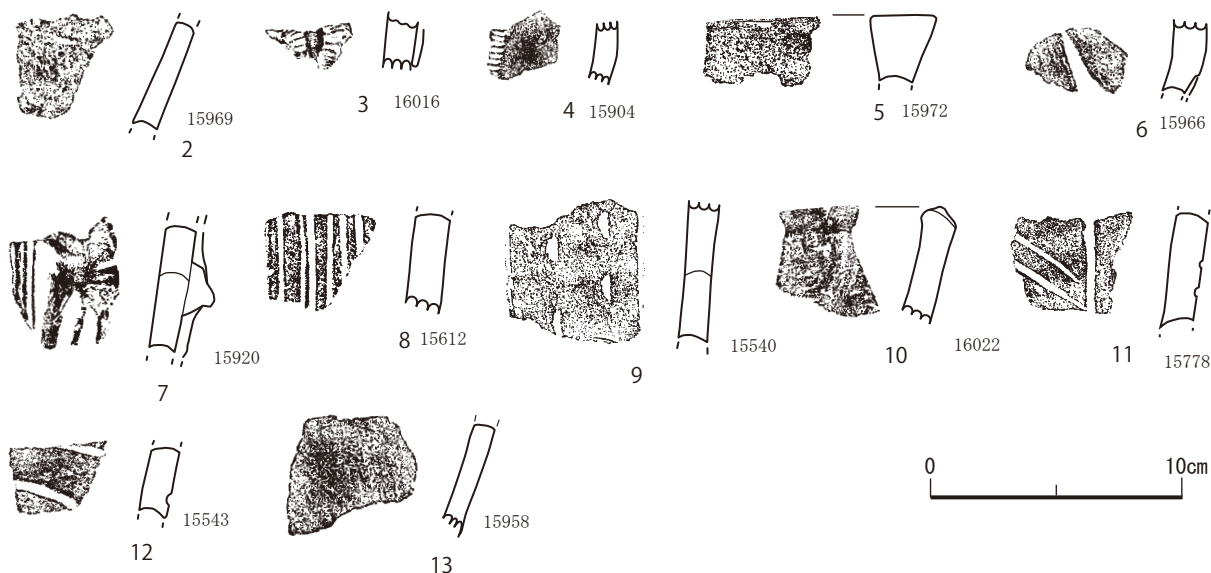


図 17 SU01 屋外埋蔵出土土器 (1/3)

表 4 SU01 屋外埋蔵出土土器観察表

図No.	注記	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)
1	15967	埋蔵	堀之内 1	後期		口縁～胴部	3272
2	15969	4	勝坂 1	5a	無文	胴部	16.8
3	16016	5	勝坂 2	7a	隆線→爪形文	胴部	10.7
4	15904	1	勝坂 2	7a	爪型文	胴部	8.8
5	15972	4	勝坂 3	9b	無文	口縁部	41
6	15966	5	勝坂 3	9c	陰刻文	胴部	17.7
7	15920	1	曾利Ⅱ	11b	隆線貼付、条線	胴部	39.2
8	15612	覆土	曾利Ⅱ	11	沈線	胴部	28.7
9	15540	1	堀之内 1	後期	沈線、列点	胴部	55.5
10	16022	5	堀之内 1	後期	無文	口縁部	20.4
11	15778	覆土	堀之内 1	後期	沈線	胴部	37.8
12	15543	5	堀之内 1	後期	沈線	胴部	16.6
13	15958	4	堀之内 1	後期	無文	胴部	27.1

土坑

SK01 土坑 (図 18～19・表 5)

本土坑は、2015 年度に部分的に掘り下げをして確認した範囲を広げ、おおよそ 3m × 2m の不正形の調査区を設定して全体像を把握することを試みた。土坑の北側には古代円形土坑が重なるため、南側および東側の 3/4 の部分を掘り下げ、縄紋土坑としての形状を把握した。土坑の平面形は楕円形、短軸 184cm、長軸 188cm、深さ 66cm、2 段に掘込を持ち、内部にはやや柔らかい覆土を包含する。貯蔵穴と考えられる。出土遺物としては、縄紋中期から後期の小破片が覆土中に散在していたが、覆土中の炭化物の炭素 14 年代測定では、縄紋晩期前半の年代値がまとまって測定されており、時期については縄紋時代後半期という以上には確定できない。

1 層 10YR3/4、粘性、しまり少、やや固い、黄色スコリア 1～3mm 1%、炭化物 1～3mm 1%、焼土粒 1%、炭化物、土器片を含む

2 層 10YR3/2、粘性、しまりやや少、固い、黄色スコリア 1～3mm 1.5%、炭化物 1～4mm 2～3%、焼土粒 2%

1 層より炭化物を多く含んでいる、土器片も 1 層よりやや多い

3 層 10YR3/3～3/4、粘性、しまり大、固い、黄色スコリア 1～3mm 2～3%、炭化物 1～3mm 0.5～1%、焼土粒 1%

ロームを含み、1,2 層よりも黄色を帯びる。土器片、炭化物は少なくなり、しまりが大きい。(大野朝日)

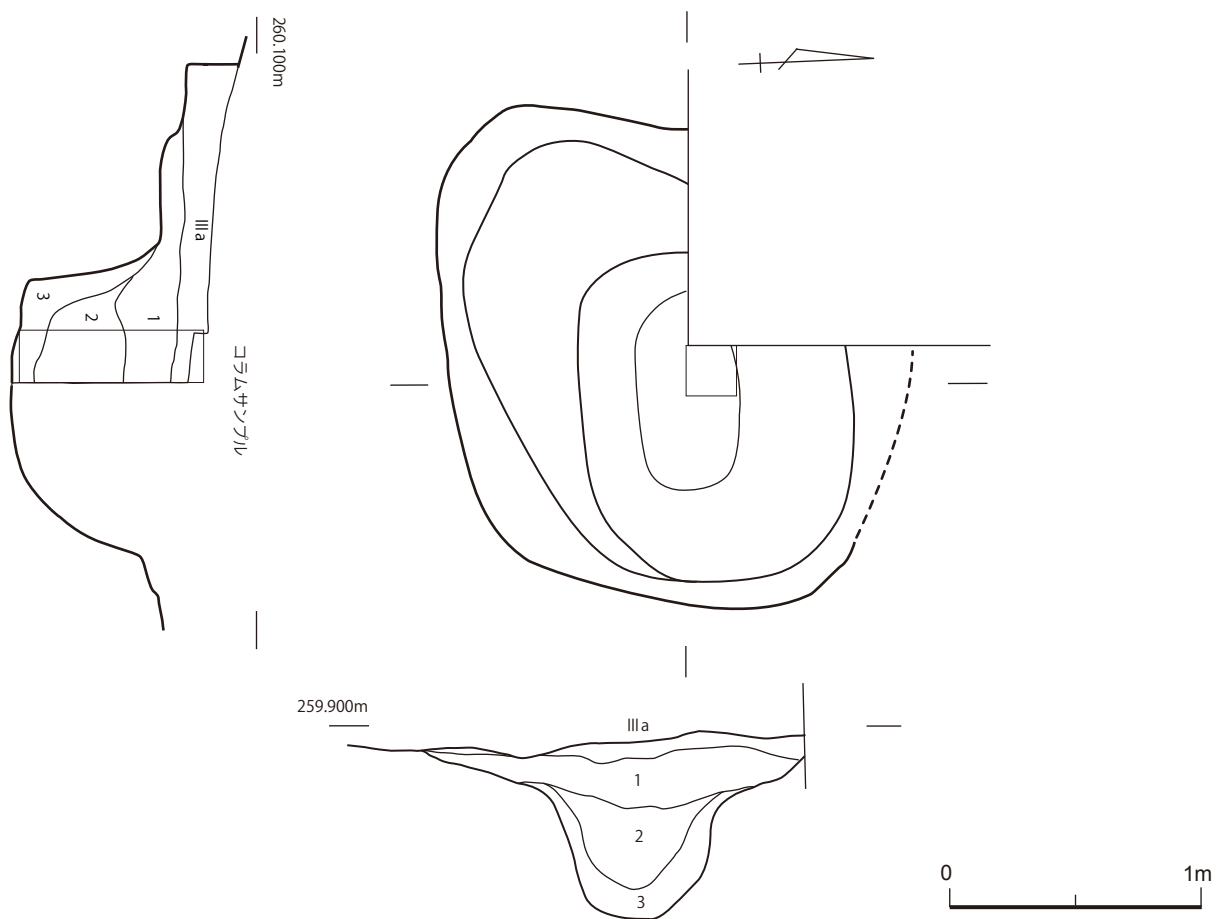


図 18 SK01 土坑 (1/30)

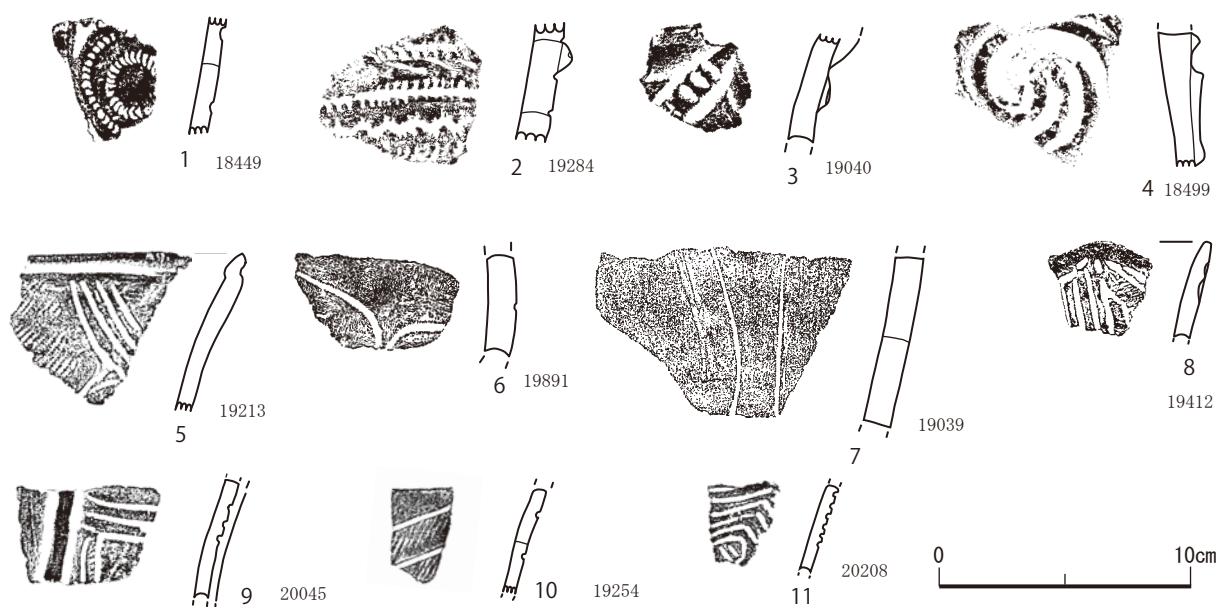


図 19 SK01 土坑出土土器 (1/3)

表5 SK 01 土坑出土土器観察表

図No.	注記	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
1	18449	2	勝坂 1	5c	ヘラ状工具による角押文	胴部	21.2	
2	19284	1	勝坂 1	6b	ヘラ状工具による三角刺突文、隆線上に沈線	胴部	51.2	
3	19040	3	勝坂 3	9c	隆線刻み	胴部	35.7	
4	18499	3a	曾利Ⅱ	11b	渦巻隆線文	胴部	65	
5	19213	1	堀之内 1	後期	LR 単節縄紋縦方向、沈線	口縁部	38.1	胎土分析
6	19891	1	堀之内 1	後期	沈線	胴部	36.7	
7	19039	3	堀之内 1	後期	沈線	胴部	105.4	
8	19412	1	堀之内 1	後期	沈線、刺突文、LR 単節縄紋充填	口縁部	12	波状口縁
9	20045	2	堀之内 1	後期	RL 単節縄紋縦方向、隆線、沈線	胴部	22	
10	19254	1	堀之内 1	後期	LR 単節縄紋充填	胴部	7.5	
11	20208	覆土	堀之内 2	後期	沈線、三角形区画	胴部	6.4	

ピット

調査区北側に位置する RC 区において、Ⅲ a 層掘り下げ時に柱穴状のピット 4 基が並んでいるのを確認した。ピット 1～4 とした。すべて直径 20～30cm ほどの円形のプランを呈し、深さ 20～30cm ほどの小ピットであり、覆土は下層に漸位層を混合した土層、上層にⅢ a 層に類似した暗褐色土を覆土とする。遺物としての出土はないが、覆土より縄紋時代後半期の所産と考えられる。調査は半裁状態に留めた。

(小林謙一)

遺構外出土土器

本遺跡出土の縄紋土器としては、5418 点の出土位置を記録した。この他にも一括で取り上げた土器がある。出土位置が記録されている土器のうち、型式のわかる土器が 4336 点存在する。内訳をみると、後期前葉堀之内式が 3111 点であり全体の 7 割以上を占め、堀之内 1 式が 2936 点と大多数である。次いで中期中葉の勝坂式が 966 点、阿玉台式が 87 点である。中期後葉は曾利式が 90 点、加曾利 E 式が 37 点であり、だが、この時期の土器は、少なめである。山梨県と隣接する本遺跡の地理的環境のため、勝坂式土器、曾利式土器が優勢となっている。山梨県と隣接するこの遺跡の地理的位置のため、曾利式が優勢となる。また早・前期の土器や後期後葉の土器もわずかながら出土している。

中期土器の時期設定は基本的に、「多摩・武蔵野地域を中心とした縄文時代の時期設定 (以下新地平編年)」(小林・中山・黒尾 2004)に基づいておこなった。

称名寺式・堀之内式土器の分類に関しては、石井寛 (石井 1984・1992・1993) を参考にした。

土器観察表について、遺物 No. は、光波測定器による点あげ番号であるが、接合した土器には k-No. をつけている。出土位置については省略しており、例えば F トレ西は F トレンチ西拡張区、RC 西は RC 西拡張区を示している。

遺構出土土器については各遺構ごとに記載してある。以下に遺構外出土土器について図と観察表を提示する。なお、SI15、16 の遺構確認時に出土した土器については遺構外で扱う。

(西本志保子)

参考文献

石井寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究 (予察)」『調査研究集録』第 5 冊 横浜市埋蔵文化財センター 1-47 頁

石井寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第 7 冊 横浜埋蔵文化財センター 1-70 頁

石井寛 1993 「第 3 編考察編 1. 堀之内 1 式土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 14 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 271-305 頁

黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討 (Ⅰ)」『論集宇津木台』第 1 集 宇津木台地区考古学研究会

小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定 (補)」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 3—勝坂から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会

中山真治・宇佐美哲也・武川夏樹・黒尾和久 2004 「東京編年表 (「東京図・②」) とその解説」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 3—勝坂から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会

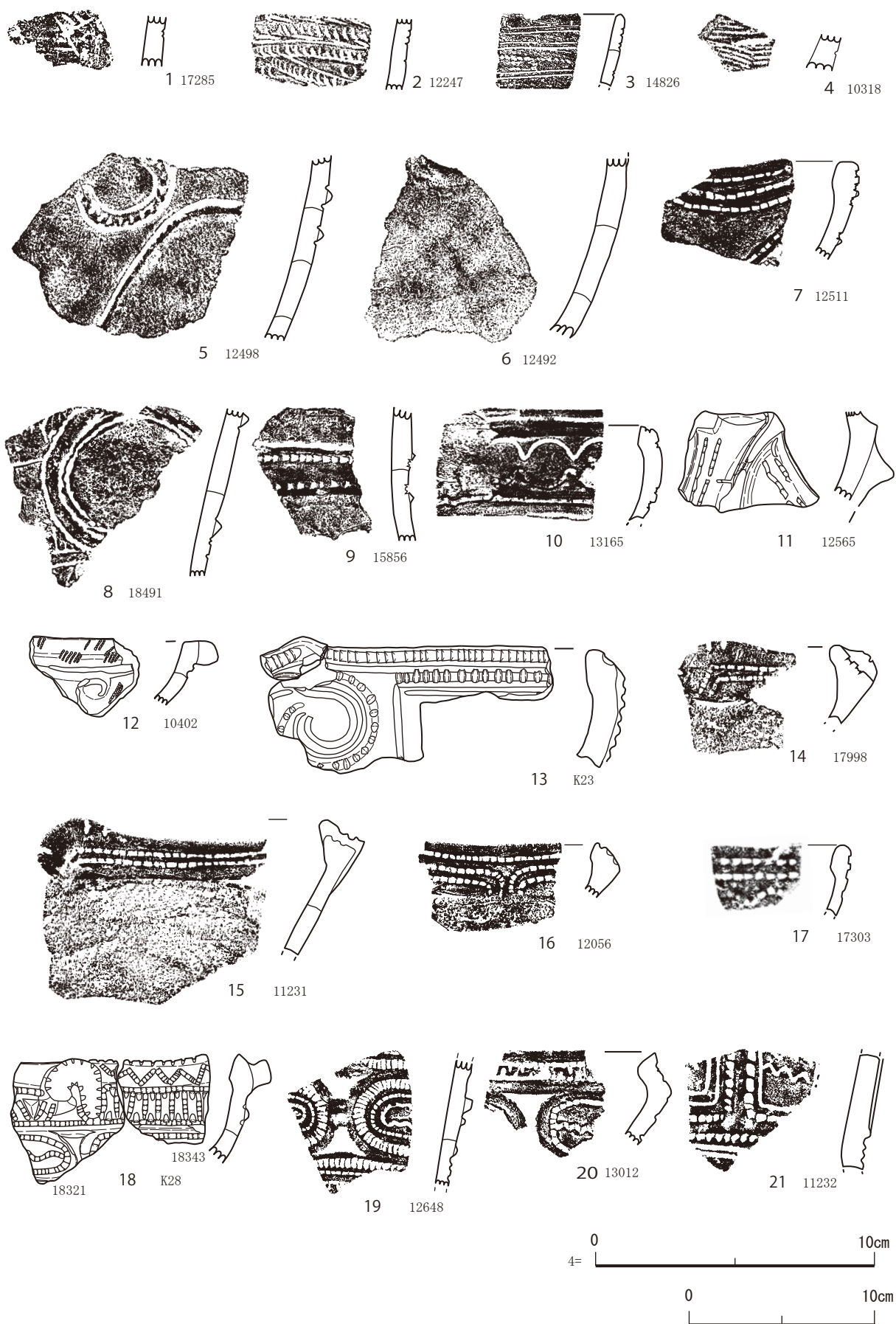


图 20 遺構外出土土器 1 (1/2・1/3)

表6 遺構外出土土器観察表

図No.	注記	出土位置	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
1	17285	RD	表土	鶴が島台	早期	沈線の上を竹管による円形刺突	胴部	8.8	早期条痕紋系
2	12247	Fトレ西	Ⅲ	諸磯 b2	前期	半截竹管による C 字状爪形文	胴部	33	
3	14826	Fトレ北	Ⅲ	諸磯 b2	前期	RL 単節縄紋斜位→半截竹管による平行沈線	口縁部	20.3	
4	10318	Eトレ中央	Ⅲ	桜沢式	前期	ヘラ描き沈線及び集合沈線	胴部	6.6	北陸系
5	12498	Eトレ西	Ⅲ	阿玉台 I a	5a	隆線横に沈線、隆線上に刻み	胴部	187.2	
6	12492	Eトレ西	Ⅲ	阿玉台 I a	5a	5 と同一個体か	胴部	141.1	
7	12511	Eトレ西	Ⅲ	阿玉台 I a	5a	竹管による幅 3mm の角押文	口縁部	55.8	
8	18491	RD	Ⅲ a	阿玉台 I b	5b	先端加工のヘラ状工具による幅 3mm の三角押文	胴部	96.7	
9	15856	SK3	覆土	阿玉台 I b	5b	竹管による幅 4mm の三角押文	胴部	56.1	内面に種子圧痕
10	13165	Eトレ中央	Ⅲ	阿玉台 I b	5b	竹管による幅 2mm の角押文	口縁部	74.6	
11	12526	Fトレ西	Ⅲ	阿玉台Ⅱ	6b	山形把手の先端破損、半截竹管による 2 列 1 組の角押文	口縁部	61.8	把手
12	10402	Fトレ北	Ⅱ	阿玉台Ⅲ	8a	口唇・口縁部に RL 単節縄紋	口縁部	35.8	
13	K23	Eトレ西		勝坂 1	5a	沈線及び口唇直下に 9mm の竹管による角押文、隆線上竹管で横位押圧	口縁部	145.6	
14	17998	RC 西	Ⅲ a	勝坂 1	5b	口唇上竹管による幅 3mm の角押文	口縁部	57.6	浅鉢
15	11231	Fトレ西	Ⅱ	勝坂 1	5b	14 と同一個体か	口縁部	169.4	浅鉢
16	12056	Fトレ北	Ⅲ	勝坂 1	5c	口唇上竹管による幅 3mm の角押文	口縁部	48.3	
17	17303	RC	Ⅱ	勝坂 1	5c	竹管による幅 4mm の連続刺突文	口縁部	26.3	
18	K28	RC 西		勝坂 1	5c	口唇上ヘラ刻み、口縁部区画内に竹管による幅 2mm の角押文	口縁部	124.4	
19	12643	Fトレ西	Ⅲ	勝坂 1	5c	幅 6mm のヘラ状工具による角押文、竹管による 2mm の角押文	胴部	50.4	側面に種子圧痕
20	13012	Fトレ南	Ⅲ	勝坂 1	5c	竹管による幅 3mm の角押文、口縁部にコの字状交互刺突	口縁部	38.4	浅鉢
21	11232	Fトレ西	Ⅱ	勝坂 1	5c	幅 5mm と 3mm の角押文	胴部	64.9	
22	18187	RD	Ⅱ	勝坂 1	6a	幅 6mm の角押文、幅 2mm の三角押文	胴部	38.4	
23	18438	RD	Ⅲ a	勝坂 1	6a	幅 5mm の三角押文	口縁部	41.1	
24	12086	Fトレ北	Ⅲ	勝坂 1	6a	粘土紐の円形文貼付、幅 8mm の三角押文	把手	46.9	
25	12959	Fトレ西	Ⅲ	勝坂 1	6a	幅 5mm ～ 7mm の三角押文	口縁部	46.6	
26	11318		Ⅲ	勝坂 1	6a	幅 6mm 及び 4mm の三角押文	口縁部	75.3	
27	K26	Fトレ西		勝坂 1	6a	粘土紐の円形文貼付、幅 3 ～ 5mm の三角押文	口縁部	77.1	
28	10404	Fトレ北	Ⅱ	勝坂 1	6b	幅 7mm の角押文、幅 3mm の三角押文	胴部	40.5	
29	12965	Fトレ西	Ⅲ	勝坂 1	6b	幅 8mm の角押文、幅 3mm の三角押文、三角形区画内に三角形の削切文	口縁部	40.9	
30	12569	Fトレ西	Ⅲ	勝坂 1	6b	幅 7mm の角押文、幅 3mm の三角押文	胴部	30.4	
31	18422	RD	Ⅲ a	勝坂 1	6b	幅 10mm の角押文	胴部	44.9	
32	17495	RD	Ⅱ	勝坂 1	6b	幅 10mm の角押文、脇 3mm の三角押文	胴部	114.9	
33	K22	RD		勝坂 2	7b	RL 単節縄紋横→ヘラ状工具による連続刺突文で三角区画	胴部	110.3	
34	10582	Gトレ北	Ⅲ	勝坂 2	8a	隆帯上を円形刺突及び沈線、測位にヘラ状工具による連続刺突文	胴部	25.3	

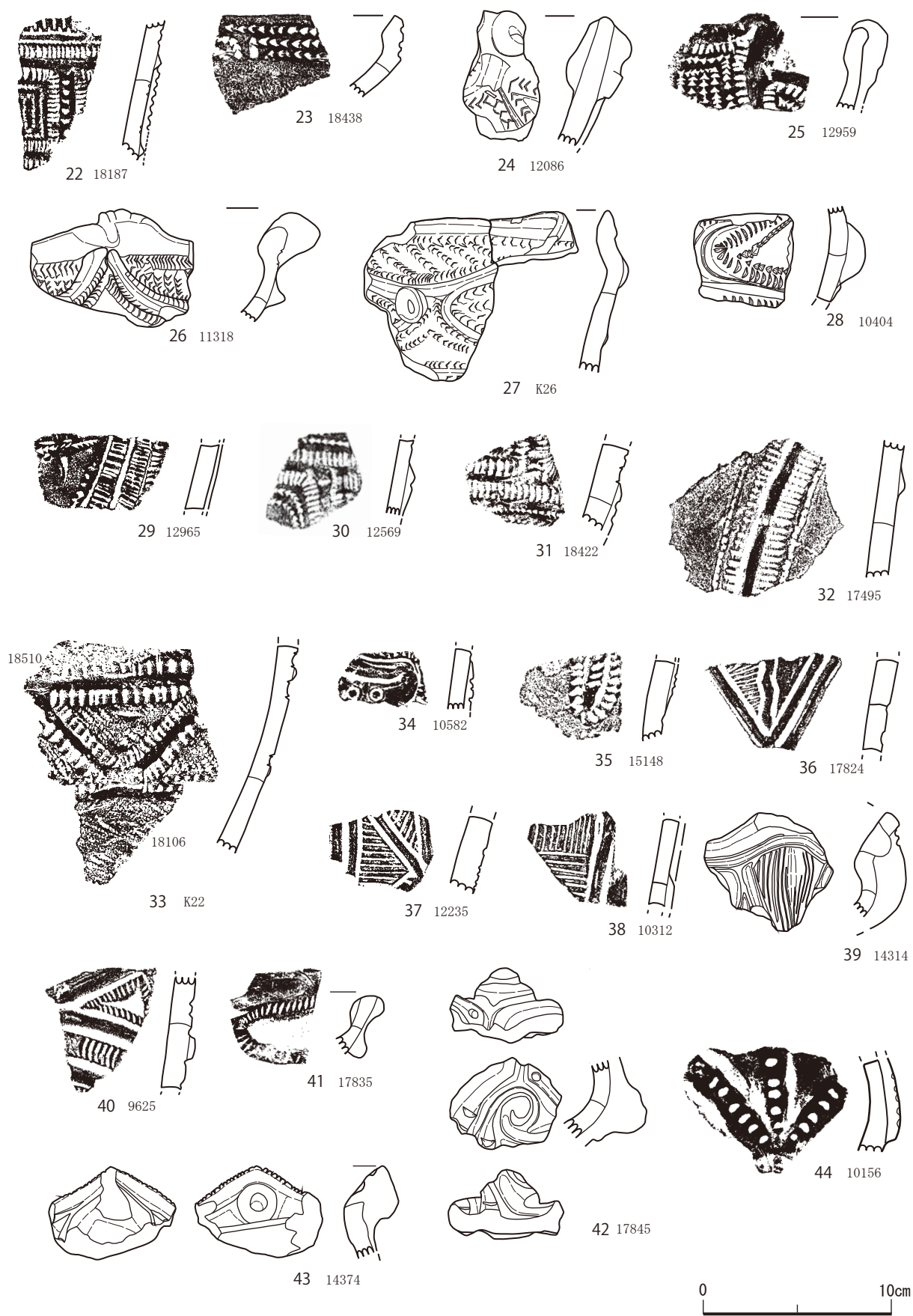


图 21 遺構外出土土器 2 (1/3)

図No	注記	出土位置	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
35	15148	Fトレ北	Ⅲ a	勝坂 2	8a	三角形の連続刺突文、隆線上にヘラ刻み	胴部	36	ワラジム シ 状 モ チーフ
36	17824	RC 西	Ⅲ a	勝坂 2	8b	半截竹管による平行沈線、部分的に細かい沈線で充填	胴部	45.7	パネル文
37	12235	Fトレ西	Ⅲ	勝坂 2	8b	半截竹管による縦区画→沈線で充填	胴部	37	パネル文
38	10312	Eトレ中 央	Ⅲ	勝坂 2	8b	半截竹管による縦区画→沈線で充填	胴部	29.2	パネル文
39	14314	Fトレ北	I	勝坂 2	8b	袋状突起上に細かい半截竹管による平行沈線、口唇 内側に指による窪み、	口縁部	56.1	
40	9625	Eトレ中 央	Ⅱ	勝坂 3	9a	隆線と沈線による区画、区画中央にヘラで削切した 三叉文	胴部	54.9	中帯文
41	17835	RC 西	Ⅲ a	勝坂 3	9a	隆帯上にヘラ刻み	口縁部	28.6	
42	17845	RD	Ⅱ	勝坂 3	9a	口縁部に渦巻状に突出した隆線貼付	把手	58.7	
43	14374	Ⅲ層	Ⅲ	勝坂 3	9a	口唇上ヘラ刻み、口唇内面に円形貼付文による玉抱 き三叉文のモチーフ	口縁部	55.6	眼鏡状把 手が欠損
44	10156	Fトレ北	Ⅲ	勝坂 3	9b	弯曲した口縁部の隆線上にヘラ刻み	胴部	42.7	
45	15656	Eトレ北	Ⅲ a	勝坂 3	9b	隆線上ヘラ刻み、沈線	口縁部	34.3	
46	18067	RC 西	Ⅲ a	勝坂 3	9b	隆線上矢羽状刻み、部分的に削切した三叉文	胴部	38.5	
47	11027	Fトレ東	表土	勝坂 3	9b	搭状把手の一部	口縁部	54.5	
48	17790	RC 東	Ⅲ a	勝坂 3	9b	屈曲した内彎口縁	口縁部	54.9	多喜窪型 の屈折部
49	17949	RC 西	Ⅲ a	勝坂 3	9c	搭状把手の一部	口縁部	33	袋状把手
50	12386	Eトレ中 央	Ⅲ	勝坂 3	9c	隆線上ヘラ刻み、太い沈線を三叉状印刻文	胴部	84.6	波状口縁
51	K13	Fトレ北		勝坂 3	9c	隆線上に交互刺突により矢羽状刻み	口縁部	44.5	
52	18178	RD	Ⅱ	時期不明		補修孔を内面から穿つ	胴部	26.8	鉢形土器
53	15921	Eトレ中 央	Ⅲ b	曾利 I	10b	棒状工具による沈線文	胴部	34.3	
54	11110	Fトレ南	Ⅱ	曾利 I	10b	頸部波状隆線貼付による区画	胴部	39.5	
55	10314	Eトレ中 央	Ⅲ	曾利 II	11b	半截竹管による重弧文、細い波状隆線貼付	胴部	30.5	
56	17707	RC	Ⅲ a	曾利 II	11b	隆線貼付→沈線で間をなぞる	口縁部	40.2	
57	11280	Fトレ北	Ⅱ	曾利 III	11c	RL 単節縄紋縦→隆線によるつなぎ弧文	口縁部	55.6	年代測定
58	K16	Fトレ東		曾利 II	11b	RL 単節縄紋縦→波状隆線貼付	胴部	90.7	
59	10950	Fトレ西	Ⅱ	加曾利 E3	12b	区画内 R 無節縄紋横	胴部	128.5	両耳壺
60	18439	RD	Ⅲ a	称名寺 I	14b	LR 単節縄紋充填	口縁部	24	年代測定
61	20409	SI-16	確認 面	称名寺 I	15a	LR 単節縄紋横充填	口縁部	64.5	
62	12649	Fトレ北	覆土	称名寺 I	15a	LR 単節縄紋横充填	胴部	34.3	
63	18511	RC 西	Ⅱ	称名寺 II	16	竹管による沈線及び刺突	胴部	18.7	注口土器
64	17412	RC	Ⅱ	三十稲場	後期	爪状工具による刺突、一部が盛り上がる	胴部	23.8	蓋の一部 か
65	K1	Fトレ東		堀之内 1	後期	RL 単節縄紋横	口縁部	77.6	鉢形土器
	11048	Fトレ東	表土	堀之内 1	後期	86 と同一個体	口縁部	8.6	
	14407	Eトレ南	Ⅱ	堀之内 1	後期	86 と同一個体	口縁部	36.9	
66	19977	Fトレ西	Ⅲ a	堀之内 1	後期	沈線及び刺突文	口縁部	43.7	下北原タ イプ



图 22 遺構外出土土器 3 (1/3)

図No	注記	出土位置	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
67	11641	Fトレ東	Ⅲ	堀之内 1	後期	口縁肥厚→沈線	口縁部	48.7	下北原タイプ
68	10063	Eトレ西	Ⅱ	堀之内 1	後期	沈線及び竹管による刺突	口縁部	29.1	下北原タイプ
69	15762	Fトレ東	Ⅲ a	堀之内 1	後期	沈線及び円形刺突	口縁部	62.1	斜行系
70	K5	Eトレ中央		堀之内 1	後期	沈線及び円形刺突、小波状直下は貫孔する	口縁部	59.3	斜行系
71	9342	Fトレ北	Ⅱ	堀之内 1	後期	沈線及び短沈線の刺突	口縁部	52.7	斜行系
72	K41	E・F ベルト		堀之内 1	後期	沈線	胴部	73.3	斜行系
73	14001	Fトレ南	-	堀之内 1	後期	沈線及び刺突、小波状直下は円形刺突	口縁部	159.5	斜行系
74	14164	Fトレ東	Ⅱ	堀之内 1	後期	隆線垂下、小波状直下円形刺突、内面沈線及び円形刺突	口縁部	26.9	小仙塚タイプ
75	18441	RC 西	Ⅲ a	堀之内 1	後期	内面円形刺突	口縁部	52.4	小仙塚タイプ
76	K14	Eトレ中央		堀之内 1	後期	区画内 R 無節縄紋充填	胴部	102.2	小仙塚タイプ
77	K46	Eトレ中央		堀之内 1	後期	隆線垂下、両側を指でなでつける、口唇部に沈線及び貫孔	口縁部	156.8	小仙塚タイプ
78	K19	Eトレ東		堀之内 1	後期	沈線及び円形刺突	口縁部	34.8	小仙塚タイプ
79	9919	Eトレ中央	Ⅱ	堀之内 1	後期	沈線	胴部	4.7	小仙塚タイプ
80	9924	Eトレ中央	Ⅱ	堀之内 1	後期	沈線	胴部	49.1	小仙塚タイプ
81	13089	Fトレ南	Ⅲ	堀之内 1	後期	渦巻状の隆線、その周囲に沈線	胴部	38.1	小仙塚タイプ
82	12759	Eトレ中央	Ⅲ	堀之内 1	後期	沈線及び刺突	口縁部	41.1	浅鉢か
83	18209	RC	Ⅲ a	堀之内 1	後期	LR 単節縄紋縦→沈線	胴部	141.4	石井 E 群か
84	K33	RC 西		堀之内 1	後期	LR 単節縄紋縦	口縁部	57.5	石井 F 群
85	10825	Gトレ北	-	堀之内 1	後期	沈線、隆線上に円形刺突	口縁部	52.1	注口土器
86	15458	Fトレ東	Ⅲ a	堀之内 1	後期	沈線→円形刺突	把手	20.2	注口土器
87	K34	Eトレ中央		堀之内 1	後期	LR 単節縄紋横	胴部	86.4	注口土器 胴部
88	K48	Fトレ北		堀之内 1	後期	RL 単節縄紋主に横	胴部	123.9	
89	15797	Fトレ北	Ⅲ a	堀之内 1	後期	LR 単節縄紋横	胴部	34	
90	12450	Eトレ中央	Ⅲ	堀之内 1	後期	RL 単節縄紋横	口縁部	36.6	鉢形
91	K11	Fトレ北		堀之内 2	後期	沈線による三角形区画、LR 単節縄紋横充填	口縁部	30.3	朝顔形、幾何学系
92	K21	Fトレ北		堀之内 2	後期	沈線による三角形区画、LR 単節縄紋横充填	口縁部	26	朝顔形、幾何学系
93	K31	RC		堀之内 2	後期	沈線による三角形区画、LR 単節縄紋横充填	口縁部	31.9	朝顔形、幾何学系

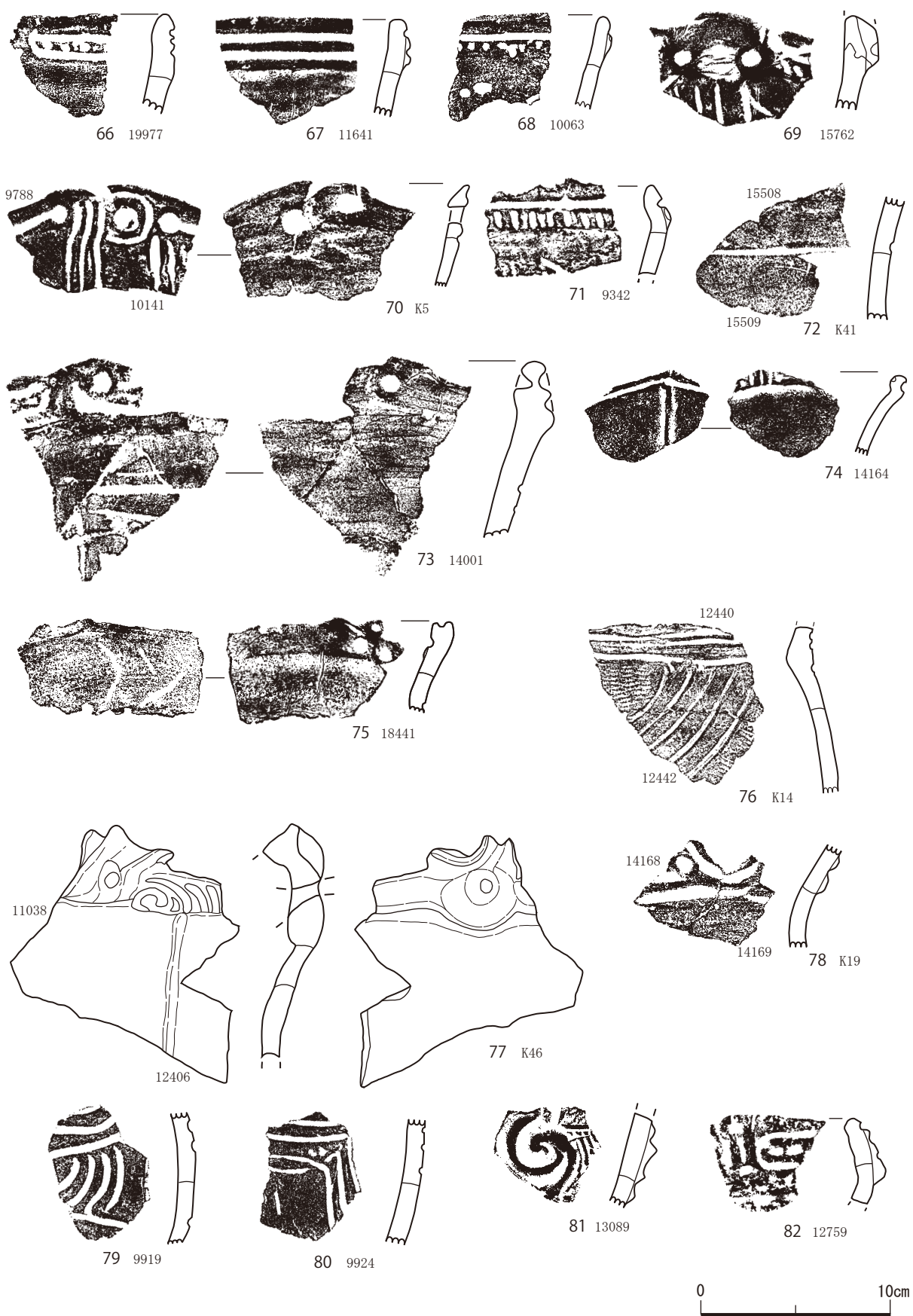


图 23 遺構外出土土器 4 (1/3)

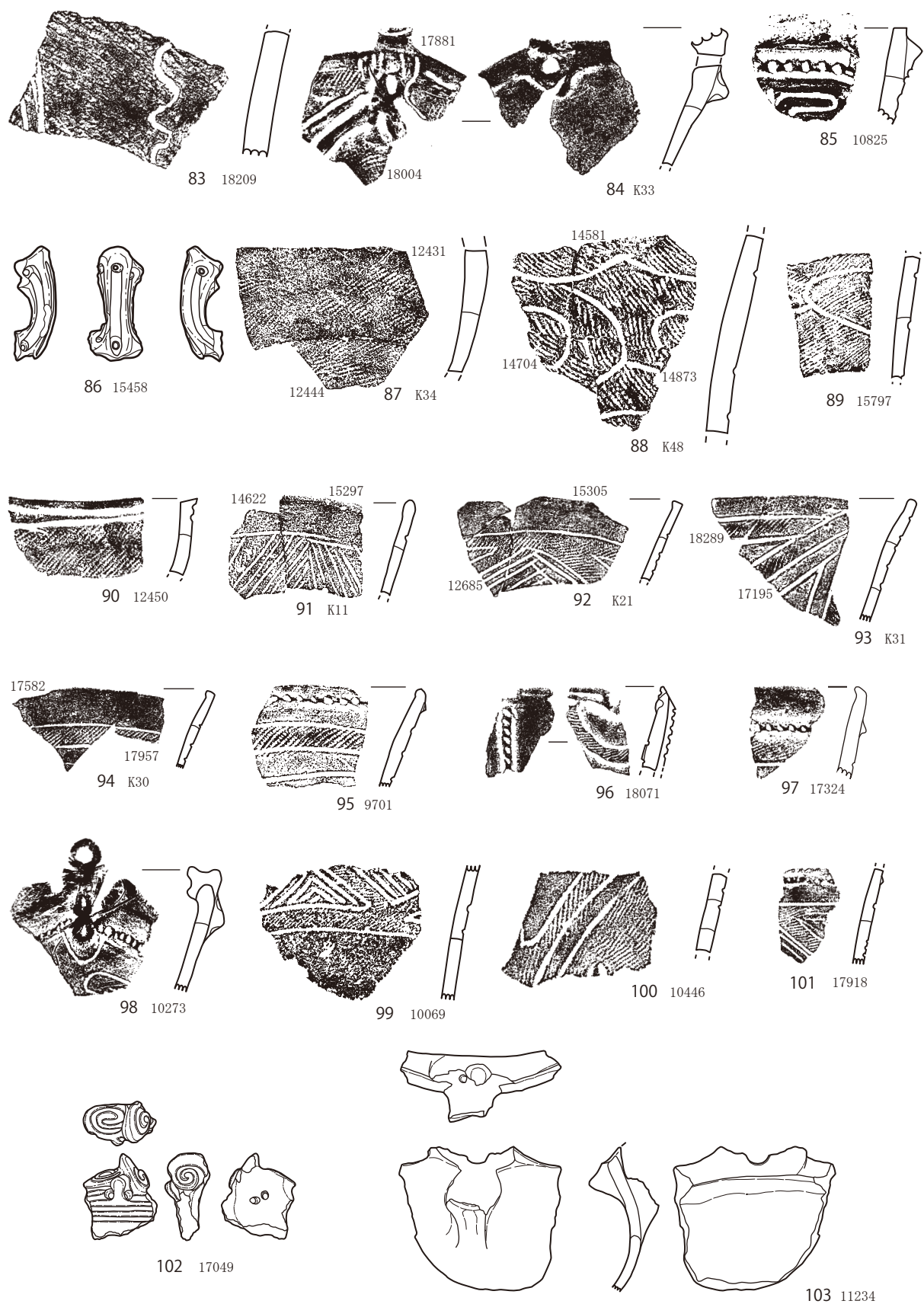


图 24 遺構外出土土器 5 (1/3)

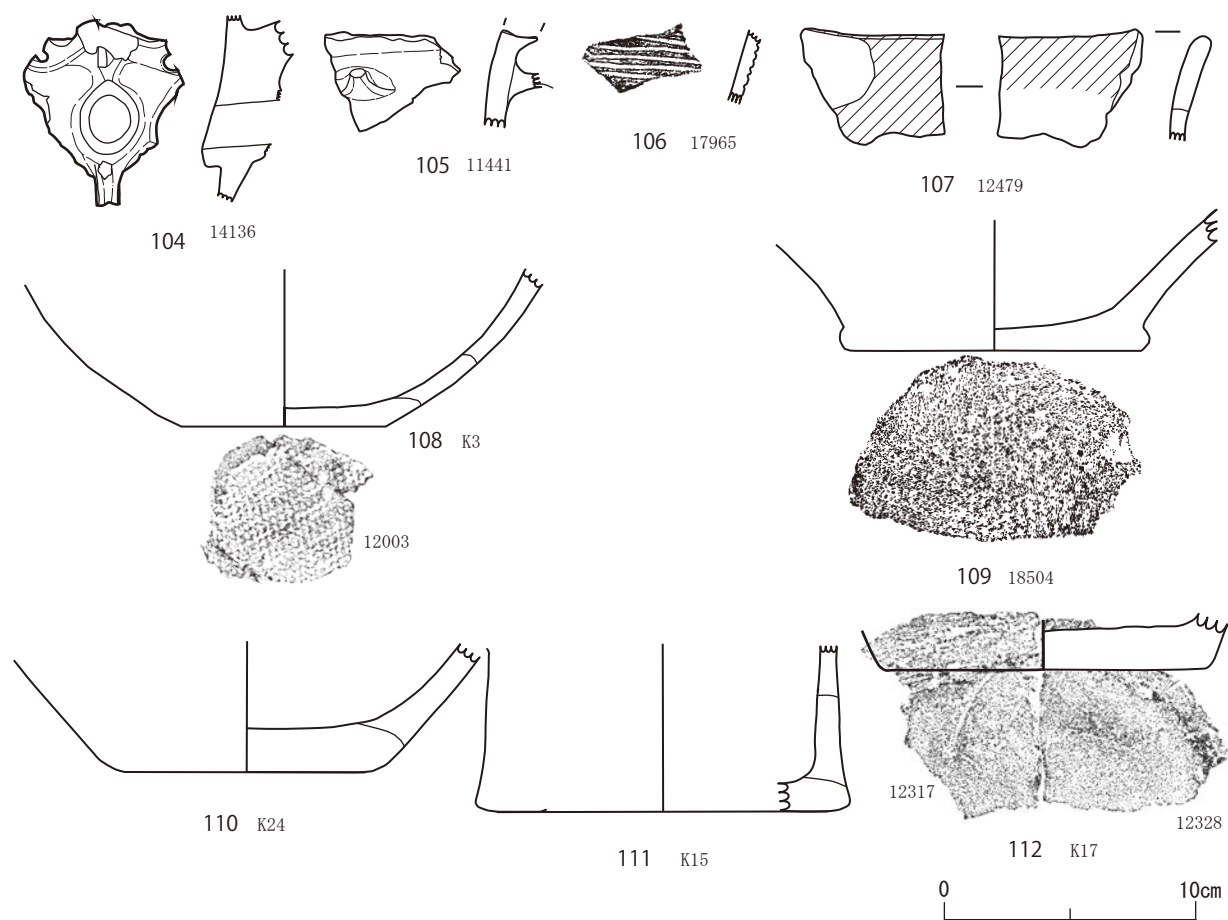


図 25 遺構外出土土器 6 (1/3)

図No.	注記	出土位置	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
94	K30	RC		堀之内 2	後期	LR 単節縄紋横充填	口縁部	17.5	朝顔形、幾何学系
95	9701	G トレ南		堀之内 2	後期	LR 単節縄紋横充填	口縁部	32.3	朝顔形、幾何学系
96	18071	RC 西	III a	堀之内 2	後期	隆線垂下上刻み、内面隆带上 LR 単節縄紋	口縁部	14.5	朝顔形、幾何学系
97	17324	RC	II	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋横充填	口縁部	18	朝顔形、幾何学系
98	10273	G トレ北	II	堀之内 2	後期	沈線及び隆線上刺突、LR 単節縄紋横充填	口縁部	43.2	朝顔形、幾何学系
99	10069	E トレ東	III	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋横充填	胴部	49.3	朝顔形、幾何学系
100	10446	F トレ南	II	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋充填	胴部	26.3	朝顔形、幾何学系
101	17918	RC 西	III	堀之内 2	後期	LR 単節縄紋横充填	胴部	11.4	朝顔形、幾何学系
102	17049	RC	表土	堀之内 2	後期	内面沈線	口縁部	18.8	把手
103	11234	F トレ西	II	堀之内 2	後期	突起部欠損、黒色磨研か	胴部	77.9	注口土器

図No	注記	出土位置	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)	備考
104	14136	Eトレ北	Ⅱ	堀之内 2	後期	注口部欠損	胴部	76.2	注口土器
105	11441	Fトレ北	Ⅲ	堀之内 2	後期	注口部把手欠損	胴部	18.6	注口土器
106	17965	RC 西	Ⅲ	加曽利 B3	後期	LR 単節縄紋磨消	胴部	6.7	
107	12479	Eトレ西	Ⅲ	堀之内	後期	内外面赤色塗布か	口縁部	25.3	
108	K3	Eトレ中央		堀之内 1	後期	1 本超え 1 本潜り 1 本送り	底部	151.2	網代痕あり
109	18504	RC 東	Ⅲ a	堀之内 1	後期	1 本超え 2 本潜り 1 本送り	底部	285	網代痕あり
110	K17	Fトレ北		堀之内 1	後期	無文	底部	30.4	
111	K15	Fトレ北		堀之内	後期	無文	底部	130.5	
112	K24	Fトレ東		堀之内	後期	無文	底部	471.7	

土製品 (図 26・表 7)

土製円盤

本調査地点からは、土製円盤 (土器片円盤) が 23 点出土しており、その全てを図示し、観察については表 7 に記す。形態については、側面が丁寧に磨かれた円形のものと同角張った円形のものがある。土製円盤については、その機能・用途が不明であるため、これらの違いが使用差によるものかは不明である。大きさをみると、その大部分が径 3cm～4.8cm に収まるが、うち 1 点は 2.5cm と小さく (3)、2 点は 5.3cm、5.8cm と大型である (16、22)。

1～7、9 は、勝坂式に比定される。1～3 は勝坂 1 式である。1 は隆線区画の内側に連続刺突文が施されている。2 はへら状工具による連続刺突文や三角押文、3 は三角押文が施文される。4～7 は勝坂 2 式である。4 は隆線脇に爪形文、5 は幅広のへら状工具による連続刺突文、ハの字状刺突文が施文される。6 は隆線上に刺突が施され、その脇に沈線、刺突文が施文される。7 はへら状工具による連続刺突文が施される。9 は断面三角形の 2 本の隆線が施文される。

8 は曾利式に比定される。8 は、沈線列と刻みをもつ隆線 (山形 1 類) による文様が施され、曾利 I b 式である。

10 は加曽利 E 式に比定される。全面に燃糸文が施され、加曽利 E1 式である。

12 は称名寺式に比定される。沈線区画の内側を LR 単節縄紋で充填されており、称名寺 I 式に比定される。

13～20 は堀之内 1 式である。13 は棒状工具による円文が施される。14、15 は沈線、16 は前面に RL 単節縄紋が施文される。17～20 は無紋である。

11、21～23 は型式不明の土製円盤であり、11 は RL 単節縄紋が施される。21～23 は無紋である。

ミニチュア土器

本調査地点からは、ミニチュア土器の底部が 1 点出土した。外面に 2 本の沈線が縦に施文され、堀之内 1 式に比定される。

(金子悠人)

表 7 出土土製品観察表

図No	注記	種類	遺構	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)
1	X-1001	土製円盤			勝坂 1	5	隆線→連続刺突文	胴部	19.5
2	15629	土製円盤		Ⅲ a	勝坂 1	6a	へら状工具による連続刺突文、三角押文	胴部	23.3
3	9664	土製円盤		Ⅱ	勝坂 1	6a	三角押文	胴部	6.2
4	18105	土製円盤		Ⅱ	勝坂 2	7b	幅広のへら状工具による連続刺突文	胴部	12.9
5	13103	土製円盤		Ⅲ	勝坂 2	7b	幅広のへら状工具による連続刺突文、ハの字状刺突文	胴部	14.7
6	17491	土製円盤		Ⅲ	勝坂 2	7b	隆線上に刺突文	胴部	17
7	14028	土製円盤		I	勝坂 2	7b	へら状工具による連続刺突文	胴部	12.3
8	9284	土製円盤	SI14	覆土	曾利 I	10b	沈線列、隆線上に刻み	胴部	13.8
9	11957	土製円盤		Ⅲ	勝坂		隆線	胴部	14.6

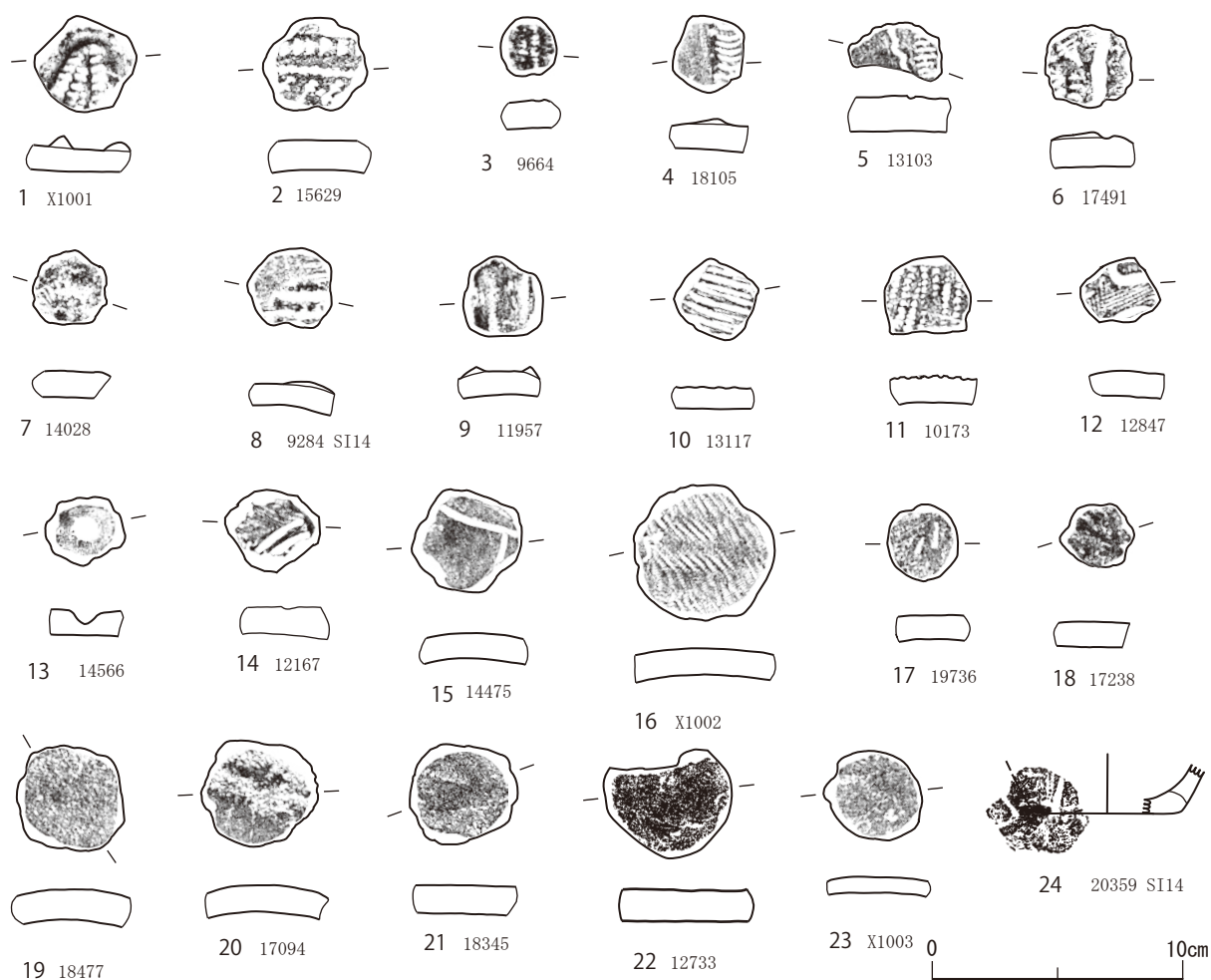


図 26 出土土製品 (1/3)

図No.	注記	種類	遺構	層位	型式	時期	文様・地紋	部位	重量 (g)
10	13117	土製円盤		Ⅲ	加曾利 E1	11	撚糸紋	胴部	10.6
11	10173	土製円盤		Ⅲ	不明	不明	RL 単節縄紋	胴部	15.3
12	12847	土製円盤		Ⅲ	称名寺 I	後期	LR 単節縄紋充填	胴部	9.2
13	14566	土製円盤		Ⅱ	堀之内 1	後期	円文	胴部	8.4
14	12167	土製円盤		Ⅲ	堀之内 1	後期	沈線	胴部	13.5
15	14475	土製円盤	SI14	覆土	堀之内 1	後期	沈線	胴部	21.8
16	X-1002	土製円盤		表採	堀之内 1	後期	RL 単節縄紋	胴部	43.6
17	19736	土製円盤	SI15	Ⅲ a	堀之内 1	後期	無紋	胴部	10.6
18	17238	土製円盤		表土	堀之内 1	後期	無紋	胴部	10.2
19	18477	土製円盤		Ⅲ	堀之内 1	後期	無紋	胴部	29.9
20	17094	土製円盤		表土	堀之内 1	後期	無紋	胴部	24.3
21	18345	土製円盤		Ⅱ	不明	不明	無紋	胴部	24.6
22	12733	土製円盤		Ⅲ	不明	不明	無紋	胴部	33.9
23	X-1003	土製円盤		表採	不明	不明	無紋	胴部	13.2
24	20359	ミナブ	SI14	覆土	堀之内 1	後期	沈線	底部	9.8

出土石器（図 27 ～ 29・表 8）

石器としては 111 点確認されており、打製石斧 22 点以上、磨製石斧 4 点以上、石皿 1 点、磨石類 3 点以上、石鏃 4 点以上、石錘 5 点以上、スクレイパー 2 点以上、石錐 1 点、石核 1 が認められる。縄紋時代中期及び後期の所産と考えられるが、明確に時期差を示すものはないが、礫石錘すべて、および磨製石斧の大部分は後期の属する所産と考えるほか、SK01 出土の石鏃は晩期に属する飛行機鏃の可能性が指摘できる。このほか、黒曜石製剥片碎片が 207 点検出されている。スタンプ形石器が出土しているが、早期のものかは断定できない。以下、石器については器種別に提示し、出土遺構については、図および観察表に遺構名を記した。

（小林謙一）

打製石斧の分類

1a 類：両辺が並行するもの（短冊）。

1b 類：両辺が刃部に向かい直線的に開くもの、大型のもの。

2a 類：両辺が刃部に向かい直線的に開くもの（バチ形）。器長短く、薄いもの。

2b 類：両辺がゆるく内湾しながら刃部に向かい直線的に開くもの（バチ形）。器長短く、薄いもの。

3a 類：両辺が内湾するもの（分銅形）。大型、上部器幅も大きい。

3b 類：両辺の中央近くでノッチ様の部分的な内湾をもつ。

4a 類：半円または円形を呈するもの、大型のもの。

4b 類：半円または円形を呈するもの、小型のもの。

不明：破損により、外形の推測が不可能なもの。

未成品：他の打製石斧に比べ加工が進んでいないもの。

剥片類分類

1a 類：打製石斧の素材剥片となりうる法量のもの。

1b 類：5cm 以上で打製石斧の素材剥片となるだけの法量を持たないもの。

1c 類：打製石斧の制作に伴うもの（5cm 以下）。

2 類：小型剥片石器の制作に伴うと思われるもの。ガラス質・珪質の石材（黒曜石を含む）。

（大野朝日）

表 8 出土石器観察表

図 No.	注記	分類	遺構	層位	器長 (cm)	器幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	残留デンプン分 析
1	14844	石鏃		Ⅲ	2.2	1.7	0.3	0.7	黒曜石	
2	18356	石鏃		Ⅱ	1.2	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
3	19167	石鏃		Ⅰ	1.3	1.1	0.3	0.3	黒曜石	
4	19432	石鏃	SK01	覆土	2.7	1.8	3.8	1.4	玉髄	
	14755	石鏃	SI14	覆土	2.2	0.9	0.4	0.5	黒曜石	
	19869	石鏃		Ⅰ	1.8	0.9	0.2	0.2	黒曜石	
	12624	石鏃未製品	SI14	覆土	2.6	2.2	0.8	3.3	灰白色珪質岩	
5	17658	削器			3.7	4.7	0.8	18.0	暗灰色チャート	
6	14812	RF		Ⅲ	6.5	8.3	1.5	79.9	砂岩	
	17527	RF		Ⅲ a	3.8	2.3	1.3	11.1	暗灰色チャート	
	19112	UF		Ⅲ a	3.9	2.1	1.0	7.7	暗灰色チャート	
7	19368	石核		Ⅲ a	8.9	6.7	4.1	210.8	砂岩	
8	11373	石匙	SI14	覆土	5.4	5.9	1.1	25.3	片状砂岩	
9	11573	石匙	SK08	覆土	3.9	9.3	1.1	33.4	片状砂岩	
	9574	打斧 1a 類		Ⅱ 層	9.6	4.9	2.1	104.5	片状砂岩	
10	9845	打斧 1a 類	SI14	覆土	10.1	4.9	1.9	119.0	片状砂岩	
	10429	打斧 1a 類			7.7	5.3	2.1	104.4	片状砂岩	
	11065	打斧 1a 類		表土	10.1	4.8	1.8	128.9	片状砂岩	
	11158	打斧 1a 類		Ⅲ	9.7	5.5	1.9	126.6	片状砂岩	
	11169	打斧 1a 類		Ⅱ	5.3	6.0	1.1	54.1	片状砂岩	
	11233	打斧 1a 類		Ⅱ	12.6	5.6	2.1	174.2	片状砂岩	
	11379	打斧 1a 類	SI14	覆土	8.3	5.4	2.1	110.1		
	11627	打斧 1a 類		Ⅱ	8.2	3.9	1.7	65.9	片状砂岩	
	11639	打斧 1a 類		Ⅱ	8.1	4.6	2.2	96.8	片状砂岩	
	13081	打斧 1a 類		Ⅲ	12.1	4.9	1.8	112.2	片状砂岩	

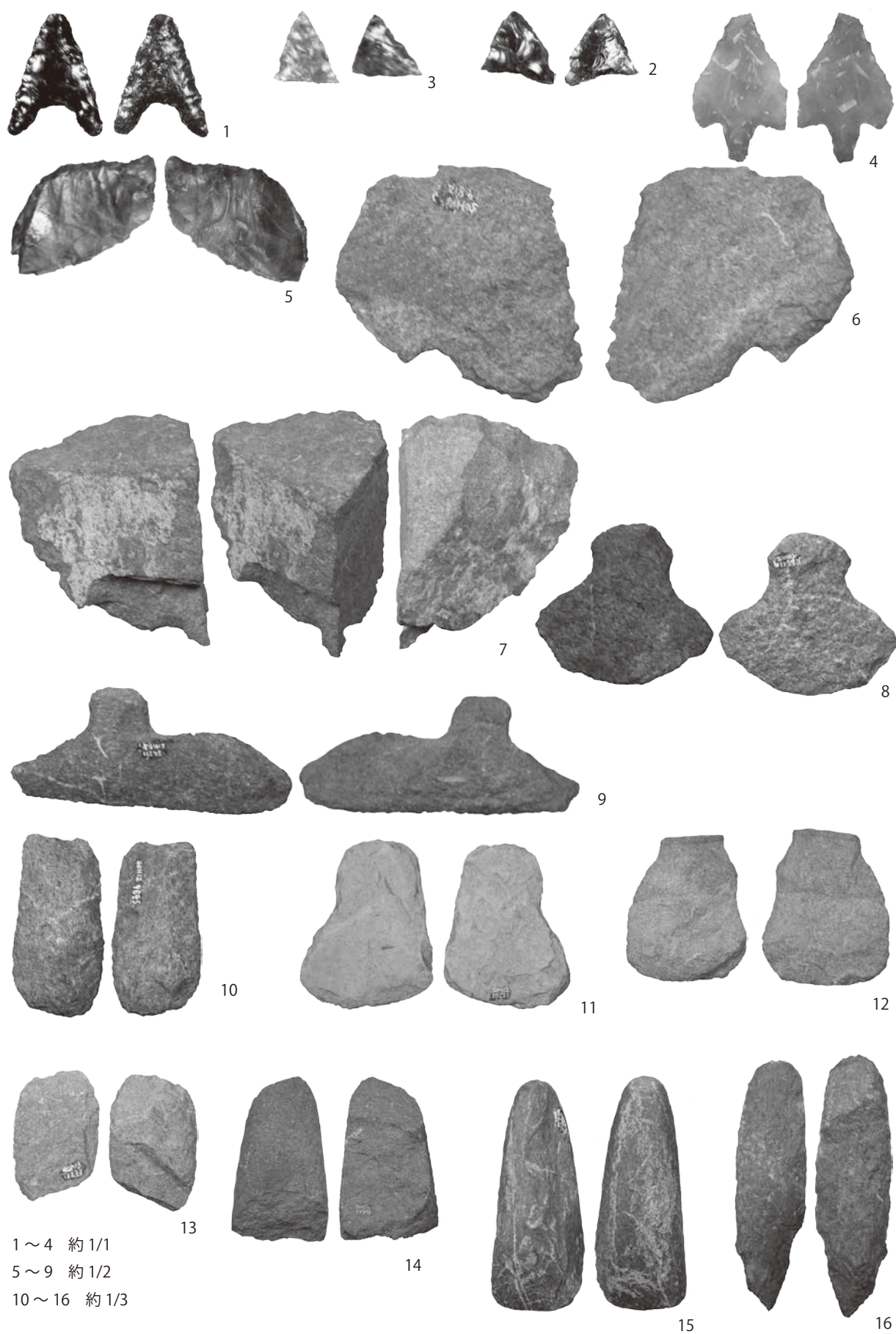


図 27 出土石器 1



図 28 出土石器 2

図 No.	注記	分類	遺構	層位	器長 (cm)	器幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	残留デンプン分 析
	14359	打斧 1a 類		II	11.0	5.1	2.1	146.9	片状砂岩	
	14509	打斧 1a 類	SI14	覆土	7.4	5.3	2.3	101.1	片状砂岩	
	15667	打斧 1a 類		III a	7.4	5.1	2.1	104.7	片状砂岩	
	15801	打斧 1a 類		III a	9.4	5.2	2.1	121.8	片状砂岩	
	16014	打斧 1a 類	SU01	覆土	9.8	4.8	2.3	114.8	片状砂岩	
	16021	打斧 1a 類	SU01	覆土	6.8	4.4	2.0	75.2	片状砂岩	
	17113	打斧 1a 類		表土	9.4	4.6	1.3	69.4	片状砂岩	
	17255	打斧 1a 類		表土	12.5	5.2	1.9	159.0	片状砂岩	
	17914	打斧 1a 類		III	6.5	4.8	1.9	93.6	砂岩	
	17927	打斧 1a 類		III	11.0	4.5	1.7	86.4	片状砂岩	
	17930	打斧 1a 類		III	9.9	4.3	2.4	117.8	片状砂岩	
	17963	打斧 1a 類		III a	7.7	4.7	1.9	109.9	片状砂岩	
	18124	打斧 1a 類		III a	4.7	2.5	0.9	8.3	片状砂岩	
	12689	打斧 1b 類		III	14.3	6.3	2.2	216.3		
	14832	打斧 1b 類	耕作坑	覆土	11.7	5.7	1.7	124.4	砂岩	
	18460	打斧 1b 類		III a	12.2	5.1	2.2	144.3		
	18333	打斧 1b 類		II	12.1	6.4	2.7	205.0	砂岩	
	S03	打斧 2a 類		E トレ中 央	11.4	5.8	1.9	141.9	片状砂岩	
	9897	打斧 2a 類		II 層	9.2	6.7	1.7	107.6	砂岩	
11	10211	打斧 2a 類		II 層	9.6	7.6	1.5	127.3	泥質ホルンフェルス	
12	11541	打斧 2a 類	SI14	覆土	8.7	7.3	1.6	105.5	片状砂岩	
	12568	打斧 2a 類		III	10.3	6.0	1.6	113.2	泥質ホルンフェルス	
	17207	打斧 2a 類		I	8.3	7.6	1.8	102.8	堇青石ホルンフェル ス	
	17869	打斧 2b 類		III	7.1	6.4	1.5	105.7	泥質ホルンフェルス	
	12466	打斧 3a 類		III	11.3	10.8	2.4	227.2	堇青石ホルンフェル ス	
	15870	打斧 3a 類	SK04	覆土	10.7	8.2	3.3	288.1		
	17895	打斧 3a 類		III	12.5	6.3	2.7	240.7	泥質ホルンフェルス	
	S04	打斧 3c 類		I 層	11.9	7.2	1.3	123.7	片状砂岩	
13	12233	打斧 4 類		III	8.5	5.3	2.0	112.4		
	12903	打斧 4 類	SI14	覆土	8.3	7.8	2.8	215.7		
	18513	打斧 4 類		III a	9.1	8.5	2.7	244.9		
	19442	打斧 4 類		III a	9.4	6.9	2.0	170.1	砂岩	
	11581	打斧未製品	SK08	覆土	10.8	9.1	3.5	390.0		
	11814	打斧未製品		III	12.6	7.2	3.9	490.0		
	S01	打斧		廃土	9.5	5.4	2.9	154.3	片状砂岩	
	S02	打斧		廃土	10.2	4.5	2.6	133.1	片状砂岩	
	9649	打斧不明		II 層	11.0	5.4	2.4	137.9	砂岩	
	10090	打斧不明		II 層	5.8	3.7	1.6	36.1	砂岩	
	11710	打斧不明			5.6	4.9	1.4	51.1		
	12519	打斧不明		III	5.7	6.6	2.0	84.6		
	12641	打斧不明		III	5.9	8.2	2.9	195.4		
	14881	打斧不明		III	5.6	3.7	1.9	47.3	砂岩	
	16001	打斧不明			6.7	4.3	1.6	48.2		
	19930	打斧不明		III a	7.4	5.0	2.1	69.3	砂岩	
	20289	打斧不明		III a	3.8	3.5	1.3	22.1	砂岩	
14	17348	磨製石斧		2 層	9.2	5.4	2.7	195.5	凝灰岩 (中粒)	
15	S05	磨製石斧			12.1	4.6	3.1	254.8	緑色岩	
16	17503	磨斧再加工品		III a	13.8	3.9	2.0	177.8	緑色岩	
17	9887	打欠石錘		III	4.8	2.8	0.7	11.5	結晶片岩	
18	12017	打欠石錘		III	5.8	4.3	1.5	55.5	凝灰岩	
19	12443	打欠石錘		III	7.4	4.3	1.6	69.3	結晶片岩	
	14314	打欠石錘		I	5.6	2.4	0.6	11.4	頁岩	
	14457	打欠石錘	SI14	上層	6.2	3.3	6.7	20.5	頁岩	
20	S06	打欠石錘			6.2	3.8	0.7	16.2	頁岩	
	9274	切込石錘		II	6.4	2.0	1.0	19.0	結晶片岩	
	14004	切込石錘			5.3	3.6	1.0	28.2	千枚岩	
21	S07	切込石錘			3.0	2.7	1.7	14.1	砂岩	



図 29 出土石器 3

図 No.	注記	分類	遺構	層位	器長 (cm)	器幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	残留デンブンプン分 析
22	15281	切込石錘	SI14	床面	5.0	1.9	0.7	8.1	黒色片岩	
23	10705	磨石・凹石			8.7	7.9	1.4	101.2	結晶片岩	
24	12805	磨石・凹石	SI14	Ⅲ	7.5	5.7	2.8	179.9		OHH-SRP15-4
25	15544	磨石・凹石		Ⅱ b	11.0	9.5	4.7	640.0		OHH-SRP15-3
	14221	石皿	SI14	上層	13.4	9.8	7.2	820.0	多孔質安山岩	OHH-SRP15- 5
26	15978	石皿	SU01	覆土	21.0	13.0	9.5	2330.0	多孔質玄武岩	OHH-SRP15-1 デ ンブンプン粒検出
	16020	石皿	SU01	覆土	20.1	13.0	6.5	1850.0	結晶片岩	OHH-SRP15-7
	12054	打撃痕		Ⅲ	10.7	5.4	1.8	127.8		
27	19657	打撃痕		Ⅲ a	15.8	9.8	4.6	1000.0		
28	20105	打撃痕			9.7	6.7	3.5	310.0	砂岩	
	13125	磨耗痕		Ⅲ	8.9	5.4	3.6	237.9	緑色凝灰岩 (粗粒)	
	15482	磨耗痕		Ⅲ	6.6	3.9	3.8	87.3	緑色凝灰岩	
	20000	磨耗痕		Ⅲ a	8.7	4.6	2.3	133.8	シルト岩	
29	19872	磨石	SI14	柱穴	10.7	8.6	4.4	590.0		
30	20093	磨石	SI14	柱穴	9.0	10.0	4.8	620.0		
31	19775	敲石	SK01	覆土	17.5	7.5	5.9	100.0		
32	19773	台石	SK01	覆土	19.5	15.5	8.8	295.0		

土器個体資料 (図 30～34)

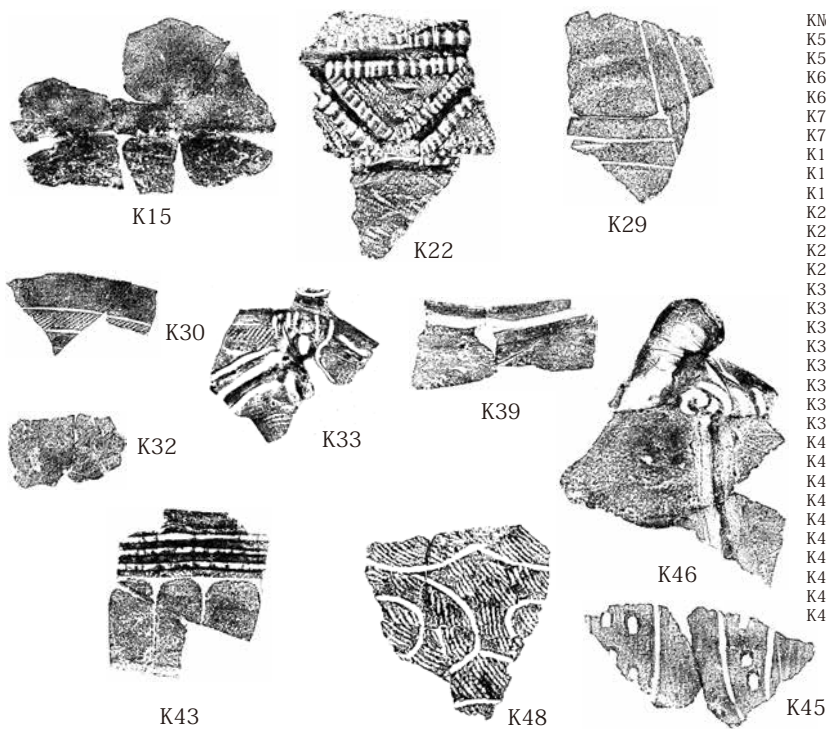
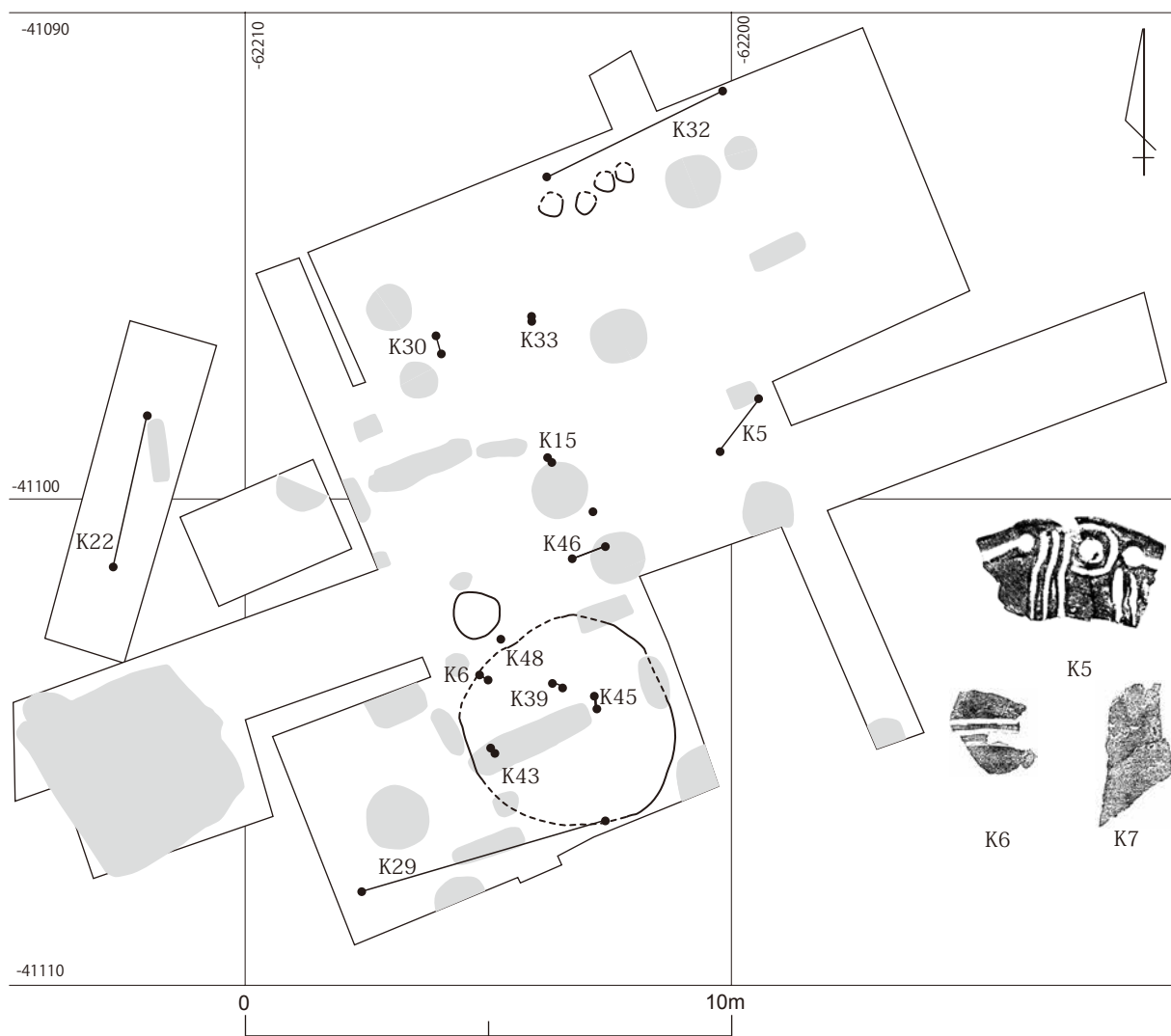
大日野原遺跡 4 次調査の整理作業では、別のナンバーで取り上げた土器片について接合関係が認められた場合に個体資料として個体 No. (K No.) を 1 から付した。ただし、K100 とした個体資料については、異なった扱いとした。この K100 とした SI14 住居跡より一括出土の後期土器 (図 13-26・図 34) については、ほぼ同一地点にまとまって同個体破片が細かく割れていたため、同一の No. 13258 で取り上げた。結果的にそれらはそのままでは接合していないが、周辺や下部から同一個体の破片 (12887、12950、12952、14430、14431、15057、15072) が検出され、接合することにより半完形土器に復元できた。

その他の K No. を付した接合例にも、SI14 覆土上層の遺物集中面での接合例が多く、少数の破片が近い位置で出土している例が多い。なお、K45 (図 14-40・図 31) は、直接接合した破片以外に同一個体と思われる破片 (12952 など) が検出されたので、それらの同一個体と思われる破片は K No. には含めなかったが、図には拓本を併せて示し、取り上げ No. を付してある。

(小林謙一)

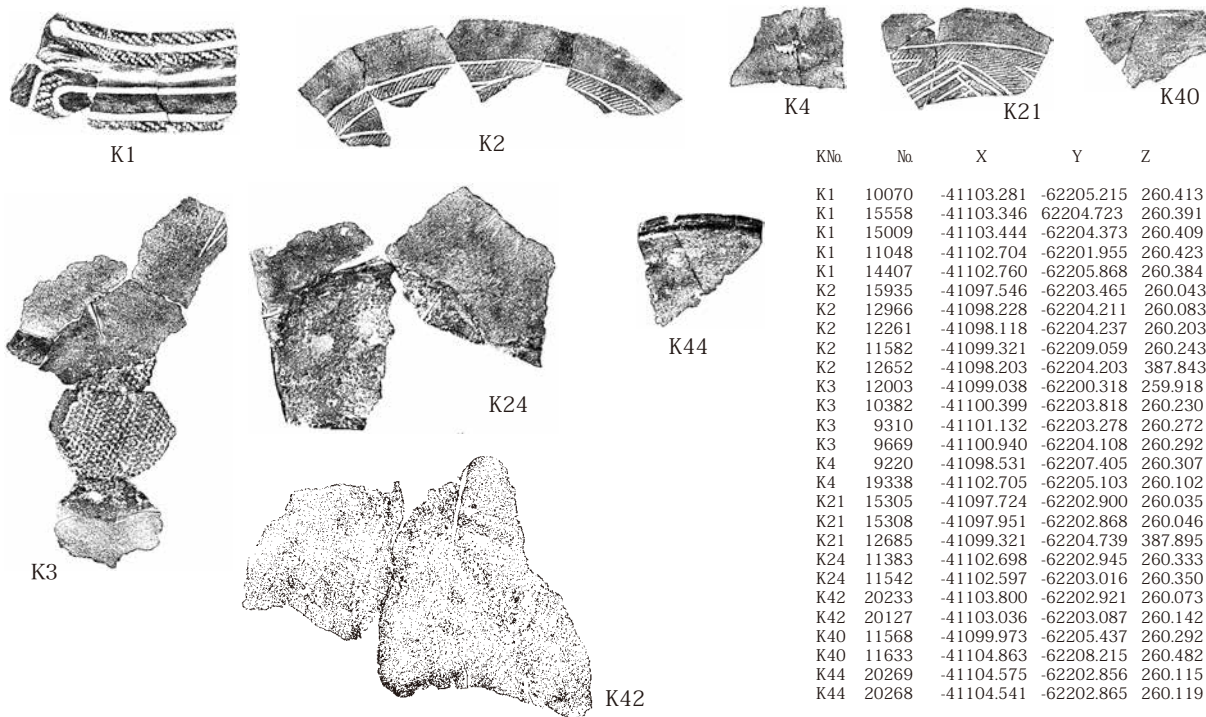
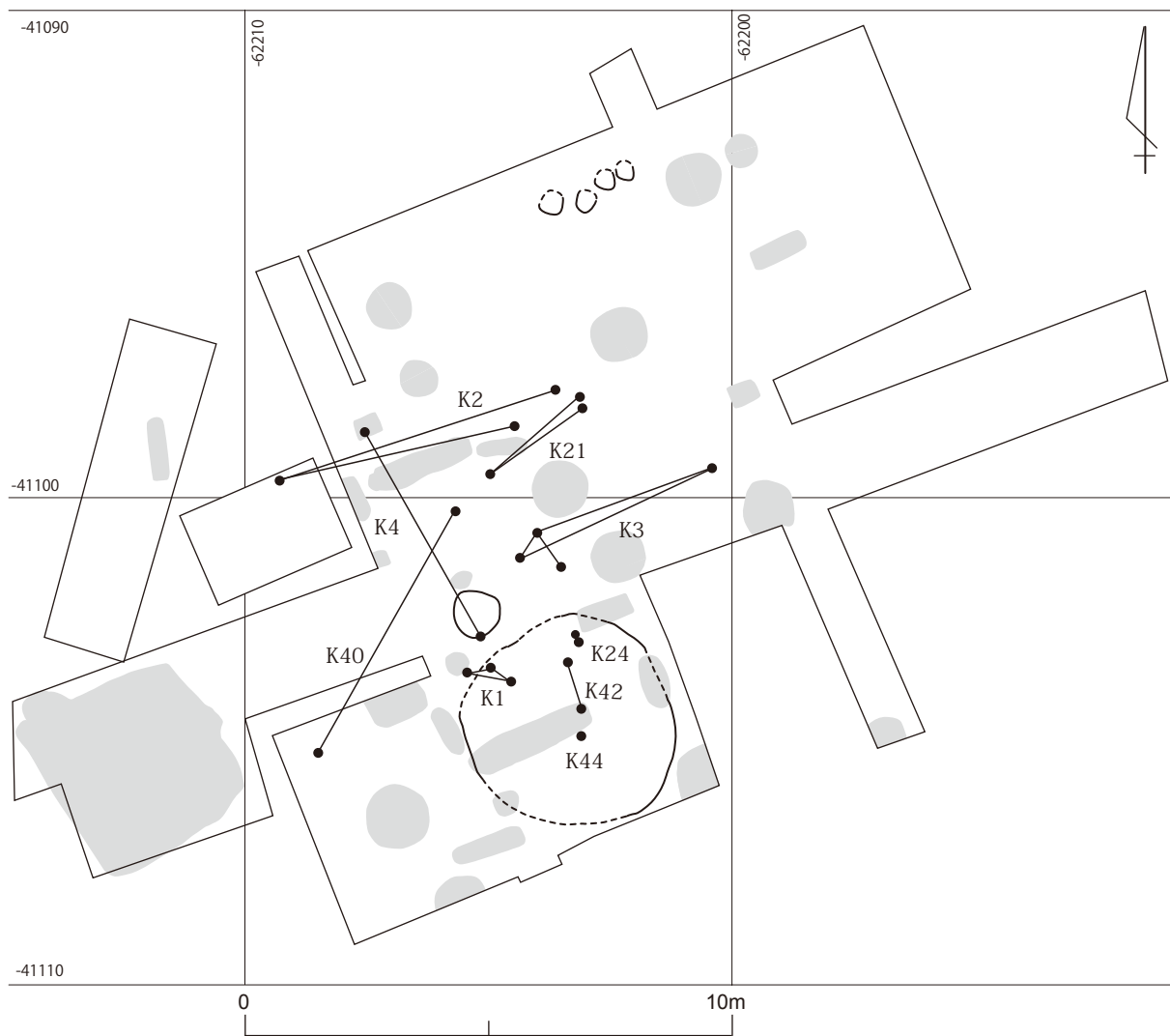
個体資料の接合図をみると、近距離での 2～3 片の接合例が多いが、中期資料 (K20、K27、K23) などは、比較的離れた場所での接合例が認められた。このうち K20 と K27 は SI14 住居跡覆土出土と扱ったが、当該遺構の覆土中に土器片が混在したものと捉えることができよう。一方で後期の資料は、SI14 住居跡を中心とした範囲に近距離で接合した例のみであることから、後期における土器の廃棄行為は住居跡の跡地を中心としたものであることが指摘できよう。

(小林尚子)



KNaNa	X	Y	Z
K5 10141	-41097.798	-62199.346	259.862
K5 9788	-41098.851	-62200.119	260.018
K6 9022	-41103.476	-62205.045	260.360
K6 9007	-41103.563	-62204.895	260.472
K7 10516	-41105.650	-62204.880	260.336
K7 10744	-41105.655	-62204.841	260.338
K15 15841	-41098.943	-62203.633	260.082
K15 15842	-41099.005	-62203.632	260.084
K15 12298	-41099.047	-62203.599	260.179
K22 18519	-41098.133	-62211.864	260.194
K22 18106	-41101.255	-62212.588	260.430
K29 12134	-41106.466	-62202.468	260.317
K29 12979	-41107.908	-62207.460	260.490
K30 17957	-41096.509	-62205.943	260.186
K30 17582	-41096.821	-62205.828	260.201
K32 17366	-41091.467	-62200.063	259.831
K32 17281	-41093.228	-62203.655	260.047
K33 18004	-41096.196	-62203.900	260.078
K33 17881	-41096.151	-62203.911	260.079
K39 12926	-41103.575	-62203.527	260.272
K39 11535	-41103.644	-62203.333	260.296
K43 19849	-41105.055	-62204.742	259.931
K43 19793	-41104.976	-62204.803	260.138
K45 12184	-41104.153	-62202.640	260.312
K45 12911	-41103.924	-62202.667	387.964
K45 19992	-41104.231	-62202.073	260.028
K46 11038	-41100.836	-62202.463	259.922
K46 12406	-41101.062	-62203.129	260.198
K48 14704	-41102.776	-62204.617	260.333
K48 14703	-41102.736	-62204.617	260.351
K48 14581	-41102.727	-62204.603	260.369

図 30 接合土器 1 (1/150・1/6)



KNo.	No.	X	Y	Z
K1	10070	-41103.281	-62205.215	260.413
K1	15558	-41103.346	-62204.723	260.391
K1	15009	-41103.444	-62204.373	260.409
K1	11048	-41102.704	-62201.955	260.423
K1	14407	-41102.760	-62205.868	260.384
K2	15935	-41097.546	-62203.465	260.043
K2	12966	-41098.228	-62204.211	260.083
K2	12261	-41098.118	-62204.237	260.203
K2	11582	-41099.321	-62209.059	260.243
K2	12652	-41098.203	-62204.203	387.843
K3	12003	-41099.038	-62200.318	259.918
K3	10382	-41100.399	-62203.818	260.230
K3	9310	-41101.132	-62203.278	260.272
K3	9669	-41100.940	-62204.108	260.292
K4	9220	-41098.531	-62207.405	260.307
K4	19338	-41102.705	-62205.103	260.102
K21	15305	-41097.724	-62202.900	260.035
K21	15308	-41097.951	-62202.868	260.046
K21	12685	-41099.321	-62204.739	387.895
K24	11383	-41102.698	-62202.945	260.333
K24	11542	-41102.597	-62203.016	260.350
K42	20233	-41103.800	-62202.921	260.073
K42	20127	-41103.036	-62203.087	260.142
K40	11568	-41099.973	-62205.437	260.292
K40	11633	-41104.863	-62208.215	260.482
K44	20269	-41104.575	-62202.856	260.115
K44	20268	-41104.541	-62202.865	260.119

图 31 接合土器 2 (1/150 · 1/6)

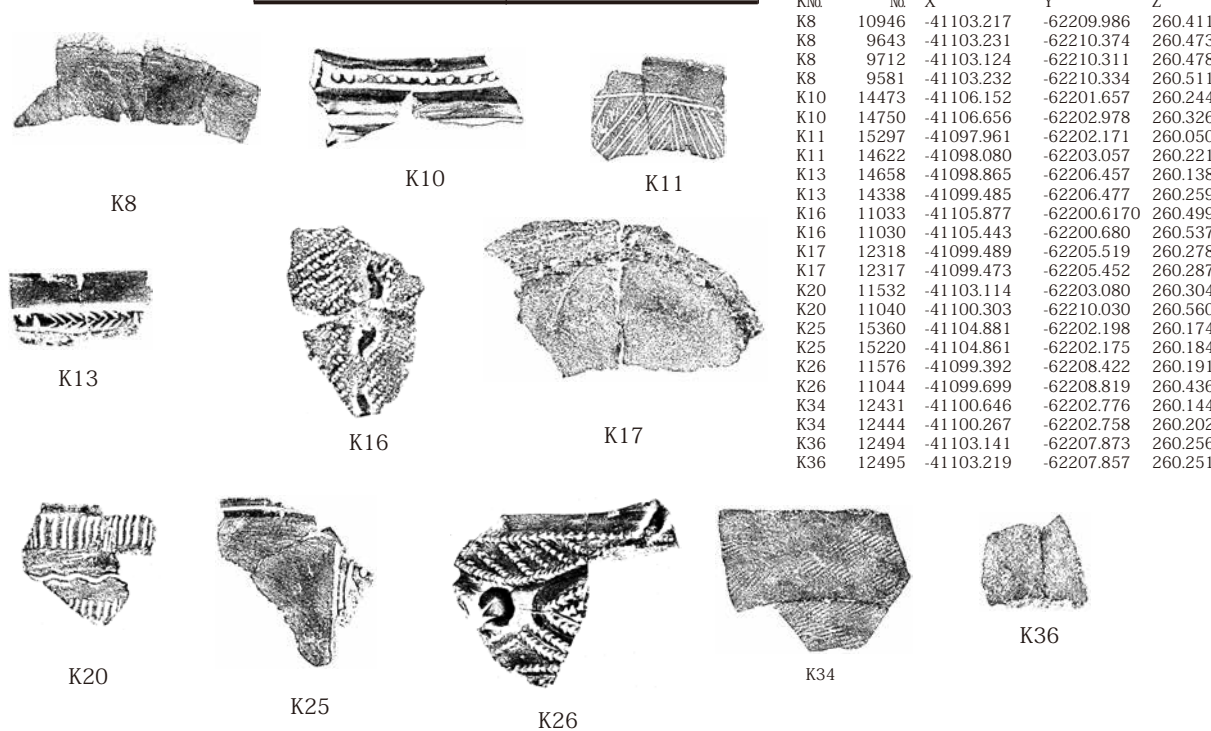
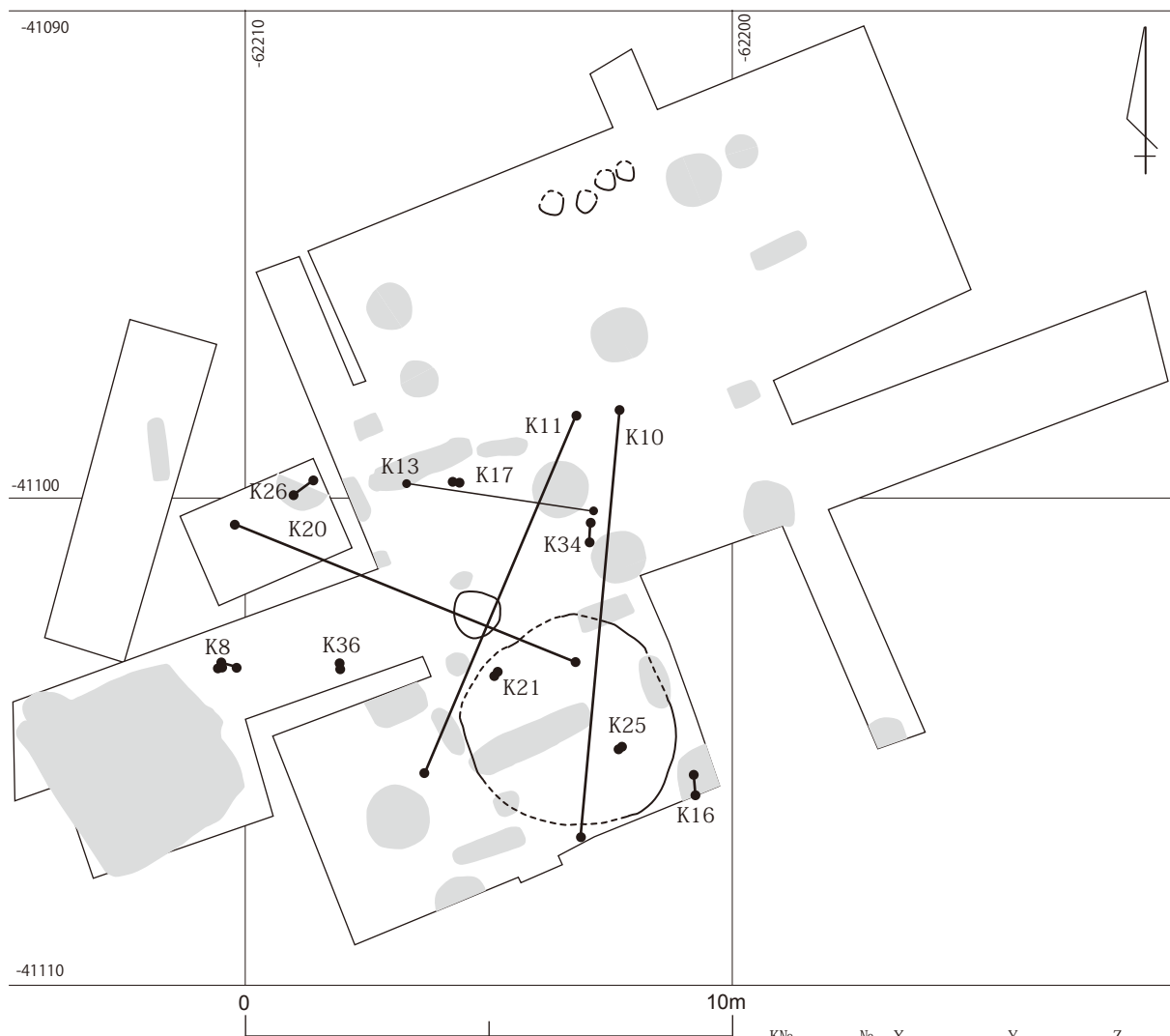
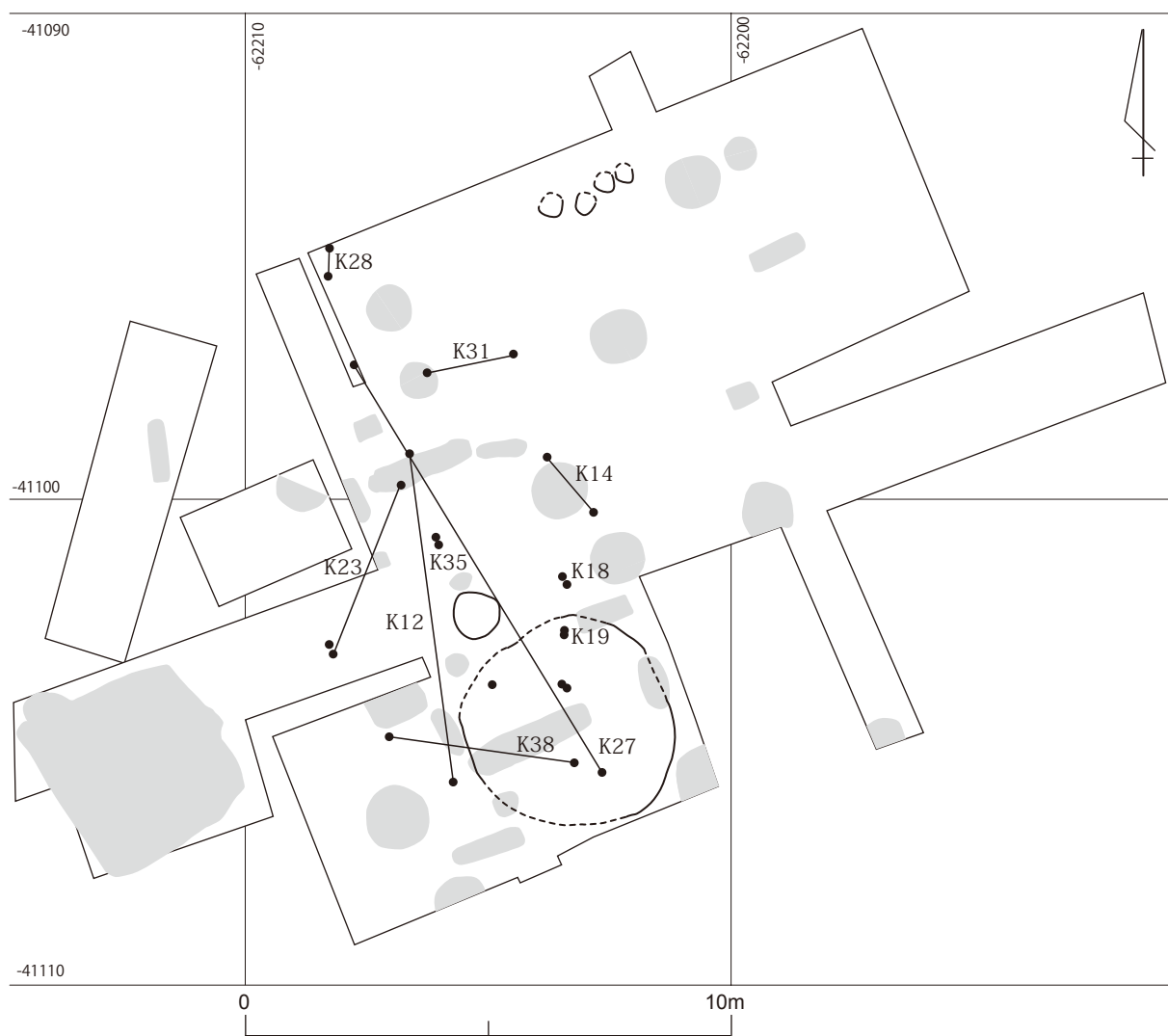
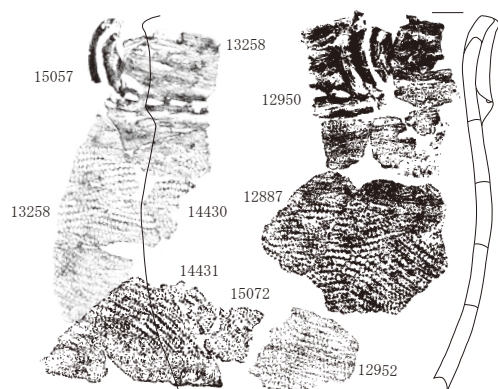
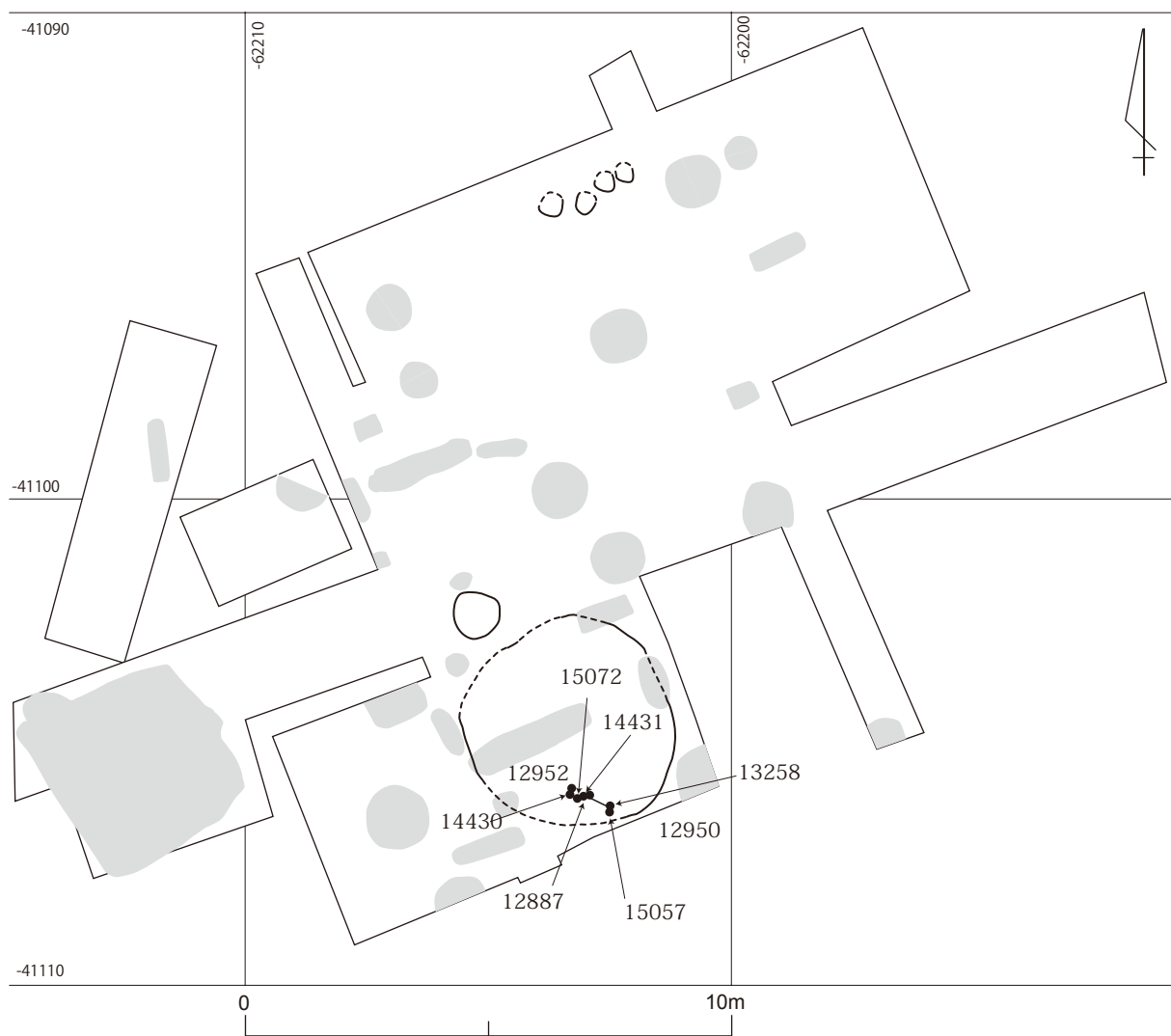


图 32 接合土器 3 (1/150 · 1/6)



KNo.	No.	X	Y	Z
K12	14962	-41105.396	-62206.166	260.246
K12	14967	-41105.574	-62205.556	260.294
K14	12440	-41100.063	-62202.632	260.111
K14	12442	-41100.053	-62202.676	260.119
K18	13166	-41101.402	-62203.323	259.907
K18	13168	-41101.509	-62203.257	259.966
K19	14169	-41102.558	-62203.308	260.310
K19	14168	-41102.515	-62203.296	260.315
K23	11854	-41099.496	-62206.648	260.061
K23	12487	-41102.775	-62208.101	260.292
K23	12490	-41102.959	-62208.013	260.322
K27	12575	-41097.03	-62207.534	260.239
K27	11365	-41105.405	-62202.441	260.392
K28	18343	-41094.654	-62208.079	259.895
K28	18321	-41095.177	-62208.125	259.924
K31	18289	-41097.206	-62206.105	259.998
K31	17195	-41096.818	-62204.346	260.135
K35	14278	-41100.717	-62205.876	260.308
K35	14133	-41100.565	-62205.923	260.381
K38	14561	-41104.673	-62206.860	260.280
K38	12875	-41105.194	-62203.117	388.003
K41	15509	-41103.314	-62204.671	260.395
K41	15508	-41103.372	-62204.714	260.433
K47	19034	-41103.405	-62204.119	260.131
K47	15603	-41103.587	-62204.650	260.266

图 33 接合土器 4 (1/150 · 1/6)



No.	X	Y	Z
12887	-41105.937	-62202.86	388.086
12950	-41106.193	-62202.349	260.283
12952	-41105.846	-62203.159	260.349
13258	-41105.937	-62202.800	260.387
14430	-41105.925	-62203.141	260.286
14431	-41105.954	-62202.957	260.270
15057	-41106.246	-62202.357	260.237
15072	-41105.961	-62202.986	260.243

图 34 接合土器 5 (1/150 · 1/6)

表9 出土縄紋土器数量表

時期	型式	新地平		口縁部		底部		胴部		不明		計	
				数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)
早期	鶴ヶ島台							1	8.8			1	8.8
	入海 2							1	5.6			1	5.6
前期	諸磯 a							1	5.3			1	5.3
	諸磯 b2			1	20.3			1	33.0			2	53.3
	諸磯 b3							1	19.9			1	19.9
	諸磯 b			1	4.7			3	27.1			4	31.8
	諸磯 c							1	16.8			1	16.8
	諸磯	不明		1	7.1							1	7.1
	桜沢							2	19.4			2	19.4
中期	五領ヶ台 2	4	b	1	31.2			1	12.1			2	43.3
		4	不明	1				1	7.6			2	7.6
	阿玉台 I a	5	a	1	55.8			2	328.3			3	384.1
	阿玉台 I b	5	b					2	152.8			2	152.8
		5	c	4	169.1			10	155.3			14	324.4
		6	a	1	18.2			1	33.3			2	51.5
			不明	2	57.5			22	420.4			24	477.9
	阿玉台 II	6	b	1	61.8			4	79.6			5	141.4
		7	a	5	89.1	1	21.0	19	244.9			25	355.0
			不明	2	49.7			9	102.0			11	151.7
	阿玉台 III	8	a	1	35.8							1	35.8
	勝坂 1	5	a	5	250.8			2	48.4			7	299.2
		5	b	8	341.4			1	27.8			9	369.2
		5	不明	9	156.9			30	387.5			39	544.4
		5	c	14	448.4			32	628.2			46	1076.6
		6	a	17	462.6			39	852.4			56	1315.0
		6	b	2	58.9			10	336.7			12	395.6
		6	不明	4	168.5			21	491.8			25	660.3
				13	284.5	1	13.1	84	902.1			98	1199.7
	勝坂 2	7	a					12	230.8			12	230.8
		7	b	7	162.0			58	1247.6			65	1409.6
		7						2	21.5			2	21.5
		8	a	12	308.8			42	640.4			54	949.2
		8	b	4	108.4			55	1051.9			59	1160.3
		8						4	73.5			4	73.5
			不明	5	91.7			57	652.7			62	744.4
	勝坂 3	9	a	57	1356.0			82	1623.2			139	2979.2
		9	b	15	383.3	1	41.7	45	996.7			61	1421.7
		9	c	18	447.2			38	865.3			56	1312.5
		9	不明	7	170.9			27	504.9			34	675.8
	勝坂		不明	5	88.5			121	1342.4			126	1430.9
	曾利 I	10	a					1	15.3			1	15.3
		10	b					12	266.0			12	266.0
	曾利 II	11	a					4	51.5			4	51.5
		11	b	2	95.8			7	267.8			9	363.6
		11						2	61.7			2	61.7
			不明	2	58.9			4	36.0			6	94.9
	曾利 III	11	c					7	246.0			7	246.0
			不明					17	186.0			17	186.0
	曾利 IV	12	a	1	45.4			3	57.0			4	102.4
		12	b	1	44.3							1	44.3
		12						1	5.4			1	5.4
	曾利	不明						26	226.3			26	226.3
	加曾利 E1	10						4	46.4			4	46.4
	加曾利 E2	11	b					2	51.0			2	51.0
		11		1	15.2							1	15.2
	加曾利 E3	12	a					1	25.3			1	25.3
		12	b	1	40.2			8	224.4			9	264.6
		12	c					1	40.9			1	40.9
		12						1	15.1			1	15.1
	加曾利 E4	13	a	1	7.4			4	111.7			5	119.1
		13	b					4	98.6			4	98.6
		13						3	67.4			3	67.4
	加曾利 E		不明	1	17.4			5	82.7			6	100.1
後期	称名寺 I	14	b	1	24.0			3	27.1			4	51.1
		14	c					1	98.0			1	98.0
		15	a	1	64.5			1	34.3			2	98.8
		15	b	1	14.0			1	14.4			2	28.4
				1	19.9							1	19.9
			不明	1	27.8			3	37.7	1	20.4	5	85.9
	称名寺 II	16		1	23.6			3	67.5			4	91.1
	称名寺	不明		1	42.5			2	28.8			3	71.3
	三十稲場							1	23.8			1	23.8
	堀之内 1			311	9848.7	29	1063.1	2585	39650.7	11	284.3	2936	50846.8
	堀之内 2			33	528.3			76	961.5			109	1489.8
	堀之内			6	222.4	4	366.6	56	1152.9			66	1741.9
縄紋	加曾利 B1			1	11.0			2	19.2			3	30.2
	加曾利 B2							1	1.8			1	1.8
総計				639	17488.7	185	5580.9	4526	66678.3	68	1172.2	5418	90920.1

表 10 遺構別出土縄紋土器数量表

型式	SI14		SU01		SK 01		ビット・古代土坑	
	数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)
鵜ヶ島台								
入海 2								
諸磯	2	21.5						
桜沢								
五領ヶ台	2	43.3						
阿玉台	13	247.0			1	20.7	3	79.4
勝坂	186	3118.3	7	136.4	31	471.6	25	378.2
曾利	22	424.7	2	67.9	5	110	4	40.3
加曾利 E	13	317.6					2	145.5
称名寺	7	115.7			2	16.0	1	34.3
三十稲場								
堀之内	731	14021.26	36	4008.7	161	1732.4	108	1353.4
加曾利 B	1	1.8						
不明	276	2782.3	7	49.0	35	358.7	33	434.1
総計	1253	21093.4	52	4262.0	235	2709.4	176	2465.2

表 11 遺構別出土礫数量表

	SI14		SU01		SK01		ビット・古代土坑	
	数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)	数	重量 (g)
礫	793	44057.45	28	4905.5	82	8564.9	93	1117.5

表 12 出土礫遺構別石材別数量表

遺構 石材	SI14		SU01		SK01		ビット・古代土坑		遺構外		合計	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
砂岩	249	16852.3	6	363.3	28	5472.0	11	469.5	432	38267.9	726	61425.0
泥岩	171	6057.6	8	208.4	16	404.5	11	554.8	310	11984.4	516	19209.7
千枚岩	51	10003.2	7	1927.9	2	69.7	2	28.1	132	7929.6	194	19958.5
凝灰岩	54	6541.0	2	75.9	9	298.5	1	65.1	59	3384.4	125	10364.9
頁岩	36	1204.7			8	81.9			37	1569.9	81	2856.5
玄武岩	1	470.0	1	2330.0					3	2286.0	5	5086.0
石英	2	23.1							2	250.8	4	273.9
閃緑岩					2	2061.9			2	1294.7	4	3356.6
粘板岩									4	291.3	4	291.3
花崗岩									3	74.1	3	74.1
安山岩									2	152.6	2	152.6
片岩	1	58.4							1	67.6	2	126.0
礫岩	1	16.4							1	12.2	2	28.6
チャート	8	132.1			1	68.3			2	48.0	11	248.4
ホルンフェルス	1	19.9							2	68.5	3	88.4
不明	29	2678.8			6	108.1			29	1188.2	64	3975.1
総計	604	44057.5	24	4905.5	72	8564.9	25	1117.5	1021	68870.2	1746	127515.5

データベースに重量が入っているもののみ集計

(2) 古代

本調査区では、古代に帰属する住居跡が1軒、円形土坑が12基検出された。古代の遺構覆土は黒褐色のⅡ層土を主体とする。遺構どうしの重複関係はなく、遺物も調査区全体に分布するが散漫である。

以下に遺構ごとに記載する。

住居跡

SI10 住居跡 (図36～37・表13)

本住居跡は、2012年度調査に「キ」の字に設定された東西トレンチ調査区のトレンチ西端で検出された古代の竪穴住居跡である。2016年度調査では、既調査区を拡張して住居跡の広がりを確認するとともに、一部サブトレンチによる住居跡内の掘削調査を実施し、本住居跡の帰属時期を確認することを目的に調査を実施している。

表土層直下のⅢ層上面で住居跡の平面プランを確認した。住居跡は、調査区外の西側に一部広がるものの、概ね全体の広がりを確認することができた。住居跡は北東と南東のコーナーを含む北壁から東壁と南壁の半分のほか、調査区際で西壁の一部が検出された。大きさは南北3.6m、東西3.5mを測り、東壁中央と北西コーナー付近にカマドを検出した。北西コーナーの北カマドは耕作坑によって攪乱を受けていた。住居跡の平面プランは方形を基調とするが、南東側に角をもつ不正五角形状を呈することから、住居跡の重複か建替え、もしくは東カマドに柵状施設を伴うことによるものとも考えられる。

竪穴住居の北壁と南壁の平面プランが確認されたことから、南北方向にサブトレンチを設定し、住居址内床面までの掘削調査を

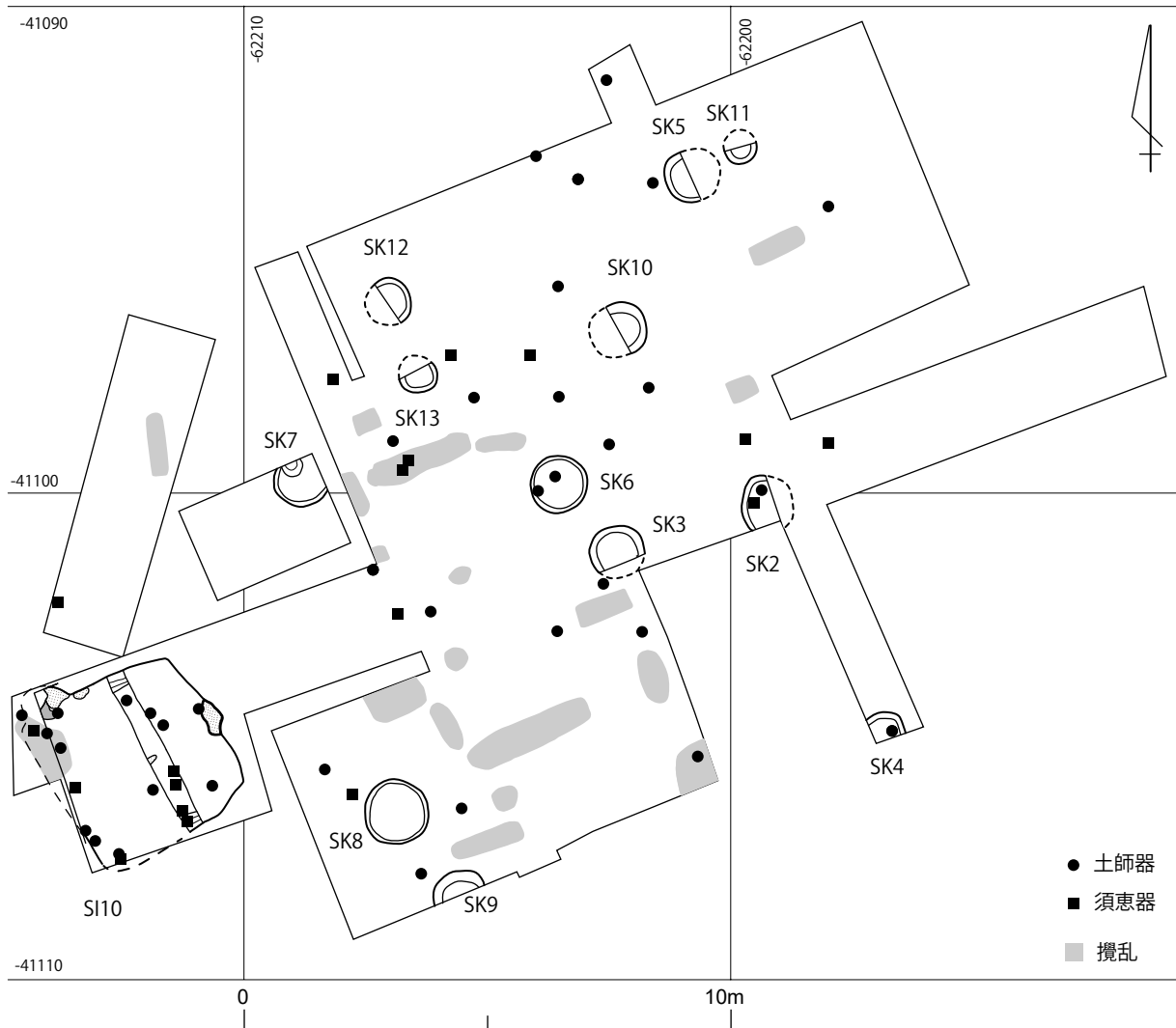


図35 古代遺構・出土土器分布 (1/150)

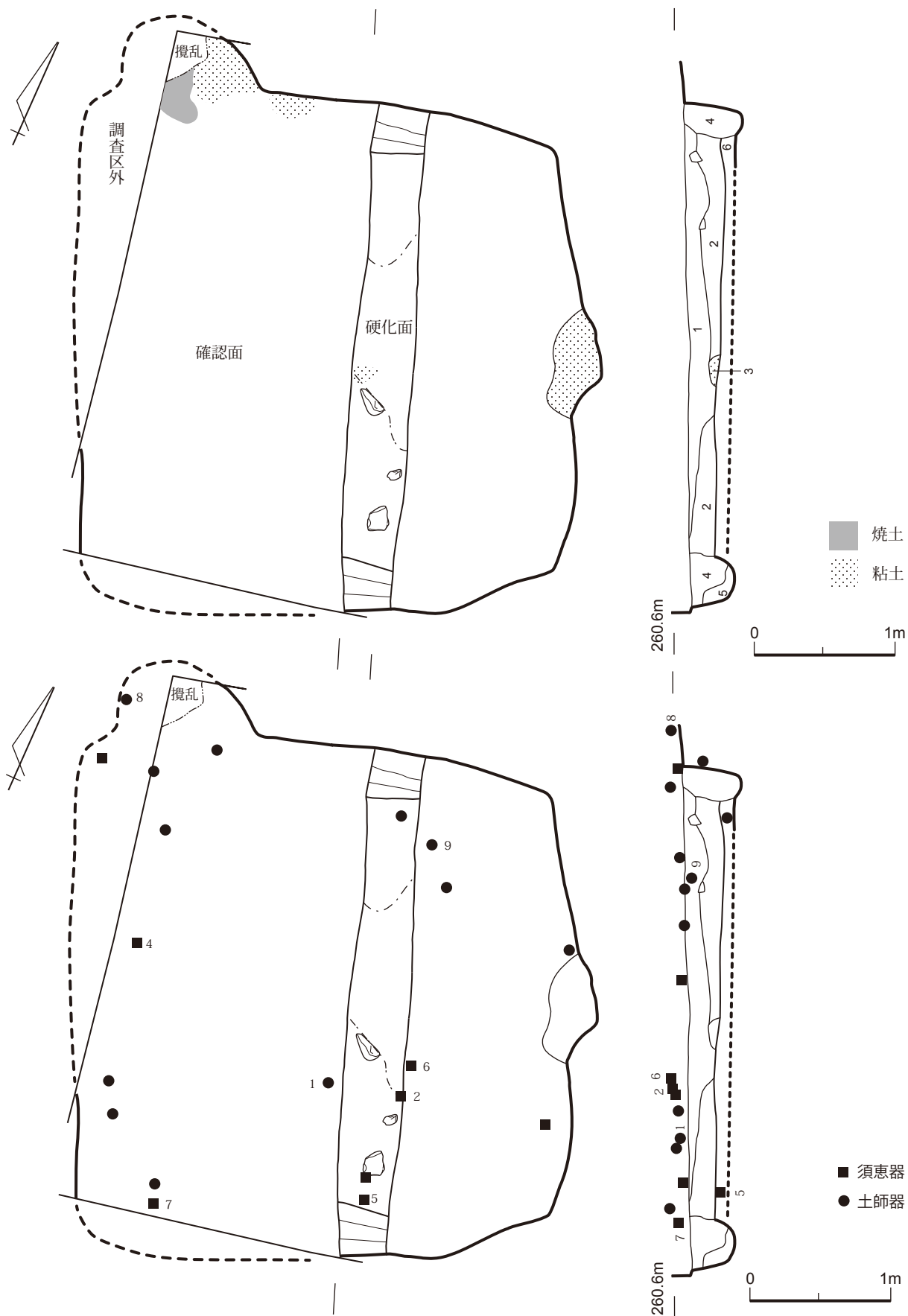


図 36 SI10 竪穴住居跡 (1/40)

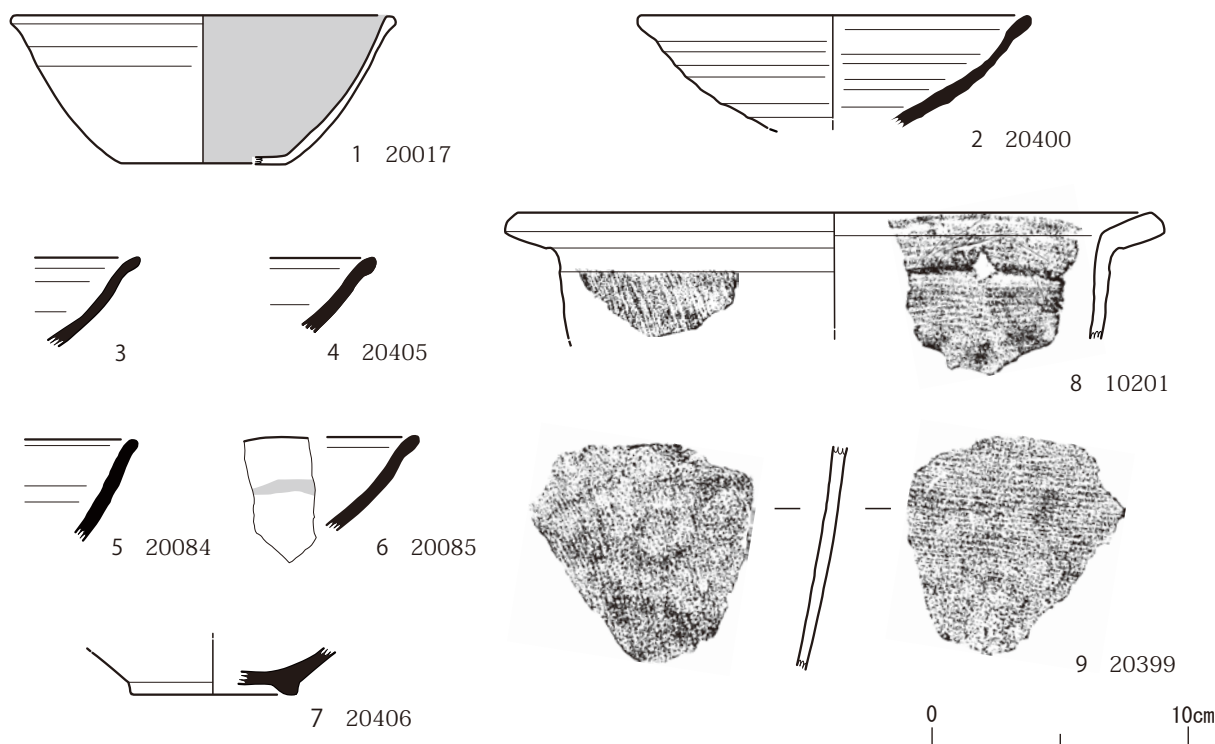


図 37 SI10 竪穴住居跡出土土器 (1/3)

表 13 SI10 竪穴住居跡出土土器観察表

図	器種	法量	法量 比	径高 指数	残存率	接 合	成形・調整	胎土	色調	焼成	注記	備考
1	内黒土器 埴	口径 (14.2) 底径 (6.4) 器高 5.8	0.45	40.8	口縁部～ 底部 1/6	2	底部 - ヘラ削り 内外面 - 回転ナデ 外面胴部～底 部 - 下から左斜め上方に ナデ	密 黒色粒 子微量	外面 - 橙色 5YR6/6 内面 - 黒色 5YR1.7/	良好	20017+ 一括	内面煤吸 着
2	須恵器 坏	口径 (15.2) 現存高 (4.4)			口縁部～ 胴部 1/6		内外面 - 回転ナデ	密 砂粒微 量	灰白色 7.5Y8/1	良好	20400	ロクロ目 顕著
3	須恵器 坏				口縁部～ 胴部 1/8	2	内外面 - 回転ナデ	密 白色粒 子少量	青灰色 5BG5/1	良好	一括	
4	須恵器 坏				口縁部 1/8		内外面 - 回転ナデ	密 白色粒 子少量	灰色 7.5Y6/1	良好	20405	
5	須恵器 坏				口縁部 1/8		内外面 - 回転ナデ	密 白色粒 子少量 礫 微量	灰白色 7.5Y7/1	良好	20084	
6	須恵器 坏				口縁部 1/10		内外面 - 回転ナデ	密 海綿状 骨針少量 白色粒子少 量 礫微量	灰色 7.5Y5/1	良好	20084	内面「一」 墨書
7	須恵器 埴	底径 (6.4)			底部 1/4		底部 - 高台貼付→高台内 ナデ 内外面 - 回転ナデ	密 白色粒 子微量	にぶい 黄褐色 10YR7/3	良好	20406	半酸化焰 焼成
8	土師器 甕	口径 (24.6)			口縁部 1/8		口縁部 - ナデ 内面 - 横 ハケ目 外面 - 縦ハケ目	やや粗 金 雲母多量	赤褐色 10R4/4	良好	10201	甲斐型
9	土師器 甕				胴部小片		内面 - 横ハケ目 外面 - 縦ハケ目	密 金雲母 多量	にぶい 赤褐色 5YR4/3	良好	20399	甲斐型

() = 推定値・単位 cm

実施した。確認面から床面までの高さは最大で約 40cmを測り、覆土は上下 2 層に分けられる。サブトレンチ内では、本住居跡の重複関係や建替えなどは確認されなかった。北壁・南壁ともに周溝が巡っており、周溝は幅 20 ～ 30cm、深さ 15cmを測る。床面中央寄りには貼床による硬化面が広がる。床面中央にはカマド構築材と同じ粘土が堆積し、隣接して長軸 20cm程の焼礫が床面上で検出された。炉の可能性も考慮しておく必要があるが、判然としない。

北カマドと東カマドの新旧関係も、住居内の調査をしていないため不明である。ただし、北カマドについては 2 基の耕作坑による攪乱と重複していたため、攪乱覆土のみを除去してカマドの確認を行った。調査区北西角はカマド底面よりも下に攪乱が及んでいたが、南側については燃焼部が検出された。燃焼部には焼土が堆積し、硬化している。検出面は床面近くにまで達していることから、本住居址が廃絶されるまで機能していたとみられる。従って、北カマドの検出状況からみて、カマド 2 基の新旧関係は東カマドから北カマドへの造り替えの可能性が考えられる。

土層説明

- 1 層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。しまり弱。粘性弱。黒色スコリア ϕ 2 ～ 3mm 多量、 ϕ 3 ～ 4mm 少量、橙色スコリア ϕ 1 ～ 2mm 稍多量。
- 2 層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。しまり稍強。粘性稍弱。黒色スコリア ϕ 1 ～ 2mm 少量、橙色スコリア ϕ 1 ～ 2mm 多量。部分的にカマド構築材の粘土や焼土を含む。
- 3 層 明黄褐色土 (10YR6/6)。しまり稍弱。粘性強。粘土塊。
- 4 層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。しまり極弱。粘性極弱。黒色スコリア ϕ 2 ～ 3mm 多量、橙色スコリア ϕ 2 ～ 3mm 少量。周溝覆土。
- 5 層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。しまり極弱。粘性稍強。橙色スコリア ϕ 2 ～ 3mm 少量。周溝覆土。
- 6 層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。しまり極弱。粘性稍強。橙色スコリア ϕ 2 ～ 3mm 少量、黄褐色粘土粒子少量。掘方覆土。

出土遺物

本住居跡から出土した遺物は、内黒土器 2 点 (22.7 g、7%)、須恵器 12 点 (119.8 g、40%)、土師器 16 点 (215.3 g、53%) の合計 30 点 (357.8 g) である。主に覆土中からの出土で、表土層からの出土も含まれる。須恵器は坏が 10 点、高台付碗が 1 点で、南多摩窯跡群の製品が主体とみられる。図 37-1 は内黒土器の碗である。器壁が薄くて堅緻であり、口縁部が肥厚する。G5 号窯式期に並行するとみられる。2 ～ 6 は須恵器坏である。5 を除き、口縁部が外反して肥厚しており、G5 号窯式に比定され、5 は G25 ～ 5 号窯式とみられる。なお、4 には胎土に海綿状骨針が含まれることから、南多摩窯とは別の産地と想定される。6 は墨書土器で、内面に「一」状の墨書が認められる。7 は高台付碗の底部である。半酸化焰焼成のため、G5 号窯式期とみられる。土師器は全て甕の破片で、相模型が 1 点、武蔵型の可能性があるもの 1 点の他は、甲斐型の甕である。8 は厚手の口縁部が外に屈折し、胴部は器壁が薄くなる。9 も甕の胴部片であるが、器壁が 5mm 程の薄手である。8・9 ともに外面は縦方向、内面には横方向の刷毛目調整が施され、胎土に金雲母を多量に含んだ甲斐型である。

以上より、本住居址は内黒土器を伴う G5 号窯式期古段階に位置し、南多摩窯跡群須恵器編年の年代観に照らせば、10 世紀前半に相当する。

土坑 (図 38)

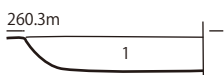
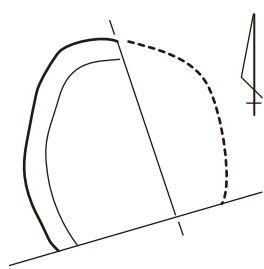
SK02 調査区外に一部広がるが、円形土坑である。南西 2 m に SK3 が分布する。大きさは長軸 108cm、短軸 102cm 以上、深さ 18cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は、灰釉陶器の瓶胴部片 1 点、土師器小片 1 点が出土している。

SK03 円形土坑である。北東 2 m に SK2 が分布する。大きさは径 104 ～ 112cm、深さ 20cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK04 調査区外に半分以上がるが、円形土坑と思われる。北西 4 m に SK2 が分布する。大きさは調査区内で径 72cm 以上、深さ 20cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は小片のため図化していないが、須恵器小片 1 点が出土している。外面に朱色の付着物が認められるが不明である。

SK05 円形土坑である。東側で SK11 と近接する。大きさは径 106 ～ 116cm、深さ 25cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

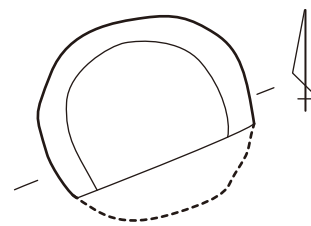
SK06 円形土坑である。南東 0.5 m に SK3 が隣接する。大きさは径 116cm、深さ 22cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は 1 層の黒褐色土を主体とし、下層に暗褐色土の 2 層が堆積する。遺物は小片のため図化していないが、ロクロ土師器の坏 1 点、甲斐型の土師器甕 1 点が出土している。



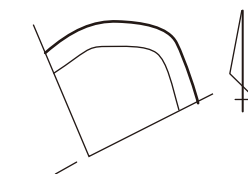
SK02



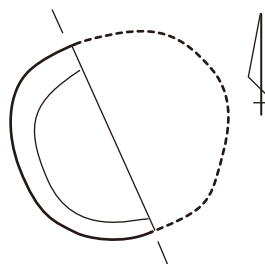
SK02 出土灰釉陶器瓶胴部
(S=約1/2)



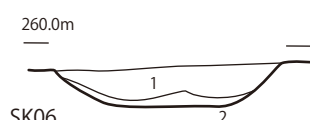
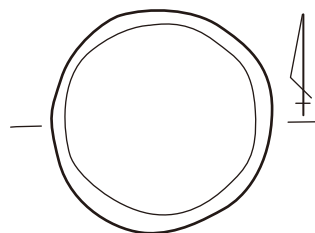
SK03



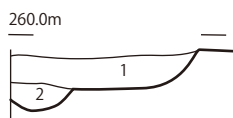
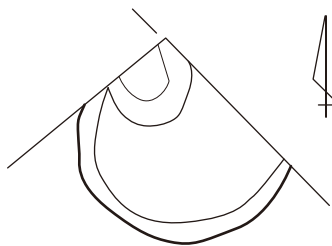
SK04



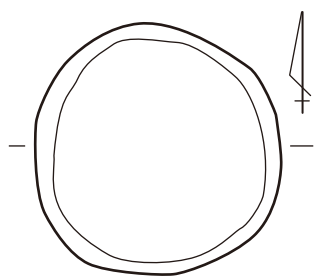
SK05



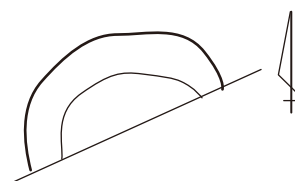
SK06



SK07

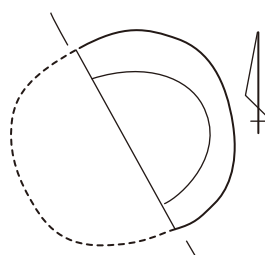


SK08

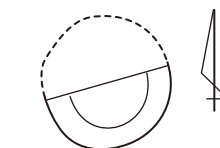


SK09

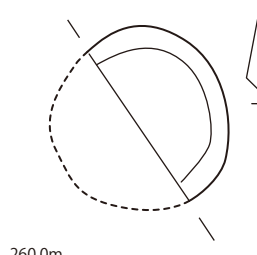
SK12



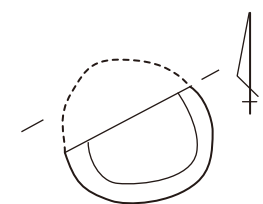
SK10



SK11



SK12



SK13



図 38 SK02 ~ SK13 土坑 (1/40)

SK07 調査区外に一部広がるが、円形土坑と思われる。北東 2 m に SK13 が分布する。大きさは径 114cm、深さ 20cm を測り、断面は皿状を呈す。底面にピット状の掘り込みが認められる。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の 1 層と、ピット状の掘り込みに暗褐色土の 2 層が堆積する。遺物は出土していない。

SK08 円形土坑である。南東 1 m に SK9、北西 2.5 m に SI10 が分布する。大きさは径 130cm、深さ 20cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK09 調査区外に一部広がるが、円形土坑と思われる。北西 1 m に SK8 が分布する。大きさは径 110cm、深さ 21cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK10 円形土坑である。南西 2.5 m に SK6、北東 2.5 m に SK5 が分布する。大きさは径 110cm、深さ 21cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK11 円形土坑である。西側で SK5 と近接する。大きさは径 70cm、深さ 20cm を測り、断面は楕円状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK12 円形土坑である。南 0.5 m に SK13 が分布する。大きさは径 95cm、深さ 20cm を測り、断面は皿状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK-13 円形土坑である。北 0.5 m に SK12 が分布する。大きさは径 78cm、深さ 17cm を測り、断面は楕円状を呈す。確認面はⅢ層上面で、覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

覆土

1 層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。粘性弱、しまり弱。黒色スコリア径 2 ～ 3mm 少量、橙色スコリア径 1 ～ 2mm 少量含む。

2 層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。粘性弱、しまり弱。1 層にローム粒子径 1 ～ 2mm 少量含む。

遺構外出土遺物

遺構外から出土した古代の遺物は 37 点であるが、いずれも小片のため図化していない。内訳はロクロ土師器 3 点 (4.5 g、8%)、須恵器 15 点 (100.7 g、41%)、土師器 19 点 (79.2 g、51%) である。須恵器は坏・蓋・甕からなり、時期比定できるものは G25 ～ G5 号窯式の範疇である。土師器は全て甕の小片であるが、甲斐型が主体的であった SI10 とは様相が異なり、相模型 11 点、武蔵型 1 点、甲斐型 4 点と相模型で占める割合が高いのが特徴的である。

まとめ

第 4 次調査の 2012・2016 年度に、平安時代の竪穴住居跡 (SI10) が新たに確認された。西方 75 m 程の第 2 次調査地点では、既に平安時代の竪穴住居址 3 軒が検出されており、今回の調査によって台地縁辺まで集落範囲が広がることが確認できた。また、SI10 は東カマドから北カマドへの造り替えが想定されたが、第 2 次調査の住居址とは竪穴住居の軸方向が同じであり、3 軒ともに東壁にカマドを造り付けている。出土遺物も G5 号窯式の須恵器坏、甲斐型の土師器甕を主体に、3 号住居址からは内黒土器も出土しており、概ね同時期に構成された住居跡と想定される。これまでのところ、平安時代の大日野原遺跡は、10 世紀前半に形成された集落であり、沢井川下流の嵯峨遺跡など藤野地域の集落動向と同調した山間部集落と位置付けられる。

(中川真人)

(3) 中近世以降

近世・近代耕作坑

20 基の土坑状の掘込みを確認し、その一部を調査した。これらの遺構は、長方形の溝状を呈するものが一定の方向に並んで検出される場合があり、耕作坑（いわゆるイモ穴）と想定される。そのほか、ピット状のものや、不定形で深い掘込みのものも認められ、その性格は明確ではないが、縄紋土器の他に中近世および近代の遺物が散見される。

中近世の遺物

4 次調査区からは、表土を中心に、小破片の陶磁器が少数ながら散在して出土している。表に一覧を示す。中世の陶器としては、東海系の山茶碗片など 8 点（別に一括出土破片が 2 点ほどあり）ほどが認められる。近世の陶磁器は、瀬戸美濃系の陶器碗、肥前系の磁器の小片が 16 点（別に一括出土破片数片があり）出土している。また、近世と思われる青銅製のキセル煙管の吸い口が 1 点、筭の破片と考えられるガラス製の棒状製品 1 点が出土している。特に近世の遺物は江戸近郊農村部の畑地などで出土する陶磁器の器種組成やちびた状態の破片のありかたが類しており、18 世紀にはこの地が畑地として利用されていたことを示唆している。

（永田悠記・小林謙一）

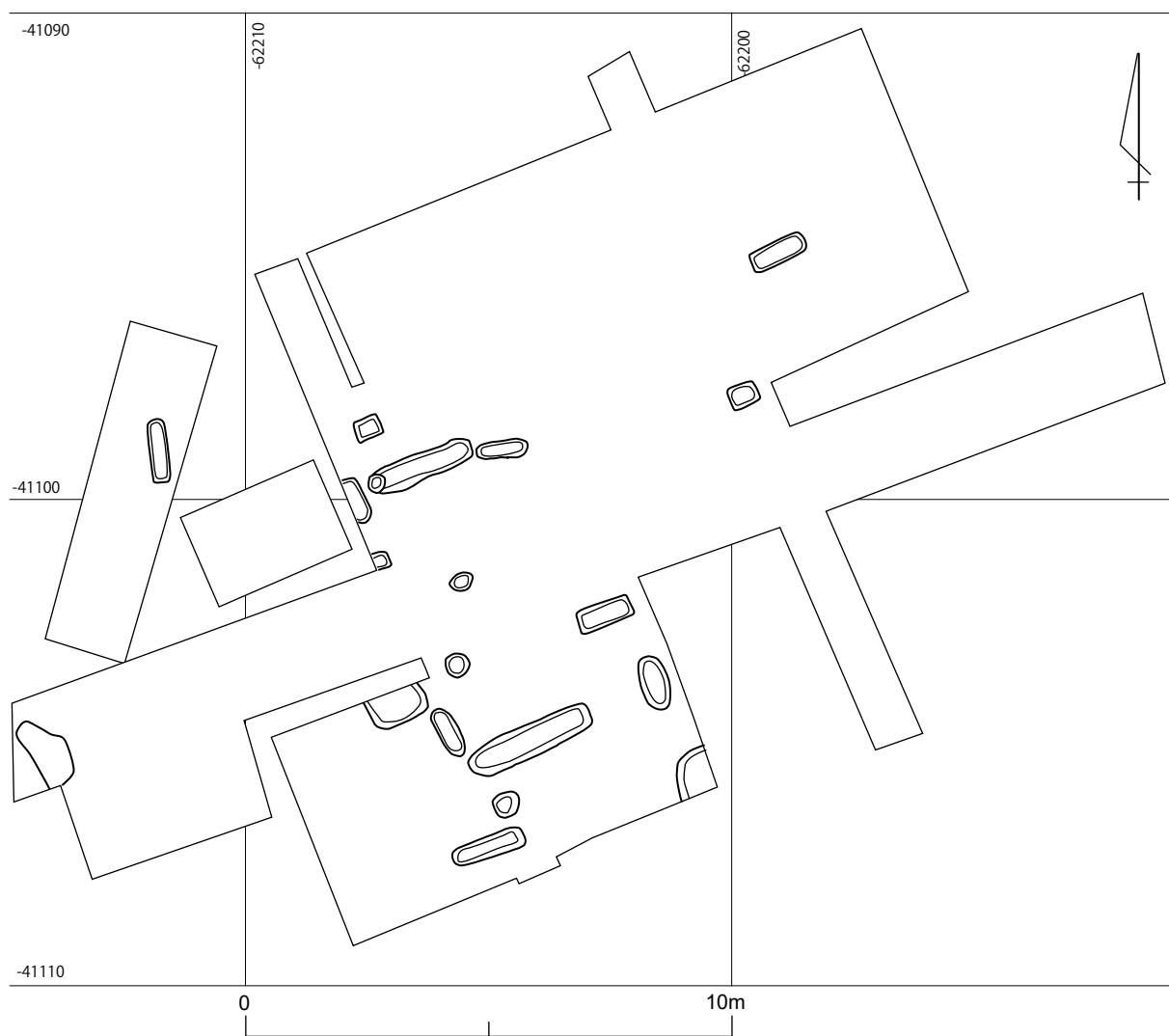
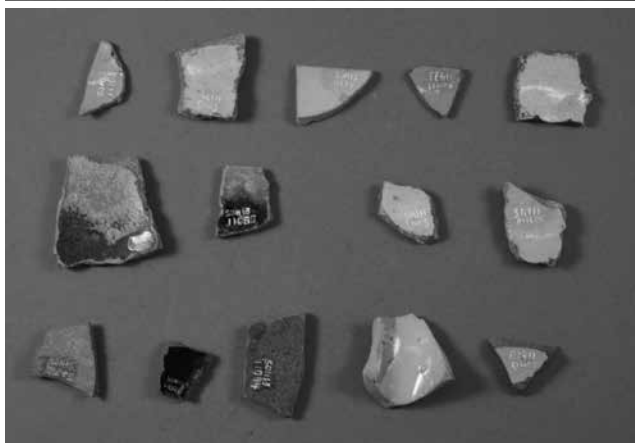


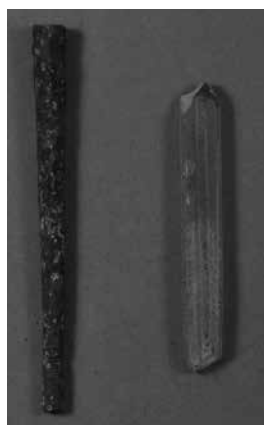
図 39 中近世～近代坑分布 (1/150)



中世陶磁器



近世陶磁器



金属・石製品

図 40 中近世～近代遺物（縮尺不同）

表 14 中近世陶磁器観察表

遺物No.	器種	窯・型式	世紀	備考
11041	山茶碗	渥美湖西系	12	
11769	壺	渥美湖西系	12	
11808	不明	東遠近江系	13	
11096	山茶碗	尾張北部系	12	
17089	山茶碗	渥美湖西系	12	
17177	山茶碗	東遠近江系	13	
11244	皿	古瀬戸中期	14	
12105	皿	古瀬戸中期	14	
11094	不明	瀬戸美濃系	18	
11175	碗	瀬戸美濃系	18	
11088	碗	瀬戸美濃系	18	
11106	碗	瀬戸美濃系	18	
11108	碗	瀬戸美濃系	18	
11608	碗	瀬戸美濃系	18	
11007	合子の蓋か	瀬戸美濃系	18	
17052	徳利	肥前	18	
17126	不明	瀬戸美濃系	17 ~ 18	底部に糸切りによる穿孔あり 17393
18305	不明	常滑か	近世か	
17141	瓶か	瀬戸美濃系か	18 ~ 19	
11246	碗	瀬戸美濃系	17 ~ 18	
11396	皿	瀬戸美濃系	17 ~ 18	
11433	皿	瀬戸美濃系	17 ~ 18	
17034	皿	瀬戸美濃系	17 ~ 19	

3 自然科学分析

(1) 大日野原遺跡第4次調査出土試料の炭素14年代測定・同位体比

小林 謙一（中央大学）・西本志保子（中央大学院）・坂本稔（国立歴史民俗博物館）・田代直也（中央大学院）
東京大学総合研究博物館年代測定室

大日野原遺跡4次調査出土土器付着物及び出土炭化物試料の分析結果について、報告する。なお、3次調査の報告において、縄紋時代中期竪穴住居跡出土炭化物28点について報告した（小林2014）。本測定の多くは本学術振興会科学研究費助成事業（基盤B）（小林謙一）によるが、SOH-15219の測定は、東京大学総合研究博物館年代測定室の2018年度ワークショップ（田代直也）、SOH-15441の測定は、国立歴史民俗博物館の2019年度機器利用型共同研究（代表 西本志保子）として実施した。

1. 分析試料

試料は、2014年度～2018年度に4次調査区から出土した炭化物、土器付着物である。採取量は土器付着物の採取量 (mg)、処理量は前処理に供した量 (mg)、回収率は前処理後の試料量 (mg)、回収率は回収量／処理量である。

表15 分析資料

試料番号	出土区	種類	時代	採取量	処理量	回収量	回収率
KNSOH	11280	4次2014年度 (Fトレ北拡) 土器付着物 口縁内	縄文中期曾利Ⅲ式 (11b期)	42	42	10.91	26.0%
KNSOH	12966	4次2014年度 (Fトレ北拡) 土器付着物 口縁内	縄文後期堀之内2式	15	15	2.86	19.1%
KNSOH	19789	SI14-3a層	炭化材	38	38	18.97	49.9%
KNSOH	20306	SI14-覆土	炭化材	83	83	42.62	51.3%
KNSOH	19154	SI14-3a層	炭化材	41	41	18.17	44.3%
KNSOH	19834	SI14-3a層	炭化材	170	170	49.71	29.2%
KNSOH	19306	SI14-3a層	炭化材	145	145	69.42	47.9%
KNSOH	19312	SI14-3a層	炭化材	90	90	26.54	29.5%
KNSOH	15219	SI14	炭化材	51	51	27.19	53.4%
KNSOH	15441	SI14-床	炭化材	19	19	10.16	53.4%
KNSOH	19324	SK1-1層	炭化材	75	75	26.57	35.4%
KNSOH	19460	SK1-2層	炭化材	33	33	11.61	35.2%
KNSOH	19670	SK1-2層	炭化材	92	39	16.21	41.6%
KNSOH	10763	SU01上層	炭化材	15	15	4.20	28.0%

表16 測定試料の出土座標値

試料番号	X	Y	Z
11280	-41098.366	-62205.038	260.288
12966	-41098.228	-62204.211	260.083
19789	-41106.15	-62202.92	259.996
20306	-41103.711	-62203.014	260.068
19154	-41106.393	-62201.599	260.263
19834	-41106.068	-62201.564	260.126
19306	-41106.127	-62201.563	260.211
19312	-41106.338	-62202.277	260.198
15219	-41104.896	-62203.577	260.258
15441	-41104.106	-62203.352	260.228
19324	-41096.463	-62200.740	259.567
19460	-41096.558	-62200.700	259.363
19670	-41096.391	-62200.627	259.418
10763	-41101.841	-62205.437	260.242

試料前処理は、15219は東京大学総合研究博物館で田代直也が、その他は国立歴史民俗博物館年代実験室で小林・西本が以下の手順でおこなった。

アセトン中で5分間の超音波洗浄を行った後、クロロホルムとメタノールを容量2対1で混合した溶媒（CM混液）による30分間の還流を2回おこなった。次いで、アセトン中で5分間の超音波洗浄を2回おこなった。この操作で、油分や接着剤などの成分が除去されたと判断できる。

酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、1mol/ℓ（1.2N）の塩酸（HCl）を用いて80度で60分の処理を2回おこなった。アルカリ処理では1回目は0.01Nの水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、2回目は0.1N、3回目以降は1Nを用いて各60分の処理をおこない、溶液に着色がほぼなくなるまで繰り返した。少ない試料は4回、殆どの試料は5回のアルカリ処理をおこなった。さらに、1.2Nの塩酸（HCl）を用いて60分の処理を2回おこなった。最後に純水により30分の洗浄を4回おこない中和していることを確認し、試料を回収した。なお、15219と15441を除く炭化材は、自動AAA処理装置（Sakamoto et al., 2010）を用い、80℃の温度下で、1.2N塩酸溶液による1時間の加熱を2回、1N水酸化ナトリウム溶液による1時間の加熱を5回、1.2N塩酸溶液による1時間の加熱を3回繰り返し、最後に純水による30分の加熱を6回繰り返した。測定試料の前処理の結果は表1の通りである。

2. 炭素精製およびグラファイト化・AMS測定

グラファイト化およびAMS測定は11280、12966および15441は山形大学YU-AMSグループに、他は東京大学総合博物館へ委託した。

測定試料1280、12966および15441は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化をおこなった。山形大学高精度加速器測定センター総合研究所1階に設置した加速器質量分析計（YU-AMS：NEC製1.5SDH）を用いて放射性炭素年代を測定した。その他の試料は、東京大学総合研究博物館が所有する加速器質量分析装置（AMS）を用いて測定した。銀カップに秤量し、elementar社製vario ISOTOPE SELECT元素分析計に導入し、燃焼後、精製された二酸化炭素を真空ガラスラインに導入し、あらかじめ鉄触媒約2mgを秤量したコック付き反応管に水素ガス（炭素モル数の2.2倍相当）とともに封入して、650℃で6時間加熱して実施した（Omori et al. 2017）。

炭素精製における還元率をみると、土器付着物のKNSOH-12966は、2.531mgを供してガラスラインで回収した炭素量は0.717mg（回収したCO₂量より計算）で炭素含有率は28.3%、炭素量39.52%、窒素量5.04%であった。同じくKNSOH-11280は、2.437mgを供して0.876mg回収し含有率36.0%、炭素量48.74%、窒素量4.09%であった。東大総合博物館でのEAによる精製ラインでのグラファイト化の結果については表2に示す。炭素含有率に相当するのは供した試料を精製した炭素からmol比で炭素重量に換算した精製炭素量の比率である還元効率が相当する。15219がやや低い他は60%以上と炭化材として通常の値であり、土器付着物を含めてすべて筆者が良好な炭素試料の目安としている10%以上の含有率を示していることから、炭素14年代測定には適した試料と考える。

得られた14^c濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14^c年代、暦年代を算出した。なお、慣用14^c年代（BP年代）を算出するために、同位体比分別の補正に用いるδ13^c値はAMSにて同時測定した値を用いている（Stuiver and Polach 1977）。

表17 グラファイト化の状況

試料番号	GR番号	試料重量	精製炭素量	還元効率	グラファイト重量	鉄重量	C/Fe比
KNSOH-15219	GR-6684	1.97 mg	0.88mg	44.7%	0.59 mg	1.92mg	0.307
KNSOH_19154	GR-6086	2.022mg	1.32mg	65.3%	1.12mg	1.90mg	0.589
KNSOH_19324	GR-6087	1.891mg	1.22mg	64.5%	1.06mg	2.10mg	0.505
KNSOH_19460	GR-6088	1.907mg	1.23mg	64.5%	0.88mg	1.95mg	0.451
KNSOH_19789	GR-6089	1.976mg	1.30mg	65.8%	1.20mg	1.96mg	0.612
KNSOH_20306	GR-6090	1.857mg	1.21mg	65.2%	0.88mg	1.95mg	0.451
KNSOH_19670	GR-6091	1.942mg	1.26mg	64.9%	1.19mg	2.09mg	0.569
KNSOH_19834	GR-6092	1.961mg	1.31mg	66.8%	1.07mg	1.92mg	0.557
KNSOH-19306	GR-6149	—	—	90.9%	1.10 mg	2.02mg	0.545
KNSOH-19312	GR-6150	—	—	83.1%	0.98 mg	1.91mg	0.513
KNSOH-10763	GR-6151	—	—	90.9%	1.10 mg	2.01mg	0.547

註 15219は反応管内における試料の取りこぼしあり。19306以下の「—」は不記載。

表 18 放射性炭素年代測定の結果

試料番号	測定機関番号	14 ^c 年代 BP	補正用 $\delta^{13}\text{C}$
KNSOH 11280	YU-4535	4194 $\pm$ 20	-24.94 $\pm$ 0.44
KNSOH 12966	YU-4573	3737 $\pm$ 23	-21.1 $\pm$ 0.69
KNSOH 19789	TKA-19334	4559 $\pm$ 31	-27.0 $\pm$ 0.4
KNSOH 20306	TKA-19335	3923 $\pm$ 31	-26.0 $\pm$ 0.5
KNSOH 19154	TKA-19331	3843 $\pm$ 30	-27.1 $\pm$ 0.4
KNSOH 19834	TKA-19337	3882 $\pm$ 31	-26.3 $\pm$ 0.7
KNSOH 19306	TKA-19408	3787 $\pm$ 26	-29.9 $\pm$ 0.2
KNSOH 19312	TKA-19409	3868 $\pm$ 22	-28.1 $\pm$ 0.2
KNSOH 15219	TKA-19558	3865 $\pm$ 45	-16.9 $\pm$ 0.4
KNSOH 15441	YU-9983	3838 $\pm$ 21	-28.1 $\pm$ 0.2
KNSOH 19324	TKA-19332	2965 $\pm$ 28	-25.2 $\pm$ 0.4
KNSOH 19460	TKA-19333	2988 $\pm$ 28	-28.0 $\pm$ 0.4
KNSOH 19670	TKA-19336	2799 $\pm$ 28	-25.4 $\pm$ 0.6
KNSOH 10763	TKA-19410	330 $\pm$ 21	-29.5 $\pm$ 0.2

14^c 年代の誤差は 1 標準偏差を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうため、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値を示す。

表 19 推定される較正年代 (cal BP 表記)

試料番号	測定機関番号	較正年代 (2SD)cal BP	較正年代 (2SD)cal BC
KNSOH11280	YU-4535	4762 cal BP(56.8%)4693 cal BP 4838 cal BP(24.8%)4802 cal BP 4675 cal BP(13.9%)4645 cal BP	2813 cal BC(56.8%)2744 cal BC 2889 cal BC(24.8%)2853 cal BC 2726 cal BC(13.9%)2696 cal BC
KNSOH12966	YU-4573	4154 cal BP(64.0%)4064 cal BP 4049 cal BP(31.4%)3987 cal BP	2205 cal BC(64.0%)2115 cal BC 2100 cal BC(31.4%)2038 cal BC
KNSOH19789	TKA-19334	5188 cal BP(53.3%)5054 cal BP 5321 cal BP(37.9%)5260 cal BP 5436 cal BP(1.9%)5422 cal BP 5224 cal BP(1.3%)5214 cal BP 5244 cal BP(1.0%)5236 cal BP	3239 cal BC(53.3%)3105 cal BC 3372 cal BC(37.9%)3311 cal BC 3487 cal BC(1.9%)3473 cal BC 3275 cal BC(1.3%)3265 cal BC 3295 cal BC(1.0%)3287 cal BC
KNSOH20306	TKA-19335	4436 cal BP(95.4%)4247 cal BP	2487 cal BC(95.4%)2298 cal BC
KNSOH19154	TKA-19331	4406 cal BP(9.6%)4366 cal BP 4357 cal BP(85.8%)4153 cal BP	2457 cal BC(9.6%)2417 cal BC 2408 cal BC(85.8%)2204 cal BC
KNSOH19834	TKA-19337	4417 cal BP(94.2%)4235 cal BP 4196 cal BP(1.2%)4185 cal BP	2468 cal BC(94.2%)2286 cal BC 2247 cal BC(1.2%)2236 cal BC
KNSOH19306	TKA-19408	4240 cal BP(95.4%)4088 cal BP	2291 cal BC(95.4%)2139 cal BC
KNSOH19312	TKA-19409	4411 cal BP(94.9%)4235 cal BP 4196 cal BP(0.5%)4193 cal BP	2462 cal BC(94.9%)2286 cal BC 2247 cal BC(0.5%)2244 cal BC
KNSOH15219	TKA-19558	4416 cal BP(95.4%)4155 cal BP	2467 cal BC(95.4%)2206 cal BC
KNSOH15441	YU-9983	4299 cal BP(87.0%)4151 cal BP 4354 cal BP(5.6%)4327 cal BP 4385 cal BP(2.1%)4369 cal BP 4401 cal BP(0.7%)4393 cal BP	2350 cal BC(87.0%)2202 cal BC 2405 cal BC(5.6%)2378 cal BC 2436 cal BC(2.1%)2420 cal BC 2452 cal BC(0.7%)2444 cal B
KNSOH19324	TKA-19332	3215 cal BP(94.6%)3023 cal BP 3014 cal BP(0.8%)3006 cal BP	1266 cal BC(94.6%)1074 cal BC 1065 cal BC(0.8%)1057 cal BC
KNSOH19460	TKA-19333	3242 cal BP(94.1%)3069 cal BP 3319 cal BP(1.3%)3309 cal BP	1293 cal BC(94.1%)1120 cal BC 1370 cal BC(1.3%)1360 cal BC
KNSOH19670	TKA-19336	2968 cal BP(92.3%)2842 cal BP 2825 cal BP(3.1%)2799 cal BP	1019 cal BC(92.3%)893 cal BC 876 cal BC(3.1%)850 cal BC
KNSOH10763	TKA-19410	464 cal BP(95.4%)309 cal BP	1487 cal AD(95.4%)1641 cal AD

較正年代の算出には、OxCAL4.2 (Bronk Ramsey, 2009) を使用し、較正データには IntCal13 (Reimer et al. 2013) を用いた。なお、較正曲線は IntCal20 に改訂が予定されている (Reimer et al. 2020) が、縄紋時代の年代については大きな影響はない。

3. 安定同位体比およびC/N比

土器付着物の KNSOH-11280 について、残余の AAA 済みサンプルを用いて、炭素量、窒素量を、SI サイエンス社に委託し、質量分析計 (IRMS) による炭素・窒素安定同位体比測定した。なお、このほかの土器付着物として AMS 測定した 12966 は試料不足から IRMS 測定はおこなわなかった。別に、微量なため AMS 測定には最初から供さなかった KNSOH-19037 および 19783 とした土器付着物の AAA 前処理後の試料について、IRMS 測定を試みたが重量不足で測定不可であった。

表 20 安定同位体比

試料番号	測定	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	炭素濃度	窒素濃度	C/N 比
KNSOH-11280	SI サイエンス	-25.4‰	2.65‰	56.1%	4.63%	14.14

これまでの筆者らの分析から、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は陸性の植物由来と捉えられ、 $\delta^{15}\text{N}$ も比較的低く C/N 比が大きいことから植物由来で整合的であると考ええる。

4. 年代的考察

まず SU01 出土とした KNSOH-10763 は、明らかに後世の混入である。2012 年度 4 次調査初年度の E トレンチ内で埋嚢を確認した際に埋嚢埋設土坑の上部から出土した微少な炭化物である。年代的に江戸時代の年代を示し、近くに耕作坑があることから、畑としての耕作時に攪乱によって混入した可能性が考えられる。なお、No. 10763 の取り上げ No は、堀之内式土器片と番号が重複しており、その点でも本試料の出土位置の位置づけは不明瞭な点がある。

曾利Ⅲ式に属する土器付着物 KNSOH-11280 (YU-4535) は 4760 ~ 4695 cal BP に含まれる可能性が 56.8% で最も大きい。土器の細別時期である新地平編年 11c 期の年代推定は 4770 ~ 4730 cal BP であり (小林 2019)、測定結果は含まれていることから、整合的な年代値といえる。

堀之内 2 式に比定される土器内面付着物の KNSOH12966 (YU-4573) は、4155 ~ 4065 cal BP (64.0%) または 4050 ~ 3987 cal BP (31.4%) の年代に含まれる。堀之内 2 式の推定年代は 4050 ~ 3900 cal BP と想定しており (小林 2019)、較正年代も含まれるものの、より確率の高い年代は堀之内 1 式に含まれる年代に比定される。土器付着物がやや少なく安定同位体比を測定できず、また土器破片が小破片であるため不明瞭であるが、おおそ土器型式と整合的と捉えておきたい。

堀之内式期の住居跡である SI14 号住居跡出土炭化物として 8 点の測定をおこなった。このうちの 19789 は、明らかに古い縄紋中期前葉の年代値である。遺構からは、床面近くからも縄紋中期前葉の土器が出土しており、遺構構築時に周辺に包含されていた中期前葉勝坂 1 式期に伴う炭化物が住居覆土に包含されていたものと捉えたい。その他の炭化材は、後期初頭から後期前葉にかけての年代値を示しており、SI14 号住居跡が堀之内 1 式期に属することと矛盾はないと捉えられる。その中でも床面出土の炭化物である 15441 は、4300 ~ 4150 cal BP (87.0%) の年代に含まれる可能性が高く、称名寺 2 式から堀之内 1 式中段前半までの年代に相当する可能性が高い (小林 2019)。

出土土器に乏しく時期を明確に決め得なかった貯蔵穴状の土坑である SK01 土坑覆土出土炭化物 3 点を測定し、すべて縄紋晩期前半に属する較正年代を得た。このうち、19324 と 19460 の 2 点はほぼ同一の年代値で 3240 ~ 3070 cal BP に含まれる可能性が高く、安行 3a 式期に相当する可能性が高いが、19670 は 2970 ~ 2840 cal BP に含まれる可能性が高く、安行 3c 式期に含まれる可能性が高い (小林 2019) ため、やや年代差があり土坑の時期として確定することはできないが、SK01 土坑が晩期に埋没した可能性を示している。

本稿は、東京大学総合博物館年代測定室・山形大学が報告した稿に、小林が追記しまとめ直した稿である。測定は、研究代表者小林謙一の日本学術振興会科学研究費助成事業 (基盤 B) 2016-2017 年度「炭素 14 年代測定による縄紋文化の枠組みの再構築 - 環境変動と文化変化の実年代体系化」(課題番号 25284153) および同 2018-2019 年度日本学術振興会科学研究費助成事業 (基盤 B) 「東アジア新石器文化の実年代体系化による環境変動と生業・社会変化過程の解明」(課題番号 18H00744)、令和元年度国立歴史民俗博物館共同利用型共同研究「関東縄紋時代中期後葉の土器群の年代的位置づけ」(研究代表者西本志保子)、東京大学総合研究博物館 2018 年度ワークショップの経費による。

参考文献

小林謙一 2014 「第 3 次調査出土炭化材の炭素 14 年代測定」『中央大学文学部考古学研究室調査報告 3 大日野原遺跡第 3 次調査遺物編』中央大学文学部

小林謙一 2019 『縄紋時代の実年代講座』同成社

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(4), 337-360.

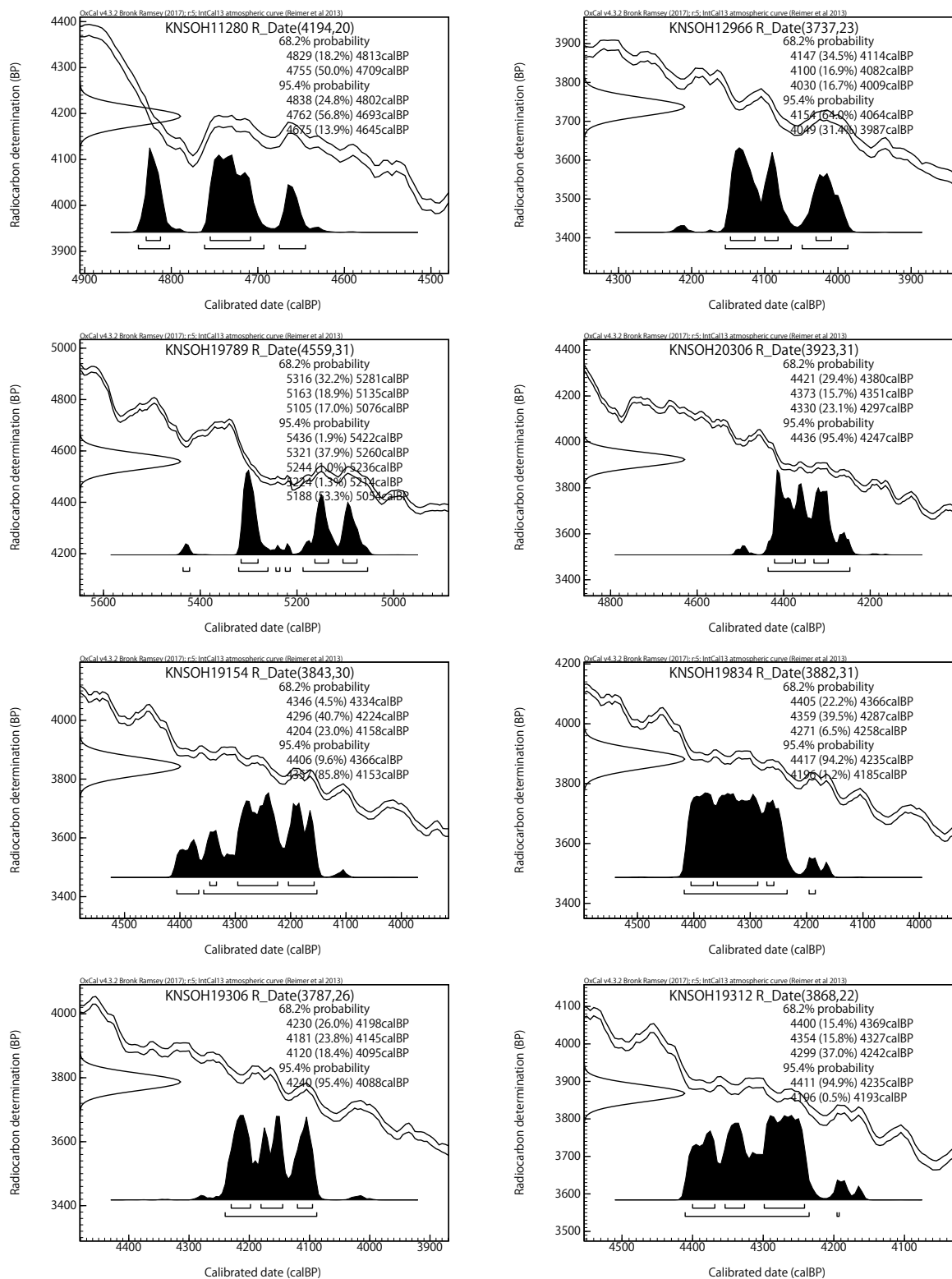


図 41 較正年代確率分布 1

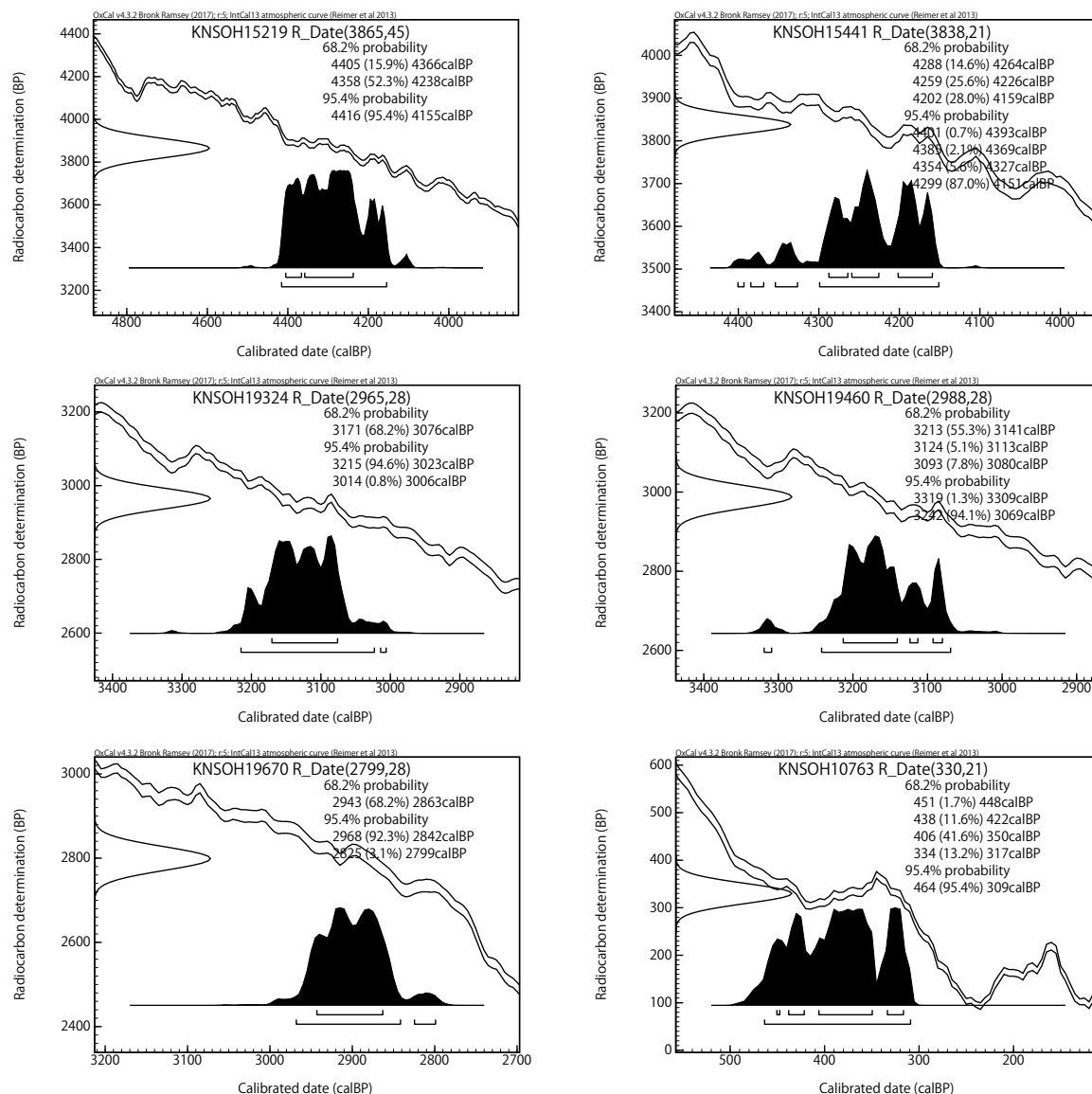


図 42 較正年代確率分布 2

Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M., (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.

Reimer, P.J., E. Bard, A. Bayliss, J.W. Beck, P.G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, C.E. Buck, H. Cheng, R.L. Edwards, M. Friedrich, P.M. Grootes, T.P. Guilderson, H. Haflidason, I. Hajdas, C. Hatté, T.J. Heaton, D.L. Hoffmann, A.G. Hogg, K.A. Hughen, K.F. Kaiser, B. Kromer, S.W. Manning, M. Niu, R.W. Reimer, D.A. Richards, E.M. Scott, J.R. Southon, R.A. Staff, C.S.M. Turney, and J. van der Plicht (2013). IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

Paula Reimer*, W.E.N. Austin, Edouard Bard, Alex Bayliss, Paul G. Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Martin Butzin, Hai Cheng, R. Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M. Grootes, Thomas P. Guilderson, Irka Hajdas, Timothy J. Heaton, Alan. G. Hogg, Konrad A. Hughen, Bernd Kromer, Sturt W. Manning, Raimund Muscheler, Jonathan G. Palmer, Charlotte Pearson, Johannes van der Plicht, Ron Reimer, David A. Richards, E. Marian Scott, John R. Southon, Christian S M Turney, Lukas Wacker, Florian Adolphi, Ulf Büntgen, Manuela Capano, Simon Fahrni, Alexandra Fogtmann-Schulz, Ronny Friedrich, Fusa Miyake, Jesper Olsen, Frederick Reineg, Minoru Sakamoto, Adam Sookdeo, Sahra Talamo, 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon 62(4)

M. Sakamoto et al. 2004 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223–224: 298–301

Stuiver, M., and H.A. Polach (1977). Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355–363.

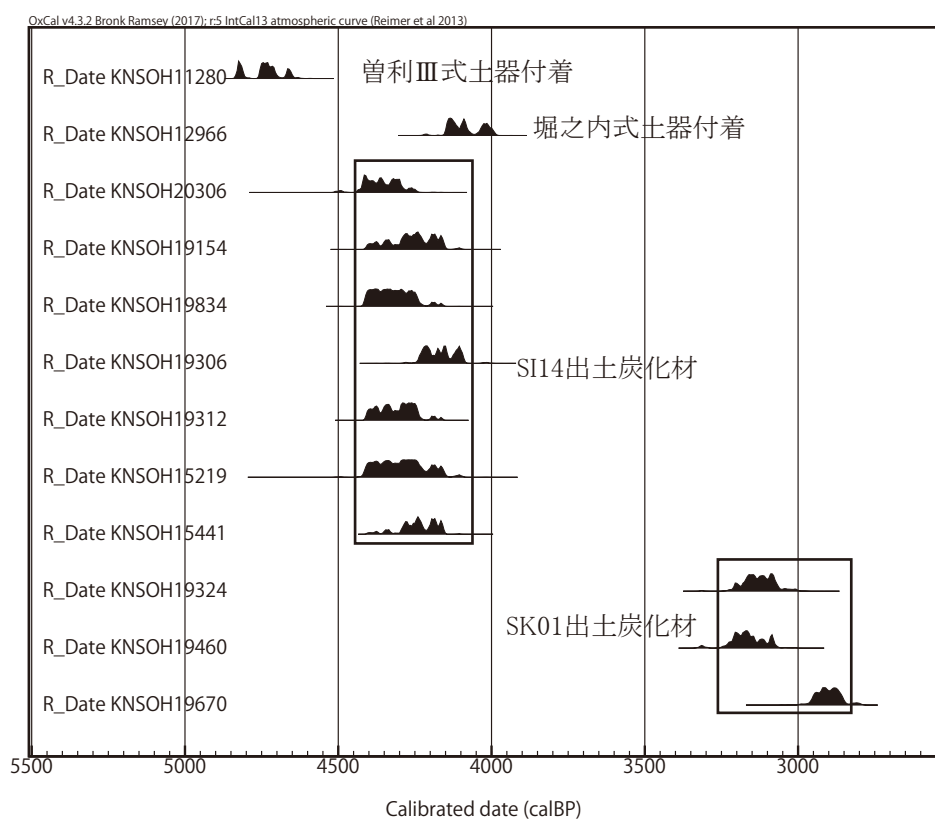


図 43 較正年代 (IntCai13)

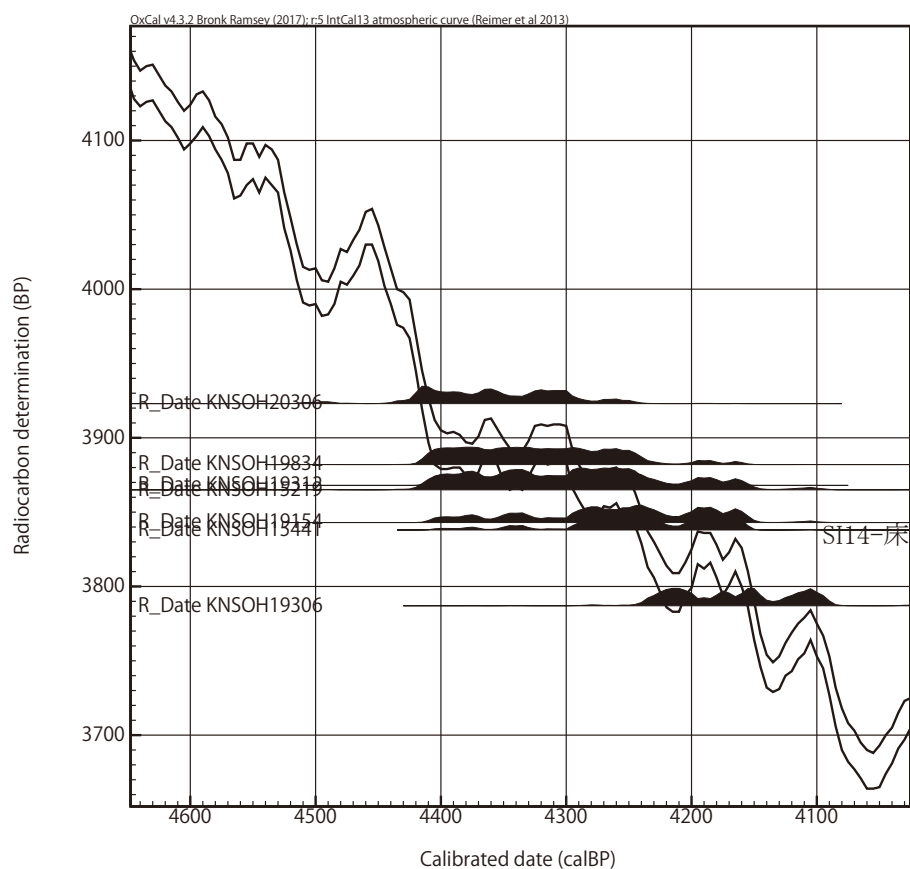


図 44 SI14 出土炭化材の較正年代と較正曲線 (IntCal13)

(2) 大日野原遺跡から出土した石器の残存デンプン粒分析

渋谷綾子（国立歴史民俗博物館）

はじめに

相模原市大日野原遺跡から出土した石器 7 点に対して、残存デンプン粒分析を行った。

残存デンプン粒分析は、遺跡土壌、石器や土器などの人工遺物から当時の人びとが利用した植物に由来するデンプン粒を検出し、過去の植生や人間の植物利用を解明する研究手法である。過去の食料資源や植生を復元する手法の一つとして 1990 年代以降に世界各地の考古学調査で導入され、日本ではこの 10 年ほどの間で取り組まれるようになった。現在では検出報告が相次ぎ、縄文時代遺跡に限っても石皿や磨石類、土器内面に付着した炭化物から良好な遺存状態を示す残存デンプン粒が多数見つかっており、これまでの種実などの植物遺体研究では解明できなかった縄文時代の鱗茎・根茎類利用の解明に、残存デンプン粒分析が極めて有効であることが示されてきている（渋谷, 2015b）。本分析では、大日野原遺跡第 3 次発掘調査で出土した石器の分析（渋谷, 2014a）に引き続き、2014 年度調査で出土した同遺跡の石器 7 点を対象として残存デンプン粒の検出を試みた。

分析対象資料と分析方法

分析対象とした石器 7 点の器種は、石皿 4 点、磨石 2 点、台石 1 点である（表 21）。これらはすべて出土後に水道水で洗浄されており、中央大学文学部考古学研究室で保管されている。本分析では、石器の観察と分析試料の採取を中央大学文学部考古学研究室で行い、プレパラートの作製と顕微鏡観察はすべて国立歴史民俗博物館のメタ資料学センターで行った。試料の採取時は異物の混入を避けるため、試料ごとの手洗い等の採取条件に留意した。

試料採取ではフラガー（2006）の方法を参照し、磨面や敲打痕の確認された部位を主に選択するとともに、使用痕の確認されなかった部位からも試料を採取し、残存デンプン粒の有無と検出量を検討した。マイクロピペット（エッペンドルフ社製、容量範囲 10 ～ 100 μ l）にピペットチップをはめて精製水（シグマ社製）を吸入し、採取する対象に注入、洗浄しながら試料が 16 μ l 以上（複数枚のプレパラートを作製する必要量）になるまで吸引した。石器 1 点につき試料を 3 ～ 4 箇所、石器の表面の凹所から採取した。この方法は他の分析事例（たとえば渋谷, 2014b, 2015a; 渋谷ほか, 2015）でも採用している。

採取した試料はすべて、現生デンプン粒標本（渋谷, 2006, 2010）と同じ方法でプレパラートを作製した。遠心後（13000rpm, 1 分）の試料 8 μ l をスライド封入剤（グリセロール・ゼラチン、屈折率 1.46 ～ 1.48）8 μ l で封入し、1 試料につき 2 枚のプレパラートを作製した。このとき、スライドガラスやカバーガラス、スライド封入剤の汚染の有無を確認するため、試料を入れないブランクスライドを作製している。次に、光学顕微鏡（Olympus BX53-33Z, 簡易偏光装置付）を用いて、接眼レンズを 10 倍、対物レンズを 10 ～ 40 倍、総合倍率 100 ～ 400 倍の視野条件で観察し、顕微鏡カメラ（WRAYCAM-G500）で写真記録を行った。

分析結果

残存デンプン粒を検出したものは石皿 1 で、検出量は 2 個である（表 21, 図 45）。どちらも単独粒（1 粒単独の状態）であり、IS3 から角ばった円形（AIII, 図 45(1)）、IS5 から分解デンプン粒（原形不明, 図 45(2)）を検出した。

デンプン粒の他には、総合倍率 100 ～ 200 倍の視野条件で観察できるほど微細な植物繊維の断片がごく一部の石器の試料に含まれていたが、全体としてはこれらの植物性物質はほとんど確認できなかった。

考察

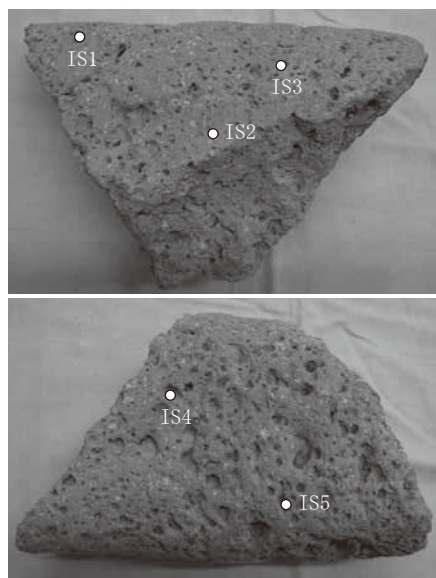
残存デンプン粒の検出状況とその評価

分析した石器 7 点のうち、石皿 1 のみ残存デンプン粒を 2 個検出した。他の 6 点の石器については、①石器製作など植物の加工以外の目的で使用された可能性、②植物加工の頻度が非常に低かったため、デンプン粒の付着量が非常に少なく、失われた可能性、③植物加工時は石器表面に付着していたが遺存しなかった可能性、が推定できる。

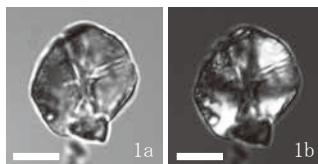
前回の分析（渋谷, 2014a）では、敲打痕や磨面のある石器から残存デンプン粒が検出されなかった結果がすでに報告されており、他の遺跡でも報告されている（たとえば渋谷, 2013, 2014a, 2015a; 渋谷ほか, 2015）。そのため、別の部位からデンプン粒が検出されないか検討するとともに、今回分析の対象としなかった石器に対して残存デンプン粒の有無を再検討することが今後必要である。

次に検出したデンプン粒について、植物加工の残滓か、それとも土壌由来のコンタミネーションか、その評価を行う。石皿 1 からは磨面の部位（IS3）から角ばった円形のデンプン粒（図 45(1)）を検出し、使用痕の確認されない部位から分解デンプン粒（図

石皿 1 (資料番号 15970)

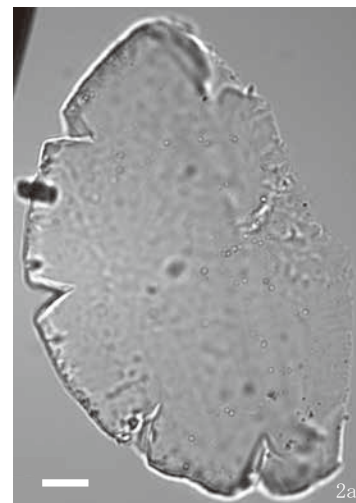


(1) IS3 から検出した円形デンプン粒

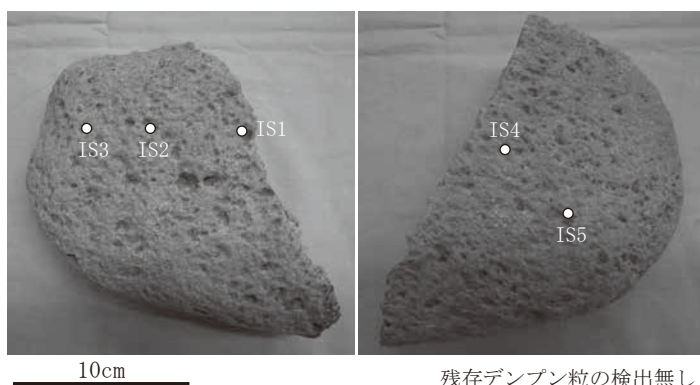


縦径 22.05 μ m・横径 21.21 μ m,
縦十字に交差した偏光十字

(2) IS5 から検出した分解デンプン粒

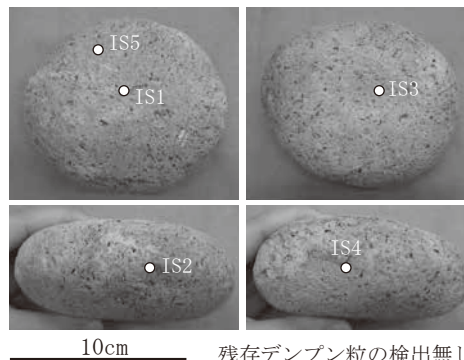


石皿 2 (資料番号 14323)



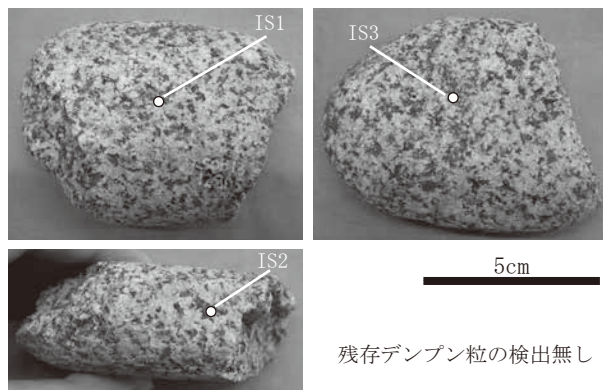
残存デンプン粒の検出無し

磨石 1 (資料番号 15544)



残存デンプン粒の検出無し

石皿 3 (資料番号 12805)



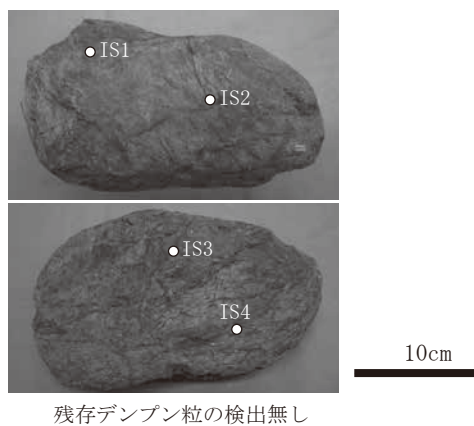
残存デンプン粒の検出無し

磨石 2 (資料番号 11269)



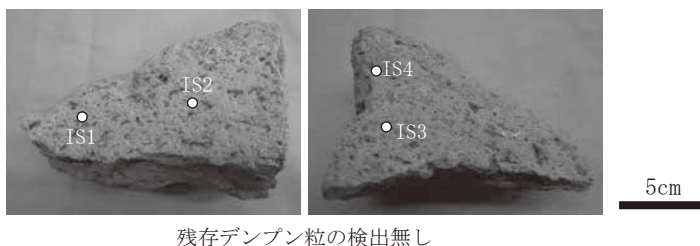
残存デンプン粒の検出無し

台石 (資料番号 16020)



残存デンプン粒の検出無し

石皿 4 (資料番号 14221)



残存デンプン粒の検出無し

図 45 分析した石器と残存デンプン粒の検出状況

白丸は試料採取箇所を示す。デンプン粒の写真はすべて 400 倍；a：開放ニコル，b：直行ニコル；スケールバーは 10 μ m。

表 21 大日野原遺跡の石器から検出した残存デンプン粒とその評価

分析石器		調査年	注記	遺構	検出部位			デンプン粒の種類			候補となる植物	評価	備考
					試料名	使用痕	有無	形態	外形	縦径 (μ m)	横径 (μ m)		
OHH-SRP15-1	石皿 1	2014	15970	SU01	IS1	無	x						
					IS2	磨面	x						
					IS3	磨面	○	AIII	角ばった円形	22.05	21.21	不明	a 青色染色は土壌成分による
					IS4	無	x						
					IS5	無	○	D	分解デンプン粒			b	
OHH-SRP15-2	石皿 2	2014	14323	SU01	IS1	磨面	x						
					IS2	磨面	x						
					IS3	無	x						
					IS4	無	x						
					IS5	無	x						
OHH-SRP15-4	石皿 3	2013	12805		IS1	磨面	x						
					IS2	無	x						
					IS3	磨面	x						
OHH-SRP15-5	石皿 4	2014	14221		IS1	磨面	x						
					IS2	磨面	x						
					IS3	磨面	x						
					IS4	無	x						
OHH-SRP15-3	磨石 1	2014	15544		IS1	磨面	x						
					IS2	敲打痕	x						
					IS3	磨面	x						
					IS4	磨面	x						
					IS5	無	x						
OHH-SRP15-6	磨石 2	2013	11269		IS1	磨面	x						
					IS2	無	x						
OHH-SRP15-7	台石	2014	16020		IS1	無	x						
					IS2	無	x						
					IS3	無	x						
					IS4	無	x						

(1) IS：第 1 次試料。残存デンプン粒の形態は、A：円形・いびつな円形・楕円形、B：半円形・三角形・四角形、C：多角形、D：分解して原形の識別が困難なもの、I：10 μ m 未満、II：10～20 μ m、III：20 μ m 以上、という項目で分類。

(2) 残存デンプン粒の評価は、a：植物加工の痕跡と考えられるもの、b：植物加工の痕跡とコンタミネーションの可能性の両方が考えられ、特定できないもの、c：コンタミネーションの可能性が高いもの、という項目で評価。

45(2))を検出した。この石皿は遺構内から出土しており、試料中には植物性物質の断片がまったく含まれていなかった。さらに、現生植物のデンプン粒では確認されない土壌成分(銅イオンなど)による部分的な青色をおびている。そのため、このデンプン粒は植物加工の残滓の可能性が高いと考え、「a:植物加工の痕跡と考えられるもの」とした。

一方の分解デンプン粒は使用痕の確認されない部位から検出したものであり、デンプン粒と磨面との明確な関係性を確認することができなかった。そのため、このデンプン粒はコンタミネーションの可能性が考えられるが、磨石の加工対象となった植物に由来する可能性もあるため、残存デンプン粒の評価として「b:植物加工の痕跡とコンタミネーションの可能性の両方が考えられ、特定できないもの」とした。

石器を対象とした残存デンプン粒分析では、試料からデンプン粒を検出した場合、石器の加工対象となった植物の残滓である可能性とともに、遺跡の土壌に含まれた現生植物のデンプン粒、すなわちコンタミネーションのデンプン粒が石器の埋没時に付着した可能性、という2通りの解釈が生じる。石器から検出したデンプン粒は年代測定など他の分析を適用可能な量には達しないことが多く、石器検出のデンプン粒だけでは検討が非常に困難である(渋谷ほか, 2015)。そのため、①分析対象の石器が出土した周辺土壌の分析を行うこと(Yang et al., 2013)、②出土直後の土壌の付着した状態の石器から試料を採取し分析すること、③デンプン粒の含まれていない水道水で洗浄し、表面の凹凸を明瞭に確認できる石器を抽出して分析すること、④石器表面の割れ目や穴の深い部分から試料を採取することなど、分析対象資料の選択や試料採取時の条件に留意し、コンタミネーションの問題を避けることが重要である(渋谷, 2009b)。

第3次発掘調査の出土石器の分析(渋谷, 2014a)と同様に、本分析でも①と②の実施ができず、また、同じ遺構から出土した自然礫や調査資料の上層・下層から出土した他の石器との比較分析を行うこともできなかった。したがって、今後行う調査では、土壌試料の採取・分析や他の石器との比較分析を行うことが必要であり、これまで検出した残存デンプン粒の由来を改めて検証することが必要である。

残存デンプン粒の由来する植物

検出したデンプン粒2個はいずれも単独粒であり、特にIS5のデンプン粒は原形をまったくとどめていない分解デンプン粒である。原形の識別が非常に困難な分解デンプン粒は植物種の特定が非常に困難であるため、同定不明とした。

一方、IS3から検出したデンプン粒は角ばった円形を示し、円形のデンプン粒を貯蔵する植物は非常に多いため種の特定が困難であり、アミロプラストと呼ばれる細胞内構造体の中や植物繊維に包含された状態のものも今回は確認されなかった。現生堅果類のデンプン粒では子葉だけでなく、果皮や殻斗、葉の部分において植物繊維や細胞組織の中に包含されたデンプン粒は確認されず、穀類やマメ類の標本でも類似したものは確認されていないため(渋谷, 2009b)、植物繊維や細胞組織内のデンプン粒は鱗茎・根茎類に由来する可能性が高い(渋谷, 2009a, 2009b)。この円形デンプン粒にはこうした手がかりは確認できず、しかも部分的な損傷を生じており、形成核(粒子の中央部に偏光十字が交差する箇所、ヘソ hilum)の状態を確認することが非常に難しかった。しかも、トチノキ *Aesculus turbinata* やアズキ *Vigna angularis* に見られる複粒構造、すなわち2個のデンプン粒が連結して1個のデンプン粒のように見え、形成核が2つある構造(藤本, 1994; 木村ほか, 2006)を示すような特徴も見られなかった。植物種の特定が非常に困難であるため、本報告では同定不明とした。

おわりに

分析の結果、大日野原遺跡の石皿1点から残存デンプン粒2個を検出した。前回の分析(渋谷, 2014a)と同じく、検出個数は全体として非常に少ないが、検出したもののうち角ばった円形デンプン粒は磨面との関係性が確認できるため、石皿の加工対象植物に由来する可能性が高い。ただし、土壌試料の分析や同じ遺構の上層・下層から出土した他の石器との比較分析を実施していないため、これらの残存デンプン粒の検出をもって大日野原遺跡の石器の用途を結論づけることは非常に困難である。今回の結果と併せてさらに検証を進めていく必要がある。

本分析における試料採取と顕微鏡観察は、科学研究費補助金若手(B)「北日本縄文時代の植物食文化に関する分析学的研究」(課題番号26750101, 研究代表渋谷綾子, 平成26～28年度)の一部を用いて実施した。分析にあたり、小林謙一先生をはじめ、中央大学文学部考古学研究室の方がたにご教示とご協力をいただいた。末筆ながら記して深く感謝申し上げます。

追記

渋谷氏に分析を依頼後、新たためて石器としての整理作業を行った結果、一部の石器について器種の変更が認められたので、補足として記しておきたい。石皿とした OHH-SRP15-2（取り上げNo. 14323）および磨石とした OHH-SRP15-6（取り上げNo. 11269）は、人為的な痕跡が認めがたく礫と捉え直した。なお、石皿片の OHH-SRP15-1 は取り上げNo. 15970 と伝えており、その番号で分析されているが実際には 15978 であったことを訂正したい。

引用文献

藤本滋生. 1994. 澱粉と植物—各種植物澱粉の比較—. 233 pp. 草書房, 福岡.

Fullagar, R. 2006. Starch on artifacts. *Ancient starch research* (Torrence, R. & Barton, H. eds.), 177-203. Left Coast Press, INC., Walnut Creek.

木村友子, 大藪佳苗, 佐々木弘子, 加賀谷みえ子, 内藤通孝, 中莖秀夫, 菅原龍幸. 2006. 超音波照射が小豆全粒粉添加クッキーの品質に及ぼす影響. *日本食生活学会誌* 17 (2): 64-72.

渋谷綾子. 2006. 日本の現存植物を用いた参照デンプン標本. *新潟県立歴史博物館研究紀要* 7: 7-16.

渋谷綾子. 2009a. 旧石器時代および縄文時代の石器残存デンプンの分析的研究. まなぶ: 吉田学記念文化財科学研究助成基金研究論文誌 No. 2: 169-201.

渋谷綾子. 2009b. 日本の先史時代における植物性食料の加工と利用: 残存デンプン分析法の理論と応用. 博士論文, 260pp. 総合研究大学院大学, 神奈川県三浦郡葉山町.

渋谷綾子. 2010. 日本列島における現生デンプン粒標本と日本考古学研究への応用—残存デンプン粒の形態分類をめざして—. *植生史研究* 18 (1): 13-27.

渋谷綾子. 2013. 井出上ノ原遺跡出土の石器の残存デンプン分析結果. 「井出上ノ原遺跡—2006・2007 年度発掘調査—」(小林謙一・大網信良・平原信崇・小林尚子編). 中央大学文学部考古学研究室調査報告書 1. 64-71. 中央大学文学部考古学研究室, 八王子市.

渋谷綾子. 2014a. 大日野原遺跡から出土した石器の残存デンプン粒分析. 「大日野原遺跡—第3次調査— 遺物編」(小林謙一・河本雅人・正洋樹・矢嶋良多・小澤政彦・小林尚子編). 81-84. 中央大学文学部考古学研究室・相模原市教育委員会, 東京都.

渋谷綾子. 2014b. 縄文土器付着植物遺体と石器の残存デンプン粒分析からみた東京都下宅部遺跡の植物利用. *国立歴史民俗博物館研究報告* 187: 357-386.

渋谷綾子. 2015a. 出土石器の残存デンプン粒分析. 「科学研究費補助金・基盤研究 (C) 『貯蔵』と「加工」から見る東アジア農耕導入期の野生植物食料利用の実態とその変遷」(課題番号: 24520876) 研究成果報告書」(細谷葵・中村大編). 23-49. お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センター, 東京.

渋谷綾子. 2015b. 日本考古学における残存デンプン粒分析の現状と課題. *古代文化* 67 (1): 108-118.

渋谷綾子, 青野友哉, 永谷幸人. 2015. 残存デンプン粒分析におけるコンタミネーションの検討—北海道伊達市北黄金貝塚を中心として—. *国立歴史民俗博物館研究報告* 195: 79-110.

Yang, X., Barton, H. J., Wan, Z., Li, Q., Ma, Z., Li, M., Zhang, D., Wei, J. 2013. Sago-type palms were an important plant food prior to rice in southern subtropical China. *PLoS One* 8 (5): e63148.

はじめに

大日野原遺跡は、相模川支流沢井川右岸の段丘面上に位置し、縄文時代中期～後期の遺物・遺構が検出されている。大日野原遺跡での胎土分析は、すでに縄文中期土器において岩石学的手法を用いてなされている（河西 2013a、2014）。今回縄文後期土器について同様の分析を行う機会を得た。ここでは、2号住居跡内検出の砂試料や周辺の相模川（桂川）流域河川砂の分析結果も合わせて、本遺跡縄文後期土器の原料産地推定を行ったので、以下に報告する。

1. 分析試料

遺跡出土の分析試料は、表 24、図 48 に示す縄文土器 12 点、砂試料 1 点である。比較試料として遺跡周辺河川砂 11 点を採取して分析した（表 22・23、図 46・47）。なお、No.31 は、3 次調査 SI02 住居覆土内より出土した砂ブロックである。今回、比較のため分析した。

2. 分析方法

分析試料は、以下の方法で薄片を作製した。土器を切断機で 4 × 2.5cm 程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片をエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の鉛直断面切片（厚さ 3mm）を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルト亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に 0.3mm、短辺方向に 0.4mm とし、土器薄片で 2,000 ポイント、砂薄片で 500 ポイントを計測した。計数対象は、粒径 0.05mm 以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含めた。土器・砂 Nos.12 ～ 31 を先に、土器 No.32 および河川砂を後で同定したが、説明の都合上、以下では河川砂を先に土器を後に記述する（註）。

3. 分析結果

分析結果を表 23・25 に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を図 46・49 に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト～流紋岩・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩（含チャート）・炭酸塩岩（含石灰岩）・苦鉄質岩類のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示した岩石組成折れ線グラフを図 47・50 に示す。折れ線グラフのピークに基づいて土器を便宜的に分類した（表 26）。クラスタ分析の樹形図を図 51・52・53 に示す。クラスタ分析は、折れ線グラフと同様の 11 種の岩石データを用いて R 言語の hclust で行なった。クラスタ分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、ウォード法によって算出した。図 51 は、大日野原遺跡土器、桂川流域河川砂、甲府盆地周辺河川砂を比較した（河西 1989、2013a、2014、河西ほか 1989）。図 52 では、関東地方南部から西部にかけての河川砂と比較した（河西 1994、1995、2006）。図 53 では、神奈川県綾瀬市上土棚遺跡、山梨県富士吉田市池之元遺跡、韮崎市隠岐殿遺跡、東京都国立市緑川東遺跡、福島県楢葉町井出上ノ原遺跡などから出土の縄文後期土器と比較した（河西 1994、1997、2011、2013b、2015a）。

表 22 河川砂試料表

試料番号	河川名	場所	備考
No. 1	栃谷川	相模原市緑区澤井、落合	
No. 2	沢井川	相模原市緑区澤井、上河原	
No. 3	沢井川	相模原市緑区澤井、落合	相模原市立ふるさと自然体験教室やませみ付近、2つの橋の上流
No. 4	境川	相模原市緑区佐野川、下岩	緑区役所佐野川連絡所、図書館（旧学校）付近
No. 5	鶴川	上野原市鶴川	市川リースの北
No. 6	仲間川	上野原市鶴川	若宮橋上流
No. 7	軽沢川	大月市富浜町鳥沢	中央道下
No. 8	葛野川	大月市七保町葛野	東京濾器の東
No. 9	桂川	大月市賑岡町強瀬	高月橋上流
No. 10	浅利川	大月市賑岡町浅利	浅利橋下流
No. 11	真木川	大月市大月町真木	真木温泉下

表 23 河川砂中の岩石鉱物（数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す）

分析試料 試料番号	桂川流域河川砂										
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11
石英-単結晶	2	3	15	10	15	16	24	15	34	14	42
石英-β型							1				
石英-多結晶	43	24	32	24	23	18	12	26	9	19	2
カリ長石		2	1	1	5	3	1	2	2	3	4
斜長石	1	5	4	10	2	6	56	11	59	24	58
黒雲母				1		1	2	7	3	7	28
角閃石						1	8	4	5	2	9
単斜輝石	1	2	2	3	1	13	12	1	4		
斜方輝石		1	6	1		12	6		2	1	1
カンラン石	1	+	3	3		11	13	1	11		
緑簾石						1					
緑泥石			1				2		1		
不透明鉱物						21	4	1	9		
玄武岩	2	3	5	10		6	22		144	1	6
安山岩	3			8		6	13	2	4	6	
デイサイト～流紋岩							5	1	1		
緑色変質火山岩類	1	12	3	6	1	9	24		100	8	4
変質火山岩類	6	6	1	12	3	23	21		6	9	2
花崗岩類	13	3	18	33	7	4	58	16	40	110	286
ホルンフェルス	1	3	3	4	5		51	8	3	20	4
他の変成岩類（粘板岩/千枚岩）	179	197	120	164	95	40	7	83	8	58	7
砂岩	111	123	126	99	132	99	51	53	11	94	9
泥質岩	132	111	147	98	198	201	39	262	32	120	28
珪質岩	2			1		2	3			1	
炭酸塩岩						1					
苦鉄質岩類				1							
火山ガラス-無色						2	4		2		2
火山ガラス-褐色									1		
変質岩石	2		9	7	7	1	33	3	5	2	7
変質鉱物							1				
泥質ブロック		4	1	2			17		3		1
赤褐色粒子		1	3	2	6	3	10	4	1	1	
合計	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500
石英波動消光	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
パーサイト		+		+	+		+	+	+	+	
マイクロクリン								+			
マイクロクリン-パーサイト								+			
玄武岩の斑晶鉱物		cpx		ol, cpx			cpx				
安山岩の斑晶鉱物	cpx			opx		opx	cpx				
デイサイト～流紋岩の斑晶鉱物											
変質火山岩類岩質	A	A	A	B, A, D	D	B, A, D	B, A, D			A, D	B, A
花崗岩類含有鉱物	ho, bi		ho, chl, opq	ho		mu	ho, mu, bi	ho, bi	ho, bi	ho, mu, bi	ho, bi
ミルメカイト				+					+		+
火山ガラス形態						B	B, E		A', B		B

鉱物：bi黒雲母，mu無色雲母，ho角閃石，cpx単斜輝石，opx斜方輝石，olカンラン石

変質火山岩類：B玄武岩質，A安山岩質，Dデイサイト質～流紋岩質

火山ガラス形態：A泡壁型平板状，A'泡壁型Y字状，B塊状，C中間型，D中間型管状，E軽石型繊維状，F軽石型スポンジ状，F'軽石型スポンジ状（細粒結晶包有）

図 51～53 では便宜的にクラスタに数字を付した。以下に特徴を述べる。

(1) 桂川流域河川砂

この地域の河川砂の岩石古物組成の特徴は、石英、斜長石、カリ長石、重鉱物などの含有がわずかで、岩石の占有率が高く、岩石では砂岩、泥質岩主体の堆積岩が多く、断層付近の河川砂では堆積岩が圧力の影響でスレート劈開が生じた粘板岩や白雲母や緑泥石が生じた千枚岩などの変成岩に変化した岩石が多く含まれる傾向が認められる。栃谷川 No.1、沢井川 Nos.2、3、境川 No.4 で粘板岩 / 千枚岩が多い傾向は、沢井川や境川に沿って北西-南東方向の鶴川断層および平行する断層が存在し、鶴川断層北東側には四万十層群小伏層の千枚岩質泥岩が広く分布することの影響と推定される（酒井 1987）。軽沢川 No.7、桂川 No.9 では緑色変質火山岩類が多く含まれるが、これは藤野木-愛川構造線より南側に分布する新第三系に由来するものである。桂川 No.9 で顕著であり、他試料でも多少含まれることがある玄武岩、同質スコリア、カンラン石などの含有は、第四紀の富士火山噴出物の影響と考えられる。No.11 で花崗岩類が卓越するのは、上流域に甲府深成岩体が分布している影響と考えられる。以上のように桂川流域の河川砂の組成は、地域地質の特徴を鋭敏に反映したものとなっている。

(2) 縄文後期土器

a) 泥質岩・砂岩などの堆積岩主体の土器（Nos.12～15、17、18、20～23、25～30）

粒子構成に占める砂粒子の割合（以下含砂率）は、9～31%と試料ごとに多様であるものの 20%前後の値のものが多い。粒子

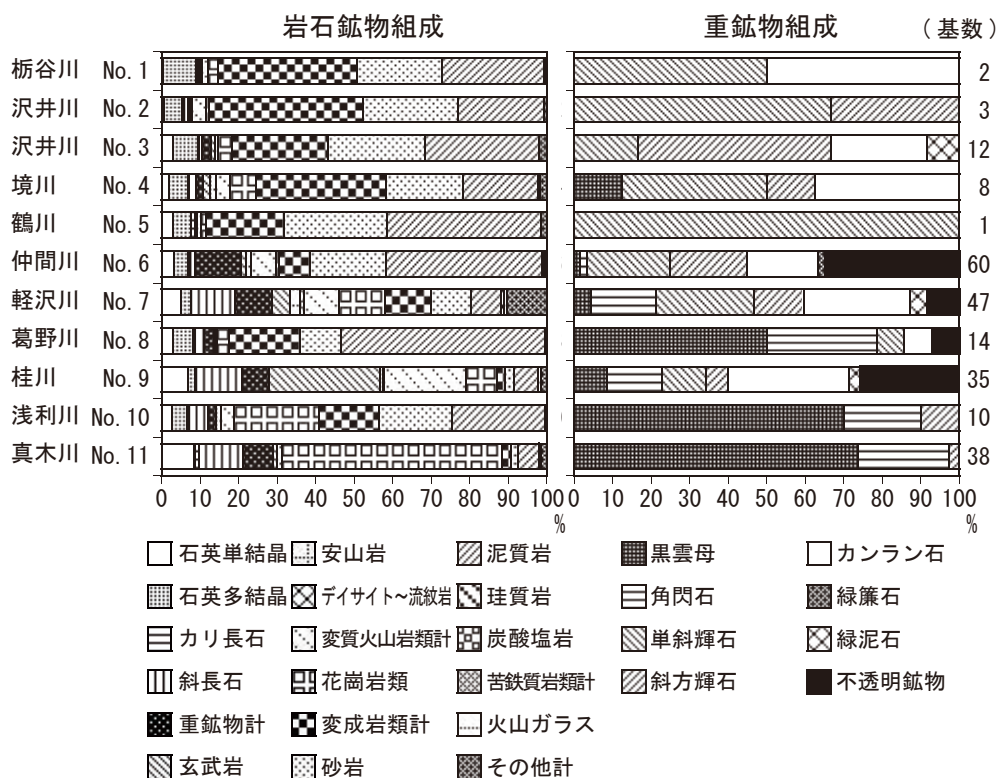


図 46 河川砂の岩石鉱物組成

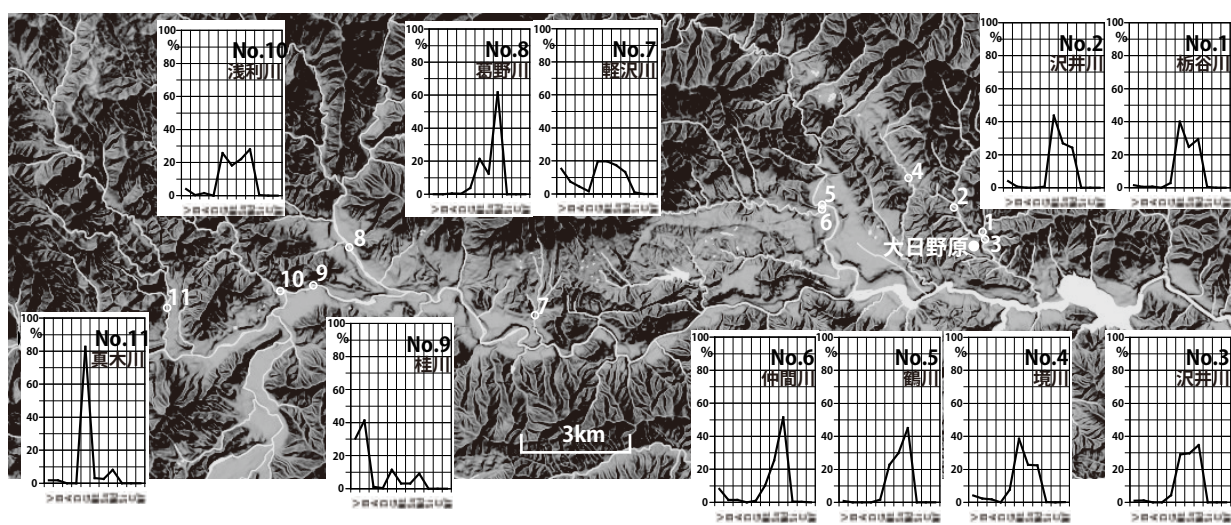


図 47 河川砂採取地点と岩石組成折れ線グラフ

(グラフの凡例は図 50 参照。背景は <https://www.gridscapes.net/AllRiversAllLakesTopography> の川だけ地形地図を使用。)

構成に占める赤褐色粒子は、No.13 で 3%、No.17 で 4%とやや多めだが、他は 1%以下と少ない。砂粒子の岩石鉱物組成の特徴は、石英・斜長石・カリ長石が普通に含まれるがやや少なめで、岩石では泥質岩・砂岩が多く、試料によって変質火山岩類、玄武岩、安山岩、花崗岩類、花崗岩類、ホルンフェルスなどを伴う。

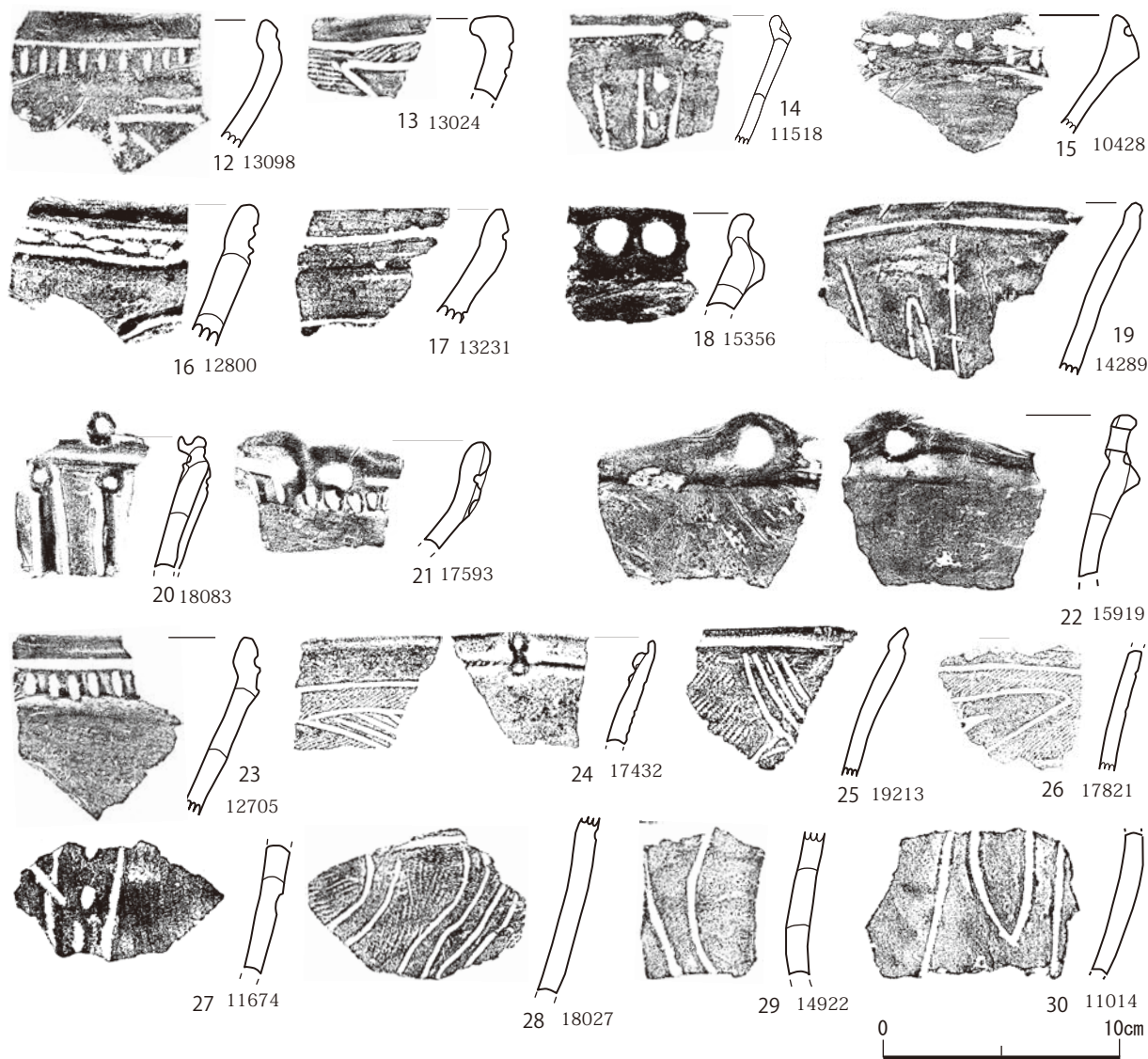
No.12 は、表 26 で MD - v 類に、図 51 で桂川流域の軽沢川、浅利川河川砂とともにクラスタ 9 に、図 52 で桂川、笹子川などとともにクラスタ 14 に、図 53 でクラスタ 7 に含まれる。No.12 の原料産地の有力候補ノひとつとして、軽沢川、浅利川、笹子川などを含む桂川流域が推定される。

Nos.15、21 は、表 26 で MD - b 類に、図 51 で桂川河川砂とともにクラスタ 10 に、図 52 で三沢川、引地川、鳩川河川砂などとともにクラスタ 13 に、図 53 でクラスタ 7 に含まれる。Nos.15、21 の原料産地候補は、桂川流域、および相模川・多摩川間の地域などが推定される。

Nos.13、14、17、18、20、22、23、25～30 は、表 26 で MD - s s 類、S S - m d 類に、図 51 で桂川流域の沢井川、鶴川、

表 24 土器試料表

No. 12	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH13, 13098
No. 13	縄文後期	称名寺 I 式	深鉢	口縁部	Fトレ東, SOH13, 13204
No. 14	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	Fトレ東, SOH13, 11518
No. 15	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH12, 10428
No. 16	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH13, 12800
No. 17	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH13, 13231
No. 18	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH14, 15356
No. 19	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH14, 14289
No. 20	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH15, 18083 RC西
No. 21	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	RC区, SOH15, 17593
No. 22	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH14, 15919
No. 23	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH13, 12705
No. 24	縄文後期	堀之内 2 式	深鉢	口縁部	SOH15, 17432
No. 25	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	口縁部	SOH16, 19213
No. 26	縄文後期	堀之内 2 式	深鉢	胴部	SOH15, 17821
No. 27	縄文後期	称名寺 II 式～堀之内 1 式(古)	深鉢	胴部	SOH13, 11674
No. 28	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	胴部	SOH15, 18027
No. 29	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	胴部	SOH14, 14922
No. 30	縄文後期	堀之内 1 式	深鉢	胴部	SOH13, 11014 Eトレ西
No. 31					砂 3 次SI02住 SOH4716
No. 32	縄文後期	網取1式	深鉢	胴部	SOH13, 12952、SI14 覆土



No. 32(12952) は、図 13-26 (K100) に図示

図 48 分析土器 (1/3)

表 25 土器胎土中の岩石鉱物 (数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す)

大日野原遺跡																						
No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	No. 21	No. 22	No. 23	No. 24	No. 25	No. 26	No. 27	No. 28	No. 29	No. 30	No. 31	No. 32		
21	3	29	4	38	17	34	90	73	28	33	25	12	78	54	38	46	22	80	5	34		
試料番号																						
石英-単結晶																						
石英-β型																						
石英-多結晶																						
カリ長石																						
斜長石																						
黒雲母																						
白雲母																						
角閃石																						
単斜輝石																						
斜方輝石																						
カンラン石																						
緑簾石																						
ジルコン																						
電気石																						
緑泥石																						
不透明鉱物																						
玄武岩																						
安山岩																						
デイサイト〜流紋岩																						
緑色変質火山岩類																						
変質火山岩類																						
花崗岩類																						
ホルンフェルス																						
片岩																						
他の変成岩類 (粘板岩/千枚岩)																						
砂岩																						
泥質岩																						
珪質岩																						
炭酸塩岩																						
緑簾石岩																						
他の苦鉄質岩類																						
火山ガラス-無色																						
火山ガラス-褐色																						
変質岩石																						
変質鉱物																						
泥質フロック																						
赤褐色粒子																						
マトリクス																						
合計																						
石英波動消光																						
石英清澄																						
石英融食																						
バーサイト																						
マイクロクリン																						
玄武岩の斑晶鉱物																						
安山岩の斑晶鉱物																						
デイサイト〜流紋岩の斑晶鉱物																						
変質火山岩類岩質																						
花崗岩類含有鉱物																						
ミルメカイト																						
火山ガラス形態																						
植物珪酸体																						

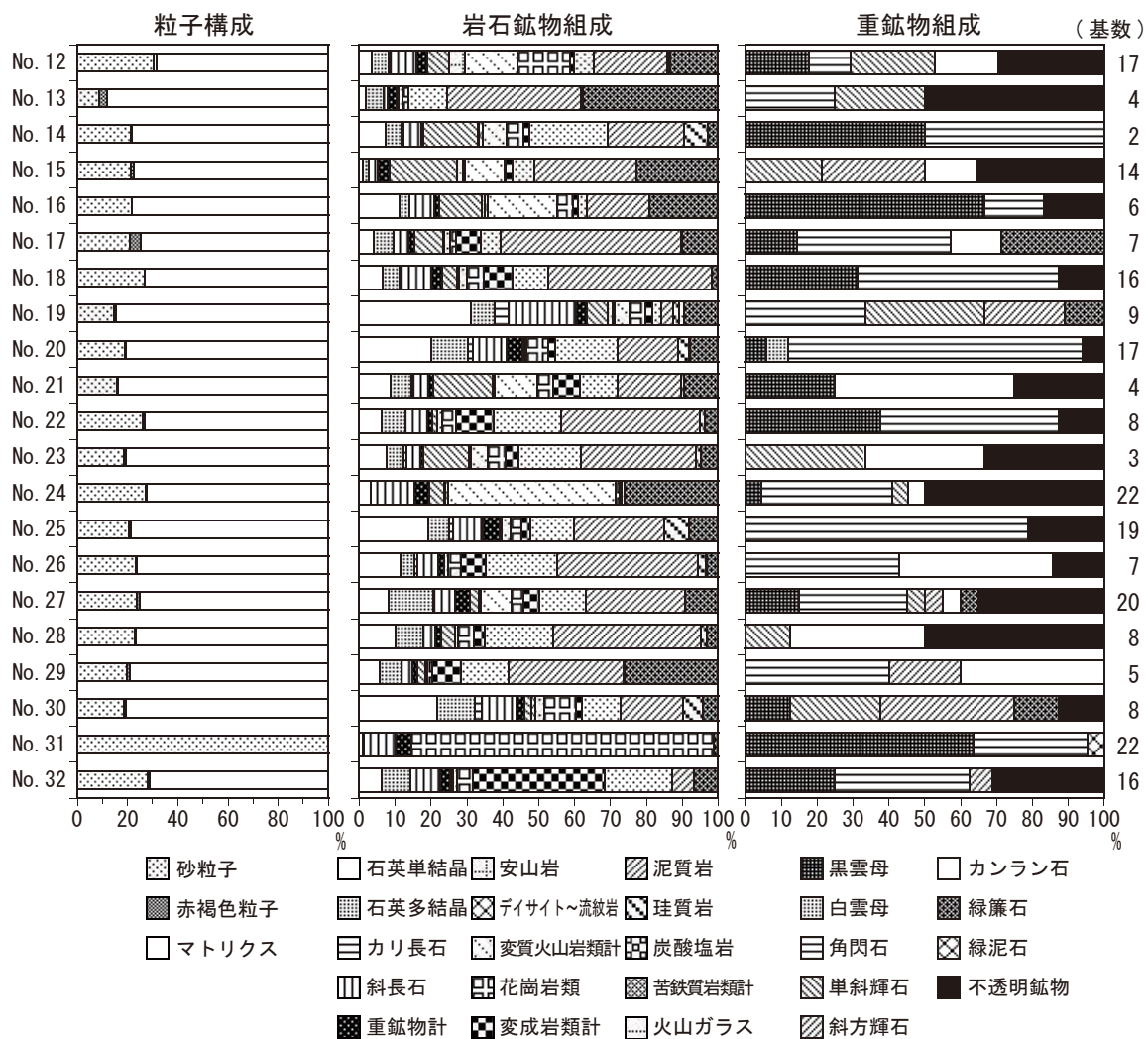


図 49 土器胎土の岩石鉱物組成

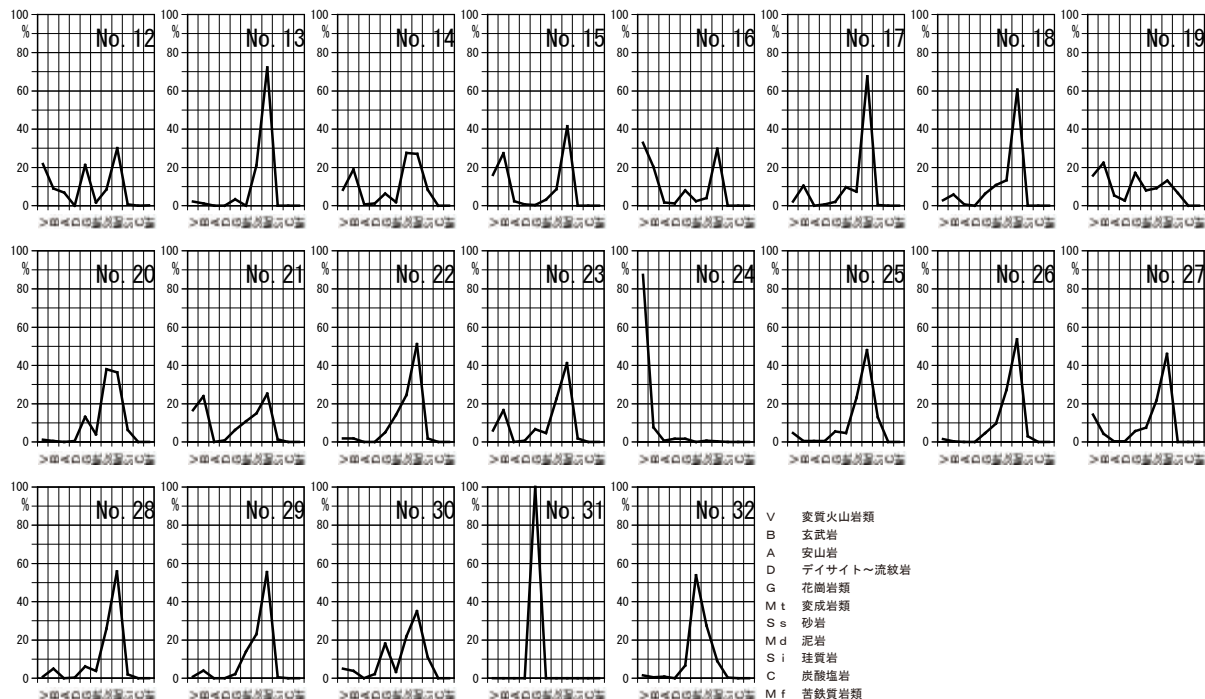


図 50 岩石組成折れ線グラフ

表 26 折れ線グラフによる土器分類

分類	折れ線グラフの特徴		試料番号
V-b 類	変質火山岩類の第 1 ピーク	玄武岩の第 2 ピーク	24
V-m d 類		泥質岩の第 2 ピーク	16
B-g 類	玄武岩の第 1 ピーク	花崗岩類の第 2 ピーク	19
G 類	花崗岩類の第 1 ピーク	顕著な第 1 ピーク	31
MT-s s 類	変成岩類の第 1 ピーク	砂岩の第 2 ピーク	32
S S-m d 類	砂岩の第 1 ピーク	泥質岩の第 2 ピーク	14、20
MD-v 類	泥質岩の第 1 ピーク	変質火山岩類の第 2 ピーク	12
MD-b 類		玄武岩の第 2 ピーク	15、17、21
MD-s s 類		砂岩の第 2 ピーク	13、18、22、23、25、26、27、28、29、30

仲間川、葛野川河川砂とともにクラスタ 7 に含まれる。このうち Nos.14、30 は、図 52 で No.19 や軽沢川、浅利川、鶴見川河川砂などとともにクラスタ 5 に含まれることから、原料産地候補は、桂川流域、および相模川・多摩川間の地域などが推定される。Nos.13、17、18 は、図 52 で桂川流域の鶴川、葛野川河川砂とともにクラスタ 4 に含まれることから、原料産地候補のひとつとして桂川流域が推定される。No.20 は、図 52 で多摩川およびその支流浅川水系の谷地川、湯殿川河川砂などとともにクラスタ 6 に含まれることから、原料産地候補のひとつとして相模川・多摩川間の地域が推定される。Nos.22、23、25～29 は、図 52 で多摩川、境川（東京都・神奈川県）、南浅川、仲間川河川砂などとともにクラスタ 7 に含まれることから、原料産地候補として桂川流域、および相模川・多摩川間の地域などが推定される。

b) 変質火山岩類が多い土器（Nos.16、24）

含砂率は、22～27%の値を示す。赤褐色粒子は 1%未満とわずかである。砂粒子の岩石鉱物組成は、石英・斜長石を少量伴い、岩石では変質火山岩類が最も多い点が共通する。No.16 は、泥質岩、玄武岩、花崗岩類、砂岩、変成岩類などが続く。No.24 は玄武岩が少量伴う。両者とも重鉱物の含有率は低く、重鉱物組成では、黒雲母、角閃石、不透明鉱物の含有が共通するものの試料ごとに組成はかなり異なり、No.24 では単斜輝石とカンラン石を伴う。

No.16 は、表 26 で V-m d 類に、図 51 でクラスタ 10 に、図 52 で神奈川県荻野川をはじめ相模川流域河川砂などとともにクラスタ 12 に、図 53 で上土柵 No.2、大日野原 No.15 などとともにクラスタ 7 に含まれる。緑色変質火山岩類を伴わないものの玄武岩比率が高いことから相模川流域周辺などに原料産地が推定される。

No.24 は、表 26 で V-b 類に、図 51 で甲府盆地新第三系分布地域河川砂とともにクラスタ 4 に、図 52 では道志川、中津川など丹沢山塊周辺の新第三系分布地域河川砂とともにクラスタ 10 に、図 53 では上土柵遺跡 No.15、池之元遺跡 No.15 などの堀之内 2 式とともにクラスタ 9 に含まれる。緑色変質火山岩を含む新第三系地域に原料産地が推定される可能性があり、富士テフラの影響により玄武岩比率が高い相模川流域の可能性が高いかもしれない。

c) 玄武岩が多い土器（No.19）

含砂率は、15%と低めである。赤褐色粒子は 1%未満とわずかである。岩石鉱物組成では、石英、斜長石、カリ長石などの無色鉱物が多い傾向があり、岩石では玄武岩が多いものの、花崗岩類、変質火山岩類、泥質岩、砂岩、変成岩類が続き、ほかに珪質岩、火山ガラス、安山岩、デイサイト～流紋岩などが検出され、雑多な岩石種の集合となっている。重鉱物の含有は少なく、重鉱物組成は角閃石、単斜輝石、斜方輝石が多く、緑簾石が伴う。No.19 は、表 26 で B-g 類に、図 51 でクラスタ 10 に、図 52 で桂川水系の軽沢川 No.7、浅利川 No.10、堆積岩の多い大日野原 Nos.14、30 などとともにクラスタ 5 に、図 53 で堆積岩の多い大日野原 Nos.14、21 などとともにクラスタ 7 に含まれる。玄武岩の含有は、富士火山テフラに由来する地元要素であると考えられ、桂川流域でも比較的花崗岩類の多い軽沢川・浅利川など北西よりの桂川流域との関連性がより強い可能性が推定される。

d) 変成岩類（粘板岩 / 千枚岩）が多い土器（No.32）

含砂率は、28%と高めである。赤褐色粒子は 1%未満である。岩石鉱物組成は、石英、斜長石が少量含まれ、岩石では粘板岩 / 千枚岩を主体とする変成岩類が主体を占め、砂岩、泥質岩、花崗岩類などが続き、変質火山岩類、安山岩、玄武岩なども検出される。重鉱物の含有は少なく、重鉱物組成では角閃石、黒雲母、不透明鉱物が主体を占め、斜方輝石をわずかに伴う。No.32 は、表 26 で MT-s s 類に、図 51 で遺跡周辺の栃谷川・沢井川・境川の河川砂とともにクラスタ 8 に、図 52 で遺跡周辺の栃谷川・沢

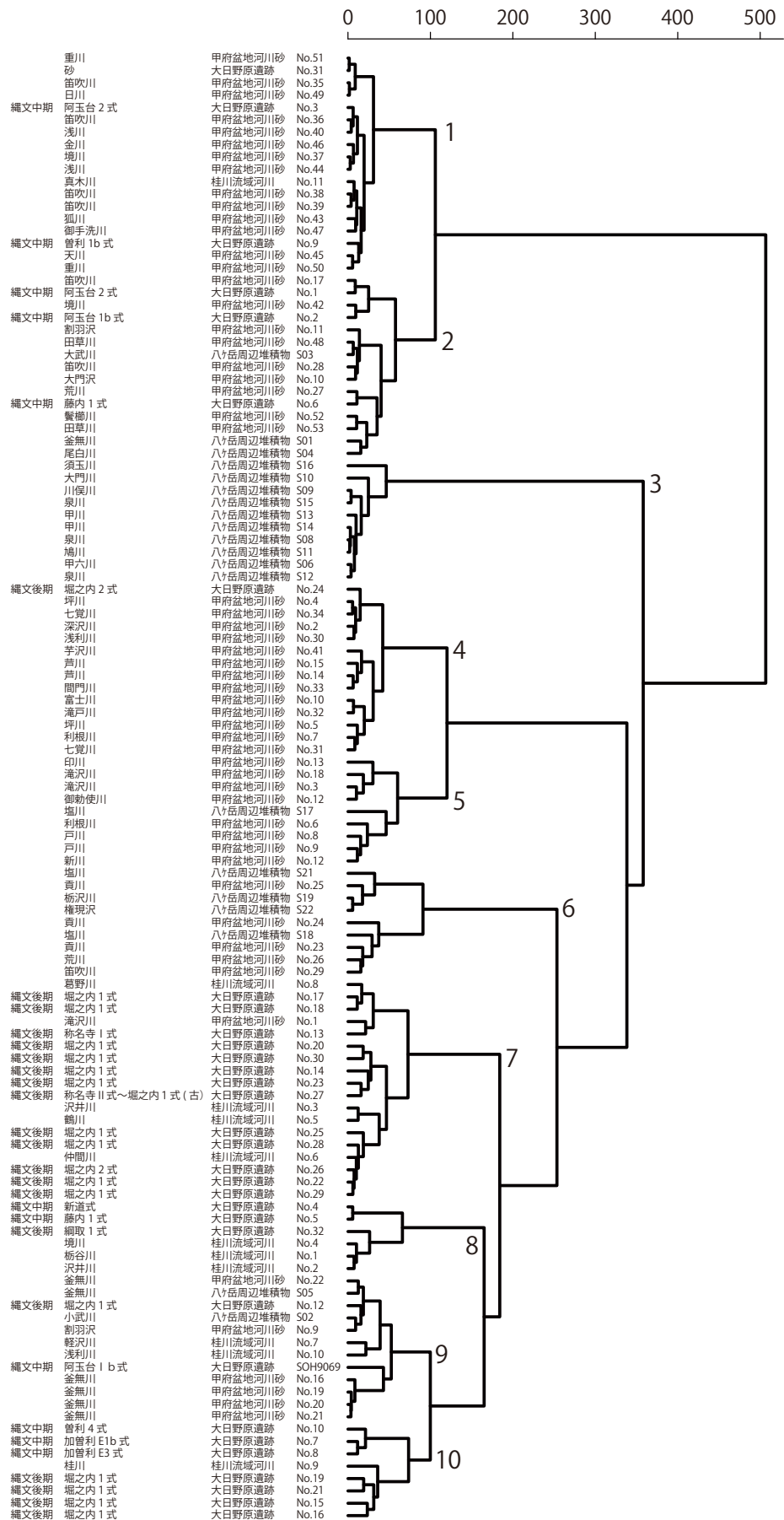


図 51 土器と山梨県内河川砂とのクラスタ分析樹形図

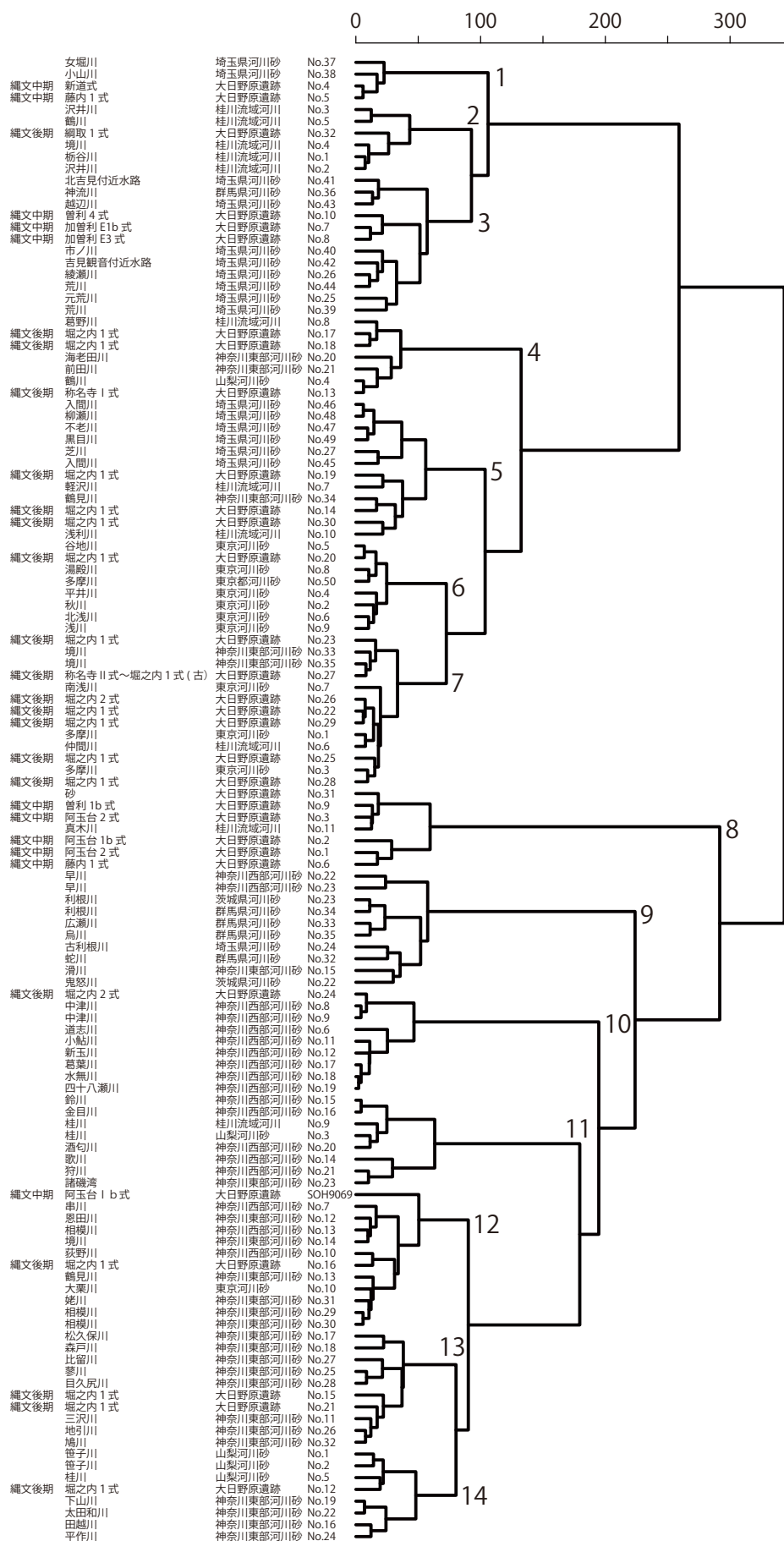


図 52 土器と西関東河川砂とのクラスタ分析樹形図

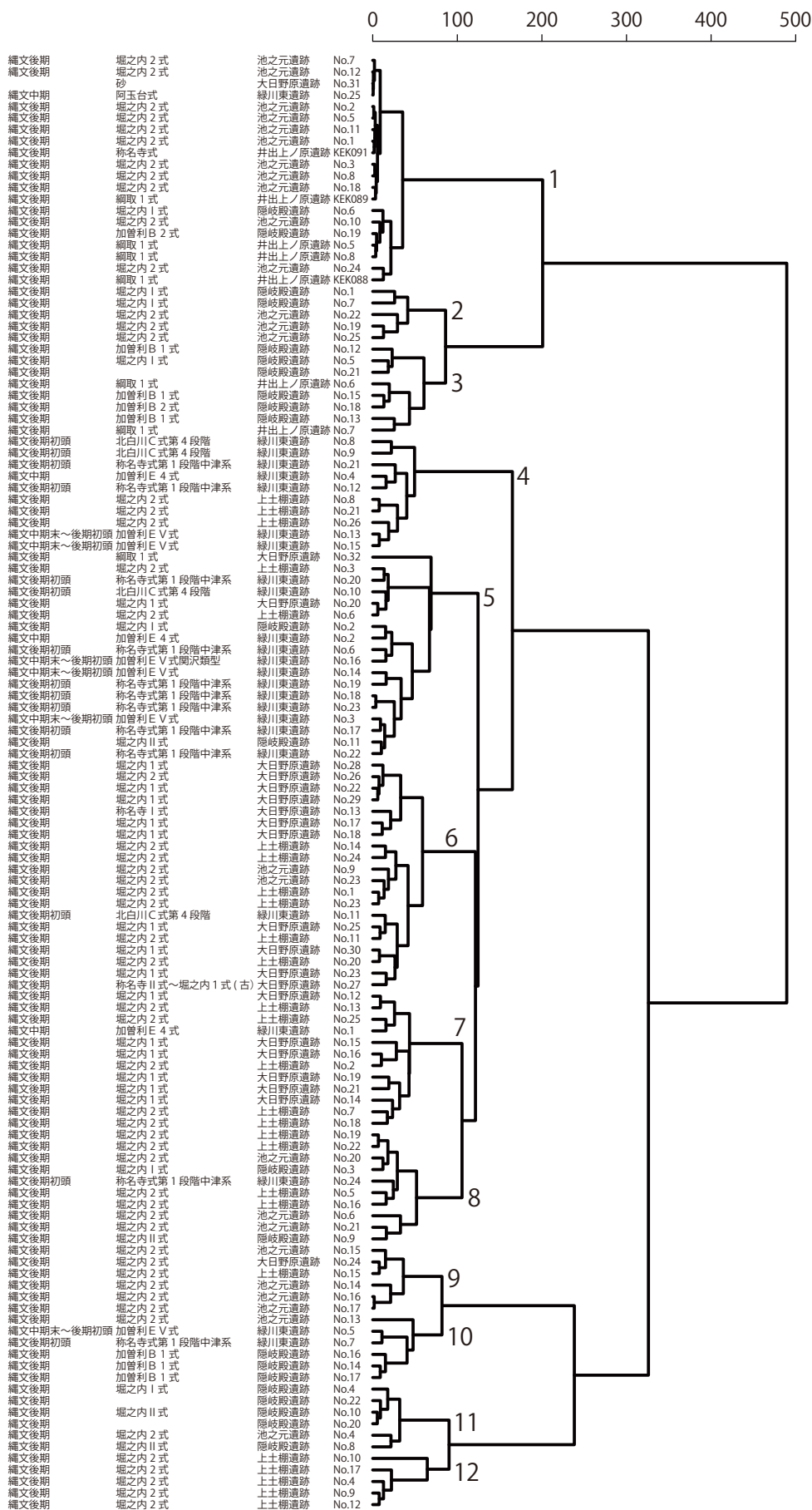


図 53 縄文後期土器のクラスタ分析樹形図

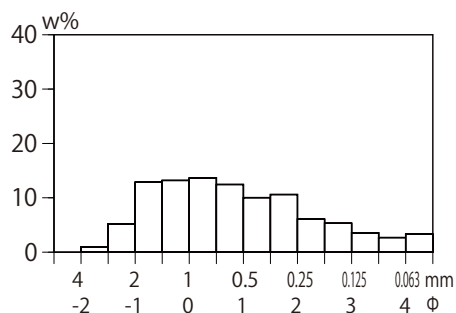


表 27 篩分け法による粒度指標

(Folk and Ward(1957) の図解放による)

	大日野原遺跡2住砂No.31	
中央粒径(φ)	0.66	粗粒砂
平均粒径(φ)	0.82	粗粒砂
分級度	1.46	悪い
歪度	0.21	正の歪み
尖度	0.94	中間的

図 54 篩分け法による粒径頻度分布図 (No.31)

井川・境川・鶴川の河川砂とともにクラスタ2、図53でクラスタ5に含まれる。遺跡周辺河川砂との類似性が高いことから原料産地が地元へ推定される在地的な土器であると考えられる。なお、福島県井出上ノ原遺跡の綱取1式は、花崗岩類を主体とする組成が特徴で図53でクラスタ1・3に含まれており、本遺跡No.32とは異なる胎土を示す。図51・52で同一のクラスタを構成していた大日野原No.4新道式、No.5藤内式は、ホルンフェルスが多い点で沢井川・栃谷川の河川堆積物の肉眼観察から在地的要素が高い岩石鉱物組成を示すとされていた(河西2013a)が、今回の分析で明確に粘板岩/千枚岩で特徴付けられる在地的土器であると推定された。大日野原遺跡Nos. 4、5とともにホルンフェルスが多いとされたNo.7加曽利E 1b式、No.8加曽利E 3式、No.10曾利IV式も、同様に在地的土器と推定される。

(3) 3次調査SI02号住居跡の砂試料 (No.31)

試料は、角張った粒子が目立つ砂試料で、シルト～粘土からなるマトリクスを含まないことから、含砂率は100%となっている。岩石鉱物組成では、花崗岩類が8割以上を占め、石英・斜長石をわずかに伴う。重鉱物の含有は少なく、重鉱物組成では黒雲母>角閃石で、緑泥石をわずかに含む。No.31は、表26でG類に、図51で笛吹川水系河川砂および真木川河川砂とともにクラスタ1に、図52で真木川河川砂とともにクラスタ8、図53でクラスタ1に含まれる。花崗岩類とその構成鉱物からほとんど構成されることから花崗岩類地域に由来する砂である可能性が推定される。一方、篩分け法による粒径頻度分布図および粒度指標からは、粗粒で分級の悪い特徴が認められる(図54、表27)。これらの特徴は、山梨県前付遺跡周辺の蟹沢川Sm-3河川砂(河西2015b)とも類似する部分はあるものの、角張った粒子が目立つこと、ほとんど花崗岩類とその構成鉱物から構成されることなどから、人為的に花崗岩類礫を粉碎した可能性も排除できない。No.31は、土器の混和原料の可能性が指摘されている比較的粒揃いの良い中粒砂からなる前付遺跡SI29号住内貯蔵砂あるいは多摩ニュータウンNo.72遺跡329号住砂ブロックなどとは異なるが、土器の混在材の可能性の有無について、今後さらに検討してみたい。

おわりに

大日野原遺跡出土縄文後期土器の分析を周辺の桂川流域河川砂や3次SI02住居跡内検出の砂試料の分析とあわせて行った。その結果、遺跡周辺の桂川流域の河川堆積物中には、四万十帯に由来する粘板岩/千枚岩などの変成岩類が特徴的に認められ、これらの特徴を示すNo.32綱取I式、縄文中期No.4新道式、No.5藤内式、No.7加曽利E 1b式、No.8加曽利E 3式、No.10曾利IV式などが在地的土器と推定された。堆積岩主体の土器は、桂川流域、および相模川・多摩川間の地域などに原料産地が推定された。変質火山岩類の多い土器は、玄武岩の含有率も高く、相模川流域周辺に原料産地が推定された。玄武岩の多い土器No.19は、花崗岩類が分布する桂川流域との関連性が推定された。

縄文中期土器では、粘板岩/千枚岩を含む遺跡周辺地質の局所の特徴を反映した土器が多く存在するのに対し、縄文後期土器ではこれらの特徴を顕著にもつ土器がわずかであることから、大日野原遺跡においては地元原料を用いた土器作りが見かけ上減少した可能性があるのかもしれない。他遺跡の縄文後期土器との比較では、相模野台地上の上土棚遺跡との類似性が堆積岩主体土器や変質火山岩類が多い土器などで認められる。

註

桂川流域河川砂の同定では粘板岩 / 千枚岩を變成岩類として識別し、その他の變成岩類として表現している。河西（2013a）のホルンフェルスとした一部に今回粘板岩 / 千枚岩とした岩石が含まれている。また今回の土器 Nos.12 ～ 30 の同定では、泥質岩の一部に桂川流域河川砂において粘板岩 / 千枚岩と分類された岩石を含む可能性がある。

文献

阿部芳郎・河西学 (1994) 「綾瀬市上土棚遺跡出土の縄文後期土器の胎土分析」『綾瀬市史研究』、創刊号、21-52。

河西学 (1989) 「甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成—土器胎土分析のための基礎データ—」『山梨考古学論集Ⅱ』505-523。

河西学 (1995) 「市兵衛谷遺跡第Ⅱ群土器の胎土分析」『市兵衛谷遺跡・新道遺跡』綾瀬市埋蔵文化財調査報告、4、89-108。

河西学 (1997) 「池之元遺跡の堀之内Ⅱ式土器の胎土分析」『池之元遺跡発掘調査報告書』、富士吉田市史資料叢書、14、154-168。

河西学 (1999) 「綾瀬市上土棚南遺跡出土縄文後期土器の胎土分析」『綾瀬市史研究』、6、13-43。

河西学 (2006) 「下宅部遺跡出土の加曽利 B2 式土器の胎土分析」『下宅部遺跡Ⅰ (Ⅰ)』東村山市遺跡調査会・下宅部遺跡調査団、277-300。

河西学 (2011) 「隠岐殿遺跡出土縄文後期土器の胎土分析」『隠岐殿遺跡Ⅱ』韮崎市教育委員会、98-105。

河西学 (2013a) 「大日野原遺跡出土縄文中期土器の胎土分析」『大日野原遺跡—第3次発掘調査—遺構編』中央大学文学部考古学研究室調査報告書 2、中央大学文学部考古学研究室・相模原市教育委員会、32-37。

河西学 (2013b) 「井出上ノ原遺跡出土土器の胎土分析」『井出上ノ原遺跡—2006・2007 年度発掘調査—』中央大学文学部考古学研究室調査報告書、1、74-80。

河西学 (2014) 「岩石鉱物組成からみた阿玉台式土器の土器作り」『公開シンポジウム「混和を伴う縄文時代の土器作り—阿玉台式土器と土器原料—」資料集』24-51。

河西学 (2015a) 「緑川東遺跡出土縄文土器の岩石学的手法による胎土分析」『緑川東遺跡—第28地点—』(株)ダイサン編、80-90。

河西学 (2015b) 「前付遺跡出土貯蔵砂・粘土塊・土器の岩石鉱物分析」『前付遺跡・大祥寺遺跡』、笛吹市文化財調査報告書、第31集、298-307。

河西学 (2018) 「土器胎土からみた縄文土器の混和材—多摩ニュータウン No.72 遺跡、No.245 遺跡の事例—」『帝京大学文化財研究所研究報告』、第17集、83-99。

河西学・櫛原功一・大村昭三 (1989) 「ハケ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」帝京大学山梨文化財研究所研究報告、第1集、1-64。

酒井彰 (1987) 「五日市地域の地質」地域地質研究報告 (5 万分の1 地質図幅)、地質調査所、75p。

Folk,R.L. and Ward, W.,1957, Brazos river bar; a study in the significance of grain size parameters. J. Sed. Petrol., 27, p.3-26.

(4) 大日野原遺跡における光ルミネッセンス法を用いた土器資料の被熱温度推定

下岡順直（立正大学地球環境科学部）

小林謙一（中央大学文学部）

1 はじめに

大日野原遺跡で出土した縄文土器資料について、ルミネッセンス法による被熱温度推定（例えば、長友ほか 2003；西村ほか 2007；下岡 2016）を行った。ルミネッセンス法では、石英や長石など測定対象鉱物を対象として、被熱履歴を推定することができる。ルミネッセンスを用いた被熱履歴の評価方法については、熱ルミネッセンス（TL）グローカーブ形状法や TL 感度法、赤外光ルミネッセンス（IRSL）感度変化法などがある（小畑・下岡 2015）。今回は、測定する試料の扱いが容易で、かつ対象物が露光していても被熱履歴の評価が可能な IRSL 感度変化法を用いて被熱温度推定を行った。IRSL 信号は、露光のみで加熱が生じなければ放射線量に対する IRSL 強度はほぼ変化しない（Rhodes 2011 など）とされている。IRSL 感度変化法では、このような特性を活かして被熱温度推定を行う。

今回対象とした 5 点の縄文土器資料（土器 1～5）の考古学的情報を、表 28 に示す。

表 28 縄文土器試資料の考古学的情報と推定した被熱温度

	資料番号	注記	部位	時期	重量（g）	X	Y	Z	推定被熱温度
土器 1	SOH13	11150	口縁部	猪沢	23.9	-41099.647	-62209.716	386.848	600～700℃
土器 2	SOH14	15358	胴部	堀之内 1	53.1	-41105.942	-62201.625	260.229	600～700℃
土器 3	SOH13	12895	胴部	堀之内 1	40.5	-41104.179	-62202.282	387.961	800～900℃
土器 4	SOH13	12033	口縁部	堀之内 1	22.0	-41097.718	-62204.424	260.165	500～600℃
土器 5	SOH16	20229	底部	後期	62.6	-41103.858	-62202.912	260.103	600～700℃

2 試料処理と IRSL 測定

測定前試料処理は、約 180 ℓ x の蛍光灯下で行った。土器資料はすでに洗浄後されているので、土器表面の除去は行わなかった。また、測定のために提供していただいた土器資料は 22～63 g と大きかったため、岩石カッターを用いて 3～10 g 程度を切り出して試料とした。

試料処理は、まず、乳鉢を用いて土器資料を粉碎し、標準ふるいで粒度 50 μm 以下を選別した。そして、10%過酸化水素水処理を一晩行って有機物を除去し、20%塩酸による処理を 60 分間行って炭酸塩鉱物を除去した。最後に、超純水で洗浄して乾燥した（以下、「ナチュラル試料」）。

「ナチュラル試料」はガラスシャーレに移し、約 18～20 kℓ x に設定した人工太陽システム（セリック社製 SOLAX XC-100B 形）を用いて 8 時間露光処理して、OSL 信号を人為的にゼロリセットした。「ナチュラル試料」は、露光処理のみで加熱処理無し測定試料（以下、「露光試料」）と、露光処理後に電気炉を用いて 300～900℃（土器 1 は試料量の都合で 300～800℃）まで 100℃刻みで 1 時間加熱処理を行った測定試料（以下、「加熱処理試料」）を用意した（図 55）。

IRSL 測定は、立正大学に設置してある OSL/TL 自動測定装置 NRL-99-OSTL2-KU（下岡ほか 2015）を用いて行った。「露光試料」と「加熱処理試料」は、小型 X 線管球（下岡ほか 2015）を用いて 10 Gy 照射後、IRSL 測定をした（図 1）。IRSL 測定条件は、励起波長 890 ± 30 nm、検出波長 350～600 nm（半値幅）とし、160℃で 60 秒間プレヒート（測定前の加熱処理）後、測定温度 60℃で 100 秒間行った（下岡・長友 2001）。

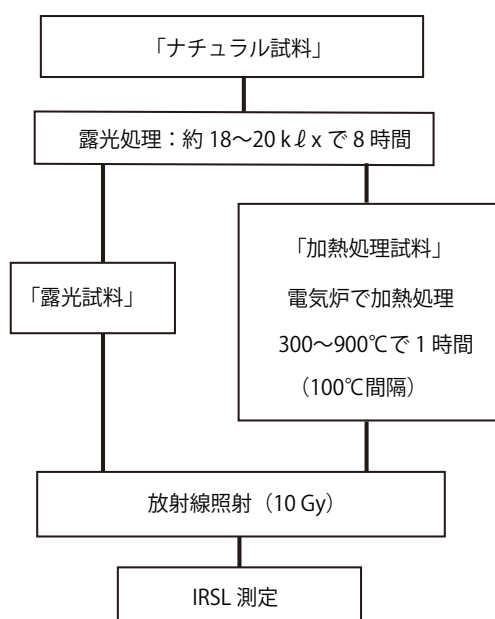


図 55 IRSL 感度変化法による被熱温度推定の測定手順

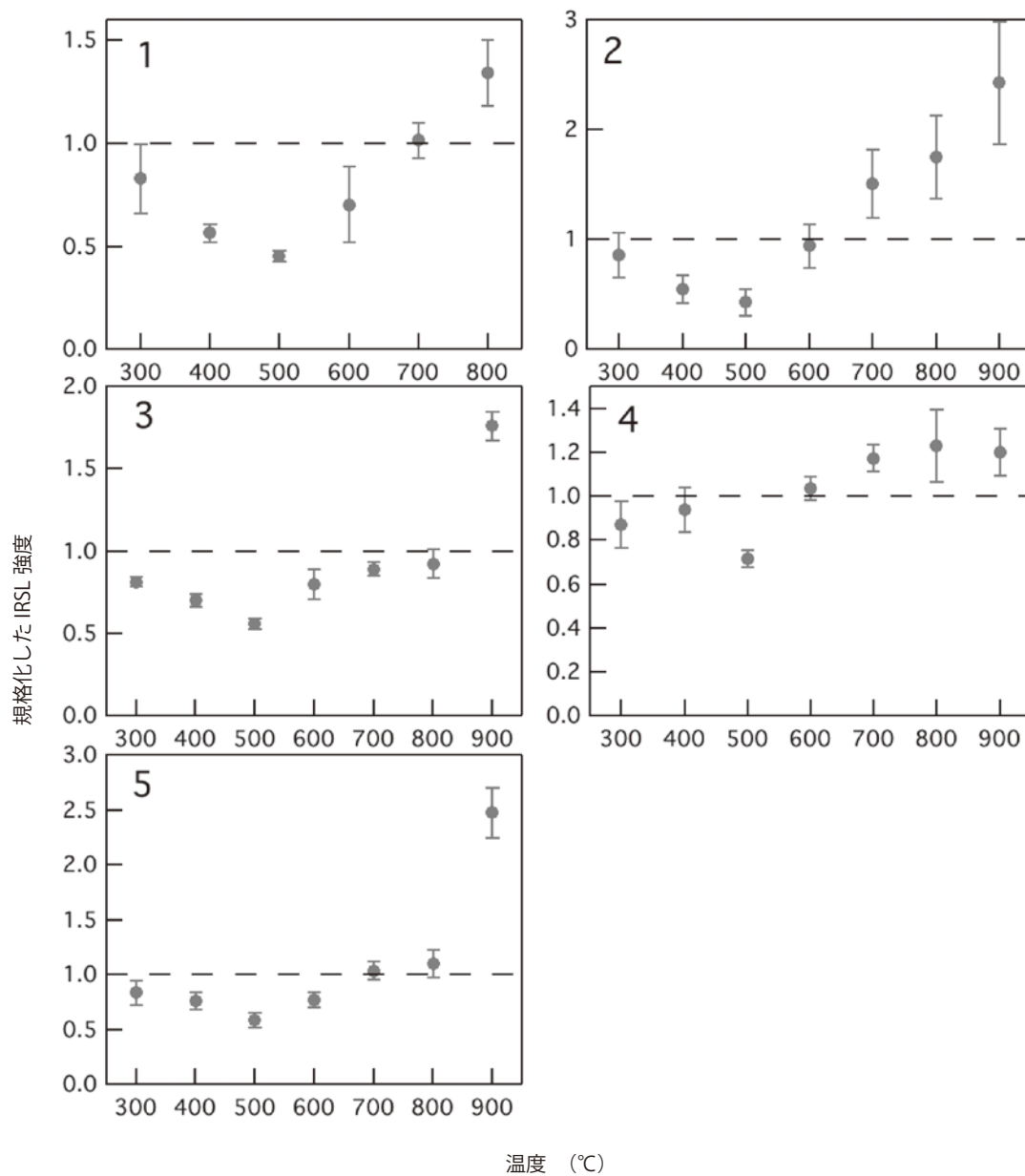


図 56 縄文土器資料における段階加熱による IRSL 強度の感度変化
 縦軸は、「加熱処理試料」の IRSL 強度を「露光試料」の IRSL 強度で規格化した値
 横軸は、加熱処理温度

3 結果と考察

測定した 40 ～ 80 秒間の IRSL 強度を積算し、「加熱処理試料」の IRSL 強度を、「露光試料」の IRSL 強度で規格化した。測定した縄文土器資料ごとに、段階加熱による IRSL 感度変化の結果を図 56 に示す。土器 1 は、600℃までは IRSL 強度は 1 を下回るが、700℃では IRSL 強度がほぼ 1 で、800℃では IRSL 強度が 1 を超えた。土器 2 は、600℃までは IRSL 強度は 1 を下回るが、700℃以上では IRSL 強度が 1 を超えた。土器 3 は、800℃までは IRSL 強度は 1 を下回るが、900℃では IRSL 強度が 1 を超えた。土器 4 は、500℃までは IRSL 強度は 1 を下回るが、600℃では IRSL 強度がほぼ 1 で、700℃では IRSL 強度が 1 を超えた。土器 5 は、600℃までは IRSL 強度は 1 を下回るが、700℃では IRSL 強度がほぼ 1 で、800℃では IRSL 強度が 1 を超えた。

IRSL 被熱温度推定では、次の方法で被熱温度を推定する。過去の被熱温度を T_0 、電気炉による加熱処理温度を T_1 とする。同一試料で同じ被ばく放射線量のとき、電気炉による加熱処理温度が過去の被熱温度を超えない時、すなわち $T_0 > T_1$ もしくは $T_0 = T_1$ の場合、「露光試料」の OSL 強度に対して「加熱処理試料」の OSL 強度の感度変化はほとんど生じないもしくは小さい。これに対して、電気炉による加熱処理温度が過去の被熱温度を超えた時、すなわち $T_0 < T_1$ の場合、OSL 強度は感度変化を生じ、「露光試料」に対して「加熱処理試料」は系統的に増加変化をする。そこで、OSL 強度が「露光試料」とほぼ同じで維持もしくは少し減少した後に OSL 強度が増加へ変化する温度に着目すると、過去の被熱温度は OSL 強度感度が増加へ変化する温度付近であると推定できる。つまり、IRSL 強度が低温側からみて IRSL 感度の増加変化を起こし、かつ、「露光試料」の IRSL 強度を超える（例えば、図 2 の縦軸で 1 を超える）最初の変化点付近を被熱温度として推定する。この判定方法を用いて、縄文土器資料の被熱温度を推定した。

縄文土器資料の被熱温度は、図 2 の IRSL 感度変化の結果より、土器 1 では約 600 ～ 700℃程度、土器 2 では約 600 ～ 700℃程度、土器 3 では約 800 ～ 900℃程度、土器 4 では約 500 ～ 600℃程度、土器 5 では約 600 ～ 700℃程度に被熱した可能性が示された(表 1)。

土器 4 (口縁部) は 600℃以下という結果であり、それ以外はいずれも 700℃前後、もしくは 700℃以上の高温による熱履歴があったという結果になった。特に、土器 3 の推定被熱温度は 800℃以上であった。縄文土器資料の熱履歴については、土器の用途にも関することから、測定点数を増やしつつ、出土状況などとの関係も考慮して、今後更に考察を深めたいと考える。

謝辞

中央大学大学院の西本志保子さんと金子悠人さんには、縄文土器資料の選定で協力していただいた。記して感謝申し上げます。本分析には、日本学術振興会科研費基盤研究 (B) JP18H00744 の一部を使用した。

引用文献

- 長友恒人・西村誠治・柴田昌児 (2003) 「TL/ESR 測定による被熱変形した弥生土器の被熱温度推定」『日本文化財科学会第 20 回大会研究発表要旨集』、74-75.
- 西村誠治・長友恒人・鐘ヶ江賢二・長友朋子 (2007) 「IRSL 法による弥生土器の被熱温度推定」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』、36-37.
- 小畑直也・下岡順直 (2015) 「ルミネッセンス法による被熱履歴推定の概要」『地質技術』5、29-35.
- Rhodes, E.J. (2011) Optically stimulated Luminescence Dating of sediments over the Past 200,000 years. Annual review of Earth and Planetary Science, 39, 461-488.
- 下岡順直・長友恒人 (2001) 「石英・長石を試料とした光励起ルミネッセンス年代測定法の基礎研究」『Radioisotopes』50、381-389.
- 下岡順直・波多野智・田邊和明・森美比古・青木智史・阪江 修 (2015) 「OSL/TL 自動測定装置 NRL-99-OSTL2-KU の設計製作と X 線管球の線量率較正」『地球環境研究』17、107-110.
- 下岡順直 (2016) 「福井洞窟 12・13 層炉跡の OSL を用いた赤色化土壌の被熱温度推定」『史跡福井洞窟発掘調査報告書』佐世保市文化財調査報告書第 14 集、288-290.

4 まとめ

以上をもって、相模原市大日野原遺跡の調査成果の報告とする。本遺跡は、1953年の立川市立高等学校による調査（現都立北多摩高等学校）を第1次調査（藤野町文化財保護審議会編 1978）、藤野町による発掘調査（第3次調査地点にかかる地点で平安時代の住居3軒などを確認）（滝澤ほか 1988）を2次調査と数えられ、それ以外にも学芸大学による藤野町分布調査（土井義夫、渋谷芳浩、黒尾和久氏らの教示による）や、相模原市立博物館ボランティアによる分布調査などがおこなわれている、縄紋時代中期の大規模かつほぼ完全に残っている集落遺跡として著名である。また、土偶付き土器が発見された遺跡としても知られている（相模原市立博物館 2019）。

本遺跡の発掘調査に至るにあたっては、2008年度に中央大学文学部に赴任した小林が、科研費での学術調査をおこなう遺跡について相模原市立博物館に相談したところ、当時の大貫館長と河本学芸員から、旧藤野町に所在し相模原市域に合併された大日野原遺跡の性格解明のための調査を提案していただき、相模原市立博物館、相模原市教育委員会との共同研究として調査をおこなう運びとなった。

中央大学による調査のうち、2008年～2011年におこなった第3次調査については、2013・2014年度に中央大学考古学研究室調査報告書2・3として報告書を刊行した。3次調査においては、縄紋中期堅穴住居跡9軒、土坑4基、柱穴2基、古代のピット4基、近代以降の耕作坑多数を確認し、うち堅穴住居4軒、土坑などについて調査をおこなった。

2012年度より2016年度において、本報告で示す第4次調査をおこなった。本地点は、調査において協力をいただいていた相模原市立ふるさと自然体験教室「ふじの体験の森やませみ」より、子どもの体験教室の場として用いている畑地について、使用しない時期があるので地主の許可が得られれば調査してもよいとの申し出をいただく。そこで、地主である鈴木實氏にお願いしたところ快諾を得たため、相模原市教育委員会と諮って、大日野原遺跡の規模確認、内容解明のために調査することとした次第である。

その結果、本書に記すように、縄紋時代中期～後期の遺物多数の他、縄紋後期の住居2基、屋外埋甕1基、後晩期のいずれかに帰属すると思われる貯蔵穴と思われる土坑1基、ピット4基、古代の堅穴住居1基、円形土坑12基、中近世以降の耕作坑20基が検出された。縄紋時代に調査成果としては、3次調査で主体であった中期中葉～後葉の遺物はほとんど出土せず、4次調査区北側のⅢb層主体に中期前半の土器、南側のSI14を中心にⅢa層を包含層として後期の土器が多く検出され、遺跡における利用痕跡の時期的な拮抗りが確認できたことは、大きな成果であった。

大日野原遺跡の調査を続けてきた背景としては、科学研究費補助事業の研究の柱であった年代測定研究を応用した縄紋中期集落の実態解明の一助とすることが大きな目的であったが、それとともに、相模原市が最近合併することで市域に含めた津久井地域の豊かな縄紋時代の歴史を解明することによって地域史復元し、その成果を地域社会に還元することであった。また、中央大学の考古学教育の一部として考古学実習及び日本史演習（3年ゼミ）・大学院教育、さらには考古学研究会の実習体験の場とすることも含まれていた。地域への還元としては、藤野中央公民館の協力を得て、親子発掘体験や、現地説明会をほぼ通期的におこなったことや、相模原市立博物館の展示や市民研究会にその成果を示したことで、多少とは言え果たしたと考えている。考古学教育について言えば、毎年30名近い学生・院生が参加したばかりか、中央大学以外の各大学からも参加者が多く、予想以上に考古学教育に果たした役割があったのではないかと考えている。思えば、発掘を始める当初に、渋谷芳浩氏から、多くの関心のあるものが参加できる発掘調査のオリンピックを意識しなさいと言われたことがあり、到底果たしえないと考えていたが、結果的には多少ともその理想に近づけたのではないかと考えている。このほか、縄紋集落のセツルメント研究会や発掘調査技術の検討会、国立歴史民俗博物館共同研究の場など、研究においても様々な形で大日野原遺跡の発掘調査が貢献できたこと幸いである。

本報告において、自然化学分析をはじめ、多くの分析を試みたが、当初の目的である縄紋中期の年代的研究についても、大日野原遺跡の実態解明についても、道半ばである。今度もさらに検討を深めていきたい。

発掘調査・整理作業をおこなうにあたり、多くの機関、関係者にお世話になりました。また、調査には日本学術振興会科学研究費補助金・中央大学研究費を利用いたしました。深く感謝いたします。（小林謙一）

謝辞

鈴木實・裕子（土地所有者）、相模原市教育委員会、相模原市立博物館、藤野中央公民館、沢井公民館、自然体験教室やませみ、中央大学文学部

参考文献

相模原市立博物館 2019『大日野原遺跡資料調査報告書』相模原市立博物館考古資料調査報告書2
滝澤亨ほか 1988「大日野原（ケッサイコ）遺跡の調査」『会報文化財』10号 藤野町教育委員会
藤野町文化財保護審議会編 1978『ふじ乃町の埋蔵文化財』藤野町教育委員会
藤野町 1994『藤野町史』資料編上

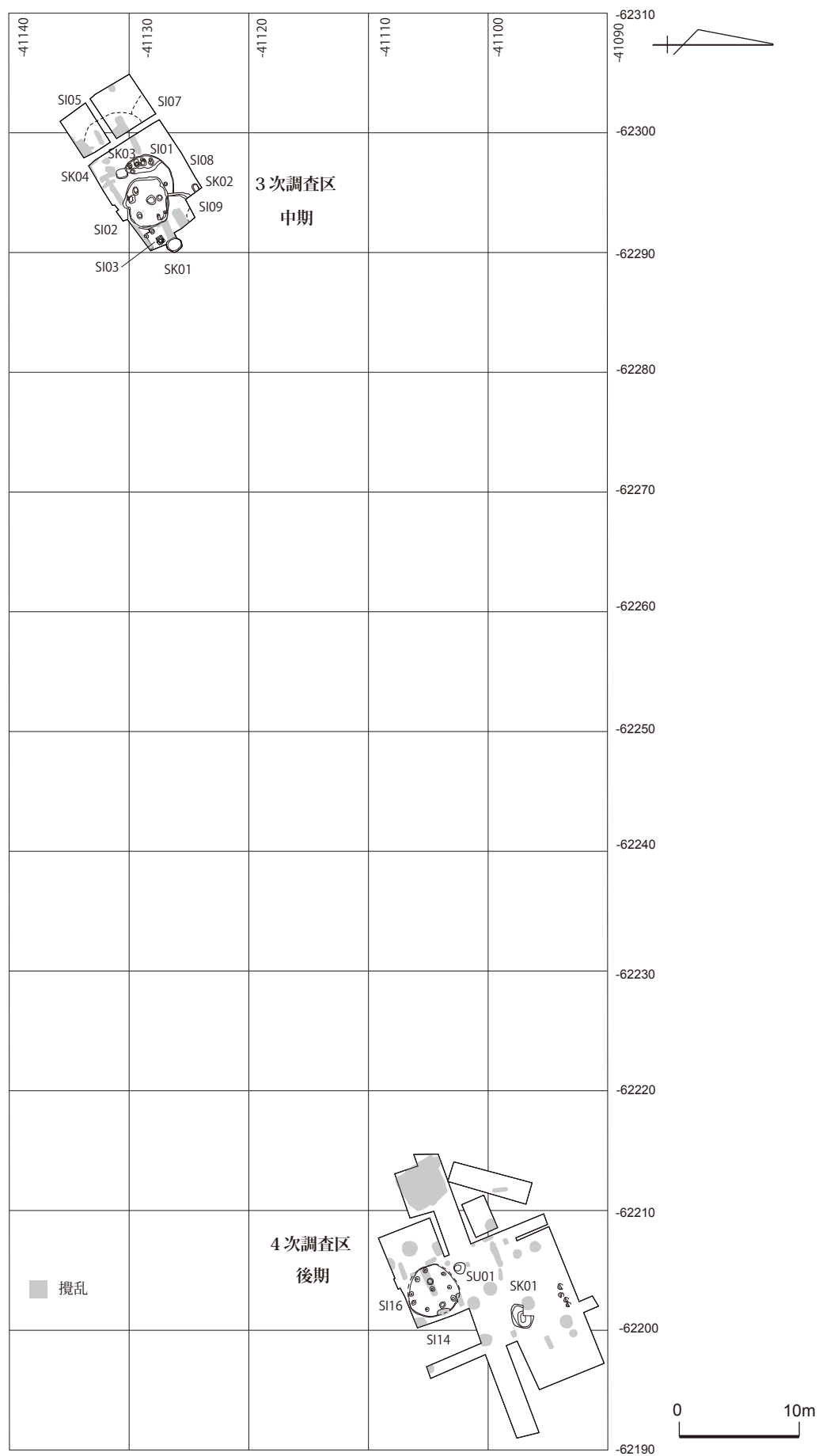


図 57 大日野原遺跡第 3 次・第 4 次調査区 縄文時代遺構分布 (1/500)

報告書抄録

ふりがな	おびのっばらいせき							
書名	大日野原遺跡							
副書名	第4次発掘調査							
シリーズ名	中央大学文学部考古学研究室調査報告書							
シリーズ番号	5							
編著者名	小林謙一・中川雅人・西本志保子・小澤政彦・大野朝日・金子悠人・小林尚子 ほか							
編集機関	中央大学文学部考古学研究室							
所在地	東京都八王子市東中野 742-1							
発行年月日	2020 年 5 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おびのっばらいせき 大日野原遺跡	おひのっばらいせき 神奈川県相模原市 緑 区 大日野原ケツサイコ 724	14-209	465	35° 37′ 41″	139° 08′ 49″	2012.8.729 ～ 8.8 2013.7.29 ～ 8.8 2014.7.28 ～ 8.8 2015.7.30 ～ 8.7 2017.3.13 ～ 3.23	186.93㎡	学術調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大日野原遺跡	集落跡	縄文 古代		住居跡 (2) 屋外埋襲 (1) 土坑 (1) 竪穴住居 (1) 土坑 (12)		縄文土器 縄文石器 土師器 須恵器		

中央大学文学部考古学研究室調査報告書 5

大日野原遺跡

－第4次発掘調査－

2020 年 3 月 31 日

編集・発行 中央大学文学部考古学研究室
相模原市教育委員会

〒 192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

TEL042-674-2814

印刷 株式会社ワコー印刷



2012 年度 調査風景（西から）



2013 年度 調査風景（北西から）



2013 年度 調査風景（南東から）



2014 年度 調査風景（南から）



2014 年度 地中レーダー調査風景（西から）



2015 年度 SI14 調査風景



2016 年度 調査風景（東から）



2016 年度 調査風景（西から）



2013 年度 体験発掘



2015 年度 体験発掘



2014 年度 現地説明会



2013 年度 調査参加者



2015 年度 調査参加者



2012 年度 調査区全景（東から）



2014 年度 調査区全景（北から）



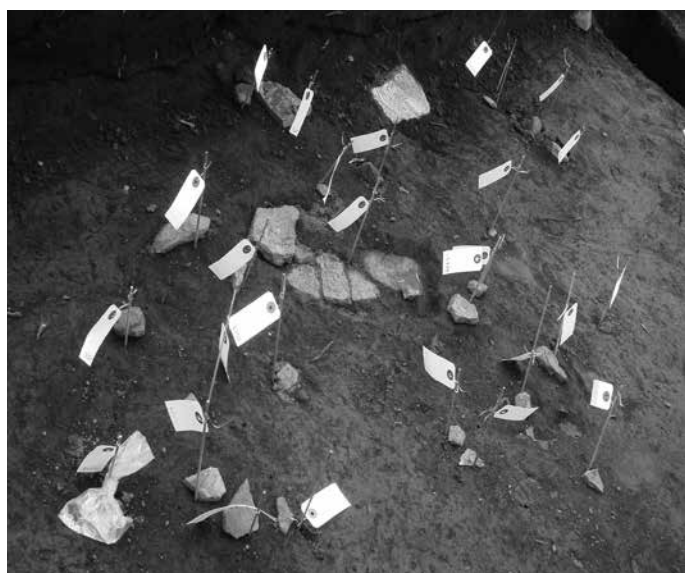
2015 年度 調査区全景（北東から）



SI14 住居跡遺物集中 遺物出土状況



SI14 住居跡遺物集中 遺物出土状況



SI14 住居跡 遺物出土状況 (K100 など)



SI14 住居跡掘り上がり (南から)



SU01 屋外埋甕確認状況 (東から)



SU01 屋外埋甕出土状況 (東から)



SK01 土坑（東から）



SK 02 土坑（北から）



SI10 住居跡（南から）



SK 06 土坑（南から）



SK 08 土坑（西から）



SI14 住居跡出土土器 1



SI14 住居跡出土土器 2



SI14 住居跡出土土器 3



SI14 出土土器個体資料 K100



SU01 屋外埋喪



SU01 出土土器 破片展開



SU01 屋外埋藏覆土内出土土器



SK01 出土土器



遺構外出土土器 1



遺構外出土土器 2



遺構外出土土器 3



遺構外出土土器 4



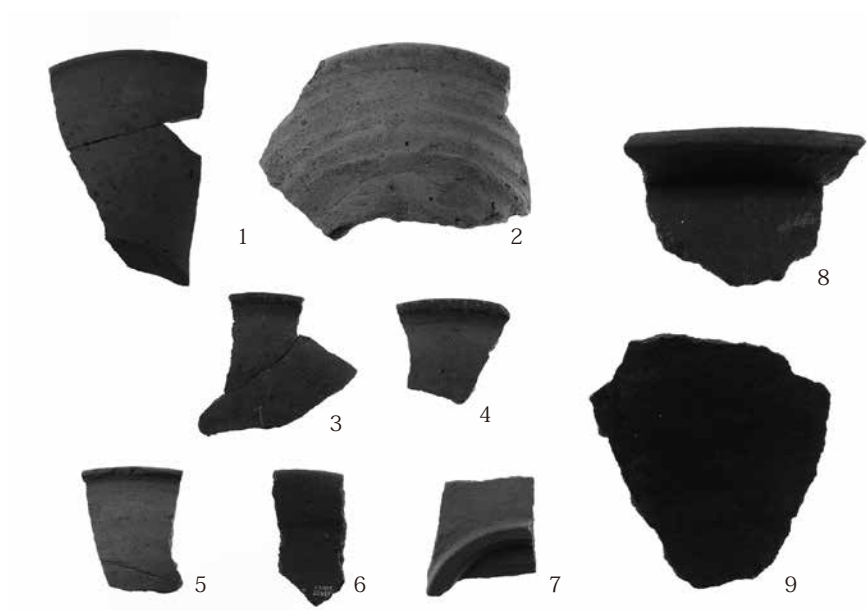
遺構外出土土器 5



遺構外出土土器 6



出土土製品



SI10 住居跡出土土器